

満洲日系高等教育研究機関と戦後同窓会に関する歴史社会学的考察
卒業生による戦後の活動および各同窓会における満洲記憶について

目次

序章.....	4
(一)、問題意識と研究目的.....	4
(二)、研究史概観.....	7
1、 満洲高等教育研究機関における人材養成についての研究.....	8
2、 建国大学に関する研究.....	10
3、 満洲における反満抗日運動とイデオロギー.....	14
4、 同窓会と外交関係.....	15
(三)、研究課題と方法.....	17
(四)、各章の内容および分析視角.....	18
(五)、史料状況.....	20
第一部 満洲国の高等教育機関とその同窓会——歴史学的概観.....	26
第一章、 満洲国の高等教育機関政策と高等教育機関.....	26
第一節、満洲国における高等教育機関.....	26
1、 満洲医科大学.....	26
2、 哈爾浜工業大学.....	28
3、 新京工業大学.....	29
4、 建国大学.....	31
第二節、関東州における高等教育機関.....	32
5、 旅順工科大学.....	32
第二章、各教育機関の概要と同窓会の特徴.....	34
第一節、戦後同窓会の規模.....	34
第二節、戦後同窓会の活動の特徴——輔仁会を中心にする.....	36
第三節、戦後同窓生のキャリア——輔仁会を中心にする.....	39
第四節、戦後同窓会と外交関係.....	40

第五節、語りと記憶	43
1、 日本人同窓生の語り。	43
2、 中国人同窓生の語り。	48
第二部 満洲建国大学とその同窓会	55
第一章 建国大学の概要	55
第一節、満洲国の建国理論と建国大学の創設	55
第二節、建国大学の概要	59
第二章 建国大学とイデオロギー	61
第一節、建国大学の創立者たちのイデオロギーと建国大学の建学	61
第二節、建国大学教育者のイデオロギー	65
第三節、建国大学学生の自己認識(中国人学生を主として)	68
第三章 建国大学における反満抗日運動	70
第一節、日系高等教育機関における反満抗日運動の展開	70
第二節、学生読書会と反満抗日運動	72
第三節 反満抗日運動の影響	76
第四章 建国大学の崩壊	83
第一節、作田副総長の辞任——管理層の問題	83
第二節、建国大学における学生間の軋轢	85
第三節、回想文集に記録された建国大学の崩壊	89
第五章 建国大学の同窓会	99
第一節、同窓会の概況	99
第二節、建国大学同窓会と国際交流	108
第三部 理論的考察	111
同窓会の語りと記憶再構成	111
集合的記憶の理論展開と記憶の場理論	116
第一章 同窓会報における満洲記憶	120
第一節、所属組織別で考察された会報	120
第二節、時代別で反映された内容	122
第二章 日本人同窓生の語りと記憶	124
第一節、満洲大陸に対する語りと記憶	124

第二節、引き揚げの記憶.....	126
第三節、思い出、物故者に対する弔意など.....	128
第三章、中国人同窓生の語りと記憶.....	130
第一節、反満抗日運動.....	130
第二節、中国革命に参加する.....	138
第三節、新中国建設への貢献.....	143
第四章、他の出自の同窓生の語りと記憶.....	146
第一節、台湾同窓生の語りと記憶：.....	146
第二節、韓国同窓生の語りと記憶.....	149
結論.....	155

序章

(一)、問題意識と研究目的

日中戦争が終了してからすでに 70 余年になる。1972 年の日中国交正常化から数えでもすでにほぼ半世紀を迎えようとしている。第二次世界大戦の歴史は、現在までの日中関係にいまなお重大な影響を及ぼしている。傷ついた記憶を直視し、歴史について共通の認識と記憶を追求するべきであろう。しかし、日本による侵略を受けた国として、中国では、現在までも戦争期の解釈においては民族主義的な色彩が濃厚である。他方、近年、国際社会における保守主義の台頭とともに、諸国は自国の文化の特徴を強調し、自民族の優位性を唱える段階に戻ったかのようである。こうして政治思想の分野では保守主義への回帰が見られ、一方、経済活動分野では保護主義が台頭している。冷戦後の自由主義の曙光は今では残照となってしまった。

満洲の高等教育機関では、多様な出自の学生、すなわち日本人、中国人(満系)、朝鮮人(当時は日本国籍)、台湾人(当時は日本国籍)、モンゴル系、白系ロシア人等々が同一の大学でともに学び、同一の学生寮でともに生活していた。日本敗戦後、日本人学生と教育機関の職員の引き揚げと共に、当初は善後処理という目的として創設された満洲高等教育機関の同窓会は、その後、日本社会で親睦の目的で活動を継続してきた。一方、満洲高等教育機関で学んだ日本以外の様々な出自の学生たちは、戦後、自らの国・地域に戻り、それぞれの社会においてさまざまな活動を展開し、そのなかで同窓と連絡を取り、さらに自らの社会ではエリートとして活躍していた。日本が他国と国交を樹立する際、戦後同窓会は、民間組織として国際的な技術交流活動や訪問活動などを通じて、日本と隣国の間で友情の架橋という役割を担った。特に日韓と日中の国交回復の前後には、同窓会で活躍していた同窓生たちが各領域で活躍する人物として大きな貢献を果してきた。

1972 年 9 月日中関係正常化ののち、日中間の交流は民間の分野で大勢となっていた。その中で、満洲日系高等教育研究機関の戦後同窓会も非常に重要な役割を果たした。日本の戦後同窓会にも、中国側の卒業生との交流の拡大に従って、満洲時代の記憶が再生されるようになる。

日本と中国間の外交関係の回復前、戦争期に満洲と日本での教育経験があった中国人卒業生は、中国政府から支援を受けた非政府の外交活動に役割を果たした。しかし、満洲の高等教育機関で教育を受けた経験を持つ多数の中国人卒業生は、中華人民共和国の建国後の一連の政治運動の中で、政治的衝撃を受け、社会的に冷遇される場合が非常に多かった。しかしながら日国国交正常化は、彼らに政治的および学術的分野に復帰する機会を提供した。これらの満洲日系教育機関からの卒業生は、留日経験を有する卒業生より数が多く、中国同窓の主流になっていた。彼らは、日中親睦の社会的雰囲気拡大とともに、日本同窓会から刊行された会報・会誌に寄稿し、日系同窓会が開催した懇親会にも何度に参加し、日本人学生との連絡往来もかなり盛んとなった。以上のような内容は、日中国交回復後の約10年の間に、日本の同窓会から刊行された同時期資料に詳しく反映されていた。

しかし中国系卒業生たちは日系の同窓会に参加する一方で、自ら書いた回想録の中で反満抗日運動に触れている場合も多かった。もちろん、両者の間には時間と空間の変化がある。中国の卒業生が親善活動に積極的に参加する時期は、1990年代以前、特に1980年代中間から後半の時期であった。また、吉林省長春市政協文史出版社が発行した『回忆伪满建国大学』と『回忆伪满新京工业大学』、長春工科大学側編集した『长春工业大学校友纪事』などの回想文集の中には、満洲国の「民族協和」理念や在学生活の経験が反映され、または批判されていた。これらの内容には、学生の学習生活以外にも、学校で経験した民族的抑圧、参加した「読書会」などの地下学生組織の活動、その後の満洲国の日系高等教育機関で盛んであった「反満抗日」運動など、満洲国の高等教育に対する厳しい批判も含まれていた。しかし、これらの「反日的な」感情を吐露していた回想録の著者である中国同窓は、他方で、日本側が主催した懇親会に参加し、あるいは日系同窓会の会報・会誌で日本人同窓生と連絡を取り合う場合も多かった。

本研究は、歴史社会学の観点から、中国同窓生が、自らの満洲経験に対し、場所や時間によって明らかに異なる態度を分析することである。彼らを主体とする中国社会の「知日派」が、日中関係の改善に貢献したとすれば、彼らの行動が、彼らの記憶や歴史的理解に関係しているのか、あるいは相互にどのように影響し合っているのかという問題を分析することは、本研究の重要な考察部分をなす。

他方、日本の卒業生の回想では、満洲の記憶について叙述する時、他民族の同窓と共に生活した経験よりも、むしろ日系同窓や教授たちの思い出、さらに戦後の引揚に

ついでの内容が多くを占めた。このような記憶は、中国側の内容とは大きな違いをもたらす、建国大学に対する非常に異なる認識と態度を生み出した。さらに、政治的に対立している日本人と中国人の間に立っていた他の民族集団（韓国、台湾、内モンゴル、白系ロシア人）の同窓生は、満洲で教育を受けた経験に対し、両者とも異なる態度を取っていた。本論文では、そのような異なる記憶が生れる理由についても重点的に検討を試みる。

本研究には、以上のような問題群を念頭に置きながら、異なる同窓生集団の回想文集を分析しようとする。異なる民族の同窓生の文集の中では、政治的色彩が如何に反映されたのか、またはどのような政治色彩が反映されたのか。あるいは同窓会は戦後にどのような活動を展開し、どのような社会的影響を持ったのか。こうした側面を分析する。さらに、歴史社会学理論を用いて、異なる同窓生集団の回想文集の差異、そして戦後の日中、日韓、日台、日蒙、日露関係の長い歴史のなかで、各集団の同窓たちが育ててきた友情の歩みを考察したい。

その際、戦後同窓会という形により、民間外交で繋がっていた日中関係の歴史は、同窓の交流の規模や密度において重要であり、とくに再検討に値する。民間外交を担った各国・地域の同窓たちが過去についていかなる集団的記憶をもち、それがどのような特徴を有し、さらに状況の変化に応じていかに変遷したかという問題は、戦後日中関係や現在の歴史認識問題を考える上でも興味深い作業になると思われる。本報告は、旧満洲国日系高等教育研究機関の戦後同窓会の意識や記憶について、歴史社会学の「集合的記憶」の理論や「記憶の場」の理論を用いて考察することを目的としている。そして、それに基づいて、満洲日系高等教育機関の卒業生たちの同窓会における活動について詳細な考察と分析を行い、異なる国や地域の同窓生の「満洲記憶」の類似点と相違点を比較する。

本研究の対象は、旧満洲国日系高等教育機関の戦後同窓会（以下、戦後同窓会という）である。戦後同窓会は、1940年代後半から1950年代に順次設立された（建国大学同窓会：1953年、旅順工科大学同窓会：1946年）。戦後同窓会の組織と活動には、近年学界で広く議論されている「歴史」と「記憶」の複雑な関係が反映されている。アルヴァックス（Maurice Halbwachs）の「集合的記憶」とノラ（Pierre Nora）の「記憶の場」の歴史社会学理論によると、「歴史」と「記憶」は常に対立する概念として理解されている。本研究では、同窓生の「満洲記憶」が生まれた場として戦後同窓会を位置付け、そこで

の記憶のメカニズムを検討する。戦後同窓会は各同窓生集団から生まれた「満洲記憶」を反映する一方、その異なる集合的記憶が特定の条件下で変容することをも示している。

本研究の問題意識は、そのような変容や差異が生じた背景と、その差異が同窓会活動に与える影響を調査・分析することである。こうした分析は、さらに、現在の東アジアでも重要な問題となっている歴史認識の問題を考える上でも大きな示唆を与えるであろう。

(二)、研究史概観

日中国交回復後、民間外交活動とともに満洲国における高等教育機関の同窓会による日本同窓の訪中活動が盛んになった。満洲国高等教育を受けた中国側の同窓生もその機会に同窓会の催しに参加したり、自ら満洲経験について書いたりした¹。時の経過とともに満洲経験者はその多くが歴史の舞台から撤退した。しかし彼らは戦後の平和的な国際環境の構築に貢献し、日本と隣国の関係を発展させ、その歴史の証人となった。彼らは満洲の歴史の叙述および戦後国家間の外交関係構築のために物質的・精神的なリソースを提供した。その際日本側の満洲教育経験者であった日系同窓生が戦後同窓会報や回想文集を編集した。代表的な回想録としては小林金三『白塔』（2002、新人物往来社）、百々和『道芝』（1983、三和書房）、志々田文明『武道の教育力—満洲国・建国大学における武道教育』などがある。そうした回想録の中では昔の同窓や教員についての思い出、青春期の経歴、戦後シベリア抑留や引揚経験について詳細に述べられている。

これまで多くの他の民族の満洲教育経験者、とくに中国側の経験者は満洲国を台湾・朝鮮などと同じく日本の植民地と見なし、その教育自体を「奴隷化教育」、「漢奸教育」と批判しつつ、自らの抵抗や闘争を描いた。そのうちの代表的な著作としては中国人同窓生聂长林の『幻の学園・建国大学』、『抗日曲折行——建国大学を出てから』（1997）、台湾人同窓生李水清の『東北八年回顧録』（2007）などがある。こうした他の

¹ しかし、これまでのところ、満洲における日系教育機関の連絡組織ないし同窓会組織に関しては、必ずしも詳細には研究されていない。坂部晶子（『「満洲」経験の社会学——植民地記憶のかたち』）はかつて満洲における関連組織および同窓会組織について所属機関別に整理した。しかし坂部はそうした組織に入会した同窓生の満洲記憶について言及していない。

民族の同窓生の回顧録では植民地における侵略と闘争の観点が重視されている。それはナショナリズム的な視点からの見解を反映しており、日本の満洲建国精神である「五族協和」の虚構を批判しつつ、自分がそれに対しどのような態度をとったのかについて記録している。

戦後同窓会の活動に関する現在までの研究は、おもに日本人研究者によっておこなわれている。中国と韓国の同窓生は個人的な回顧録を出版し、小さなグループを組んで日本を訪問し、同窓会の催しに参加した。すなわちその卒業生のうち、他の国では日本の同窓会に匹敵するような同窓生組織は成立しなかった。彼らは日本の同窓生が中国・台湾・韓国を訪問する際、比較的大人数で歓迎会を催し、出席した。

以上を踏まえ、研究史概観では以下の五つの側面を考察する。第一に、満洲国の建国イデオロギーについての研究、第二に、満洲高等教育機関における人材養成に関する研究、第三に、一つの代表的なケースである満洲建国大学に関する研究、第四に、満洲における反満抗日運動に現れたイデオロギーに関する研究、第五に、同窓会と外交関係に関する研究である。

1、 満洲高等教育研究機関における人材養成についての研究

第二次世界大戦後、まず日本で満洲国教育に関する研究が現れた。日本では、満洲国教育史研究会により監修された『「満洲国」教育資料集成 III 期「満洲・満洲国」教育資料集成』（1993、エムティ出版）では 1904 年から 1945 年までの関東州、満鉄及び満洲国の教育法規、学校教育内容、社会教育などの豊富な史料を収録し、満洲・満洲国教育の多様な側面を示している。近年では九州大学の祝利が満洲国の日本語教育と教員養成について博士論文を発表した²。祝は満洲における日本語教育の歴史的な観点から研究し、日本語教育は実に満洲国建国の精神および満洲国教育の核心を形成したと述べた。祝は満洲国政府が社会教育に大いに力を注ぎ、一面では、知識普及のために、「社会の中枢」と見なされた官吏、教員に対する教育を実施すると同時に、一般民衆に識字教育、実業教育などを実施し、社会全体の教育水準の向上に努めた。もう一面で

² 祝利『「満洲国」における「民族協和」下の人材養成と日本語教育』九州大学博士論文（比較社会文化）

は、精神教育のために、「宣撫」、「宣伝」などの方策で民衆に満洲国の建国精神を鼓吹したと考察した。

しかしこのような多様な学校教育と社会教育を通して満洲国に役立つとされた人材はいかに養成され、また、その人材養成にはいかなる特徴があったのであろうか。こうした問題は、卒業生たちの「記憶」の前提であり、その解明も本論文の重要な課題である。満洲国の最高教育機関である建国大学は「アジア主義」と日本植民地支配の精神を反映したショーケースである一方、学生運動と反日団体の地下工作の温床もなった。建国大学は「アジア主義」思想と「五族協和」の政策方針に従って、日、漢、蒙、満、白系ロシア出身の学生たちが一緒に生活する特別な学校であった。しかし学生たちの理想は出身民族によって異なり、同床異夢であったといえよう。「満洲国」は、砂上の楼閣のように不安定な政権であり、その内部では統一性が欠如し、想像を超えた混沌と衝突が支配している。そのため、建国大学の一部の満系学生は、混沌と衝突の中で日本の植民地支配に反対し、反満抗日運動を戦った。その中に生まれた反植民地意識と左翼運動も戦後彼らの生活に多大な影響を与えた。

竹中憲一の著作『「満洲」における教育の基礎的研究』（2000）では満洲における朝鮮人教育について紹介している。第一章では、朝鮮人の早期移住の沿革から始め、朝鮮人教育の特殊性について紹介した。例えば、移住の初期・前期・中期の移住原因、移住者出身地の分布・職業・経済状況および移住者人数の推移である。第二章では、異なる時期における中国での朝鮮人教育の流れについて述べている。具体的には、清朝末期、中華民国初期の状況、教育権回収運動とともに朝鮮人教育の中で発生した変化などについて検討している。第三章では日本における朝鮮人教育を紹介している。間島における教育活動から始め、間島の政治的位置、統監府臨時間島派出所の設置、間島普通学校および間島における日本人教育など内容も含まれる。第四章と第五章では、満鉄付属地および臨界地区における朝鮮人教育について紹介し、さらに関東州で展開された朝鮮人教育についても触れている。「日韓学堂」・「日朝教学制度」などにも重点を置く。第四章第9節の部分では「万宝山事件」および「満洲事変」後の朝鮮人教育の状況について分析している。³

³ 竹中憲一、『「満洲」における教育の基礎的研究、第5巻、朝鮮人教育機関』、柏書房、2000；178頁。

この研究で竹中は、植民地当局と植民地朝鮮人の間に存在していた利益衝突と矛盾を明らかにした。時間の推移に従って、満洲地区における朝鮮人学校数、志望者数、入学許可者数および入学率も変化した。満鉄が行った朝鮮人教育の「拡大方針」も示されたが、満洲国の成立とともに推進された「共学制度」政策の実施、および急速に増加した朝鮮人生徒の進学希望が満鉄にとって圧力となった事実についても触れている。高等教育に対する期待は、朝鮮人に一連の運動を行わせられたが、朝鮮人の反日意識もその中から生み出されたという。竹中の研究によれば、植民地の行政官も上に述べた反日運動を恐れ、民族意識を抑圧するために、普通の高等教育を発展させず、かわりに実業教育の側面に重点を置くべくことと判断したという。⁴

続けて竹中は、『「満洲」における教育の基礎的研究』（2000）において、満洲における教育活動を年表の形で整理している。考察の対象とした時期は1897年から1933年である。教育年表の作成にあたっては、関東局や南満洲鉄道株式会社の関連機関の情報を利用している。例えば、関東長官官房文書課、関東都督府陸軍部、満鉄地方部学務課、満鉄庶務部調査課、満鉄総裁室地方部残務整理委員会、満鉄初等教育研究会などである。さらに満史会、教育史編纂会等の機関も含まれている。

そのほかに、この研究では多くの満洲教育関係資料を載せている。例えば、初等学校、実業学校、女子学校、師範学校の教育資料、高等教育機関の教育資料などである。さらに一部教育機関の戦後同窓会に関する資料も載せている。

2、 建国大学に関する研究

宮沢恵理子は建国大学の創設と教育活動の中に現れた「民族協和」について研究した。多くの史料に基づいて、建国大学の性質と創設者としての「協和会」の背景を分析しながら、学科の設立を通じて建国大学で唱えられた「民族協和」の本質を探った。「民族協和」について宮沢は、建国大学における「塾制度」と「農事訓練」等の管理制度と訓練制度に着目しつつ、学生の生活における「民族協和」の実態を分析した。その論文は戦後における日本民族以外の学生の動きにも触れている。宮沢は研究中に何度も国際

⁴ 前掲180頁。

善隣協会（後述）を訪ね、同窓生にインタビューを行った。宮沢の研究は、以前の満洲研究と比較すると、豊富な歴史資料の利用、数多くの同窓生たちとの直接交流などに特徴がある。

宮沢はその研究において主に4つの問題を討論している。

- 1、 建国大学の思想の母体。
- 2、 建国大学の教育研究活動の実態。
- 3、 「民族協和」方針に従った建国大学学生の生活。
- 4、 卒業生の戦後の運命と建国大学の遺産。

この研究の基礎資料として建国大学の関連資料と関係者の証言を用いた。宮沢は「民族協和」の方針の由来をについて以下のように述べている。満洲建国の直接参加者である小山貞知（満洲評論社社長）等は「民族協和」精神の創設者の役割も担った。戦後の学界では、「民族協和」は政治宣伝的なスローガンであるという認識が主流であった。しかし小山たちはそのような批判的歴史観を受け入れなかった。「民族協和」を理想とする小山たちは、戦後においても、満洲国はあくまでも客観的な要因のために失敗した「見果てぬ夢」とであると信じていた。「民族協和」精神の創設者たちは、被支配民族に対して差別的扱いを行わなかったが、他の民族は「皇道」によりイデオロギー上日本と一致する必要があると主張した。

そのため、宮沢によれば、いわゆる「民族協和」は、実際には、日本の支配者の「満洲国」建国理念ではあったが、理論上は他の国々との「共存と共栄」をも達成することができる筈であった。しかしながら、このような「建国精神」イデオロギーの伝播は必然的に「皇道宣布」となり、日本の支配と日本文化を強制するものになった。こうして建国大学は、形式的には満洲国の最高教育研究機関であったが、本質的には「満洲に設立された日本の大学」となってしまった。

「民族協和」の実験場と化した建国大学では、農業訓練と塾制度というユニークな制度を利用して、人為的な閉鎖的空間で「民族協和」という満洲国の建国精神とイデオロギーの育成が企てられた。建国大学の設立者たちは、他の民族グループの学生の間での相互扶助と連帯感を強化し、学生に「民族協和」という満洲国の国家理念を教え込んだ。しかしながら実際には中国系学生の民族主義運動が盛んとなり、「一徳一心」を強調する「民族協和」は達成されなかったという。一方で満洲国の国家理想である「民族協和」イデオロギーに縛られた日系学生たちは、他の民族と生活することにより価

値観の変更を余儀なくされる。これを根拠に宮沢は、満洲国の「建国精神」イデオロギーと化した「民族協和」が実現不可能な夢想などではなく、従って「見果てぬ夢」でもあり得なかったと主張した。

しかし、この研究にも限界があるだろう。まず、宮沢は建国大学の創立期の各制度、例えば面接や試験制度、学校運営を管理する規則などに多く言及しているが、第3章でその体系を論じる時、塾制度に関連しては公刊史料に重点が置かれており、実際の体験者である建国大学の学生の直接の回想やインタビューは比較的不足している。中国卒業生や他の民族の卒業生に関する史料はさらに稀である。しかしながら、戦後すでに4半世紀を経過し、中国、日本、韓国の外交関係が正常化され、同窓生への密接な連絡が可能となっている。1980-1990年代には、中国系と韓国系の同窓生にインタビューすることはそれほど困難ではなかっただろう。また、宮沢は建国大学同窓会を調査する過程で、長年にわたって関係者として同窓会懇親会に参加してきた。宮沢がさらに韓国系、中国系の同窓生と多く連絡を取り、訪ねていれば、研究は一層広がった可能性がある。しかも、特に中国人学生を巻き込む「民族主義運動」の章で、彼女の説明と分析が不足していることは否定できない。中国人学生の「民族主義運動」（「反満抗日運動」としても知られている）は、作田荘一学長の辞任に直接つながり、そして実際には「民族協和」イデオロギーの破産を意味した。この運動は国家的な矛盾をはっきりと表現するものであったから、「民族協和」の研究に関する論文では、それは特に書くべき価値がある。宮沢はこれに気づいていたが、様々な理由で、「反満抗日運動」に参加した中国側の卒業生とは連絡を取らず、日本の視点からのみ「民族主義運動」として分析しただけであった。

1965年日韓国交正常化、1972年日中国交正常化、1992年中韓国交正常化以降、民間交流も盛んになった。その時宮沢は研究者として日本人同窓生と密接に交流して多くの調査が進んだ。しかし日本側の同窓会にのみ注目したのは残念であった。しかも日本人以外の同窓生の資料が十分ではないため、「民族協和」が失敗した原因の分析は一面的な見方となっている。しかも彼女は、日本の卒業生のイデオロギーの分析に焦点を合わせたことにより、中国系の歴史家が熟知している「反満抗日運動」を「民族主義運動」と表現している。即ち彼女の観点からは「革命運動」や「階級闘争」などを含む運動の階級的な性格は、建国大学の学生運動に現れなかった。日本系学生の理解では、「反満抗日」運動は「民族主義運動」に過ぎなかったからである。こうした認識の差異は、

中国系同窓生のもつ「反満抗日運動」の記憶と戦後日系同窓生の「見果てぬ夢」の記憶さらにそれ以外の出自の同窓生(モンゴル系、韓国系、白系ロシア系、台湾出身者)のもつ満洲記憶の差異を「集合的記憶」の観点から研究する時の手掛りとなる。

「五色の虹」の筆者である三浦英之は宮沢恵理子にインタビューを行った。その時(2012年)宮沢は建国大学について「国際的な文化交流の好例である」と積極的に評価した。しかし興味深いことにこれは宮沢の元々の結論と異なっている。宮沢が論文を発表したのは1995年であり、三浦が宮沢にインタビューしたのは2012年である。その10数年の間に満洲建国大学「民族協和」研究者としての宮沢の歴史観が大きく変化したことも、「集合的記憶」を研究する筆者に興味深い実例を提供している。

新聞記者であった三浦英之は、建国大学「最後の同窓会」(2011年)の後、4年間続けて建国大学の11人の同窓生にインタビューし、2015年に『五色の虹』を出版した。この本の主な内容はインタビューであるが、作者の主観的見方を表現するため、一般的な歴史研究とは異なり、ある程度文学的なスタイルを取っている。三浦は日本、中国、台湾、韓国、ロシア、さらにモンゴルの卒業生にインタビューを行った。著者によれば、彼は満洲建国大学を卒業した5つの民族の同窓生を尋ねて、できる限り高齢である卒業生にインタビューした。三浦の本ではその卒業生の戦後経験を含み、この異なる民族グループ間の葛藤、および戦後の経験を記録しており、興味深い。彼によれば、建国大学の卒業生は、選ばれた才能ある人材として、時代と環境の変化にも関わらず、自分の属する社会でエリートとして活躍した。しかし、戦後の国際情勢の変化と各国の政治構造の変化により、政治変動の影響を受けた卒業生たちもいた。彼らこそ社会の変化の中に巻き込まれつつも精神的な主体性を保持していた。もちろん三浦の研究は、いわばノンフィクション作品であり、それを普遍的な歴史研究と位置付けるのは適切でない。インタビューされた卒業生は全員高齢者であり、文章の形式も歴史家の基準と異なっている。特に第一次史料などの文献資料は必ずしも多いとは言えない。しかし、卒業生の伝記的記録としてみれば、同じ学校で勉強した学生が学校の廃校後経験した様々な人生について興味深い記録を提供していると言える。本著作では建国大学の卒業生の人間性が示される一方、若い日本の知識人が「五族協和」をどのように理解したかが示される。

3、 満洲における反満抗日運動とイデオロギー

田中恒次郎『満洲における反満抗日運動の研究』(1997)は、満洲国全体を対象としつつ、共産党が都市から農村への拠点を移しながら反満抗日運動を発展させた実態を分析した。田中はその際多くの中国語研究論文をも引用し、それぞれの組織ごとの反満抗日運動の変化および共産党の発展にも言及した。それを踏まえて田中は、反満抗日運動が1941年12月までにピークに達したが、とくに農村の場合共産党の役割が比較的に重要だと主張した。

中山紀子の論文「『満洲国』の建国大学における中国人学生の反満抗日運動」(2015年)も注目に値する。中山は建国大学の当事者、反満抗日運動を経験した中国系学生に関心を向け、反満抗日運動の状況とその原因の分析を行った。中山によると建国大学における「反満抗日」運動の実態は民族主義運動であり、共産党より国民党からの影響を多く受けたという(そした認識は宮沢恵理子の研究とも共通している)。

一方中国側の回想文集である長春政協文史資料編集室編『回憶偽満建国大学』(1996)によれば、一部中国系学生は自ら共産党の影響を受けて反満抗日運動の道を歩き始めたと述べている。彼らは建国大学で「読書会」を通じてマルクス主義を研究し中国革命についての意識を育てたという。しかし一部学生の回想文によれば、建国大学の「反満抗日」運動の組織者である学生たちは、国民党系地下工作者と連絡があったと記録している。さらに反満抗日運動の代表人物である馬鎮山の回想録によれば建国大学の教授陣のうち作田莊一副総長は統制経済学の専門家で、全体主義的な思想を唱えていたが、山内一男教授はかなり進歩的な学者であったという。馬は中国系学生の「読書会」で読んだ毛沢東の『新民主主義論』も山内から譲渡されたと記録している。こうしたことから、建国大学における反満抗日運動の発生条件およびイデオロギーは、満洲農村における反満抗日運動とは大きく異なっていたと考えられる。ただし日中国交正常化の20年後に中国で出版されたこの回想文集では、多くの中国系学生は、当時の反満抗日運動は国民党と関係を持たず、その性格は「民族主義運動」というよりも、毛沢東流の「新民主主義運動」であったと見なした。

竹中憲一の研究『大連、アカシアの学窓——証言、植民地教育に抗して』(以下『証言』)の中で竹中は、大連の教育に参加した多くの経験豊富な人々にインタビューを行った。竹中は、関東州の中学校、満洲国時代の学校、私立学校、さらには高等教育機

関で教育を受けた人々、日本への留学生(主に早稲田大学で留学を経験した人々)、海外(ソウル、台湾)出身で大連での教育を受けた人々の証言を集めている。この『証言』は、植民地教育を受けた人々の個人的な経験に深く入り込み、被支配民族出身学生の植民地教育に関する経験と感情を紹介した。『証言』は、前述の中国本土の回想文集『回憶偽滿建国大学』(1996)と同じく、学生の民族意識と反抗精神を表現していた。多くの学生の証言には、「勤労奉仕」、「東方遥拝」、「解放区」、「中国人としての民族意識」、「東北流亡学生会」(戦後中国の東北地区における亡命学生組織)や、「反満抗日運動」などがキーワードとして頻繁に使われた。インタビューの対象者の思考は、『回憶偽滿建国大学』(1996)への寄稿者、すなわち建国大学の中国籍卒業生の思考と多くの類似点があった。『証言』は、さらに、日本、朝鮮、台湾から満洲に留学した経験のある人々にもインタビューを行っている。彼らの教育経験は前出の満洲出自の学生とは異なって、植民地教育に対して反抗的なイデオロギーをも示しているので、参考文献に加えるべきであると考えられる。

4、 同窓会と外交関係

浜口裕子『満洲国留日学生の日中関係史——満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』

この本は、主にオーラルヒストリーと文献研究を通じて、「抗日組」・「留日組」の留学生が太平洋戦争前後どのように生活していたか、戦後どのような仕事をしていたか、さらにその後中国文化大革命の時に日中関係と日中国交正常化のためどのような貢献したかについて述べている。満洲国の「日満一徳一心」の支配方針に従って、数多い満洲学生が日本に留学してきた。しかし厳しい管理制度及び親日教育を嫌がる彼らは「反満抗日」的な感情を抱いた。その感情的要因は彼らがその後中国共産党に合流することの心理的前提となった。

浜口は満洲から日本へ留学した学生を「抗日組」と「留日組」の二つのグループに分けた。浜口は二つの組の代表的人物である孫平化と韓慶愈の人生について研究することを通じて、この特別な歴史的期間における政府外交と民間交流の関係を巨視的に検討した。要約すると、「抗日組」の孫平化らは、日本の抑圧的留学生管理制度に反抗し、共産党の地下組織に参加し、中華人民共和国の創設後の社会主義建設期間中の外交の

基幹となった。「留日組」の場合、まず韓ら普通の留学生は、中国人としてのアイデンティティを維持し、中国に戻る前に中国の地方自治体に連絡し、関連する政府部門や研究機関に勤務するように割り当てられた。他方、丁非⁵は、満洲国支配者の家族（満洲国国務総理張景恵の息子）として、反満抗日運動に参加し、情報工作を担った。周恩来は日中外交関係正常化の中国側リーダーであるが、廖承志はこの過程の事実的な中心人物人物であった。孫と韓は、「抗日組」と「留日組」の代表人物として廖承志の個人的な信頼を得た。しかし「抗日組」と比べると、「留日組」である在日華僑は、情報が不足していたため、中国国内の政治的変化に理解が足りない場合もあった。浜口は日中民間外交の日本側プレイヤーは主に日本の実業団体であり、さらには旧軍人団体もあったと指摘した。彼らは毛沢東から信頼と支持を得ていたから、彼らが担う戦後の日中関係も順調に発展してきた。中国共産党も戦後日本の複雑な政治関係を利用して、中国人と日本人の留学生の役割を十分に利用し、1972年の日中国交正常化のために、経済、技術、情報の面で慎重な準備を進めた。これは、中国共産党政府が台湾に代わって国際舞台に登場していくため重要な戦略であった。中国政府の努力は成果を上げ、戦後の民間外交も一層発展した。浜口の研究では、同窓会の役割ではなく、中国政府に参加した留日学生および戦後日本に滞在した留日学生が果たした役割に重点を置いた。ただし、彼らと交流した日本側相手は主に実業系友好団体と旧軍人団体であるとされ、満洲日系学校の卒業生と同窓会についてはほとんど言及されていない。

佐藤量『戦後日中関係と同窓会』

佐藤量は黄順姫の社会科学的な「同窓会ネットワーク」理論を使って、異なる集団の満洲記憶の構築を説明しようとした。佐藤は詳細な歴史資料を検討し、大連で現地調査を行った。歴史の各段階を横軸とした第1章では、1930年代から1940年代の間における関東州内の中国人向けの学校と日本人向けの学校に着目した。第2章では、戦後日本人の引き揚げと中国人の帰国と待遇について述べ、第3章では旅順工科大学に重点を置いて分析し、日中国交正常化および1950-1960年代日中民間友好交流の流れについて整理した。佐藤は日中国交回復の1972年後、大連を中心とする同窓会の活動および同窓生の満洲経験と記憶を紹介した。

⁵ 当初張紹雄という名前を使った彼は、その後丁非という名前で地下活動を行った。

佐藤の研究は本論文の筆者に多くの情報を与えてくれるが、なお検討すべき部分と議論すべき部分を残している。まず、佐藤の研究は「戦後の日中関係と同窓会」と題されているにも関わらず、研究対象は関東州に限られる。関東州には南満鉄道株式会社関係の同窓会を含む多くの同窓会があり、その同窓会も戦後様々な活動を進めた。⁶そのうち佐藤が研究したのは高等教育機関であった旅順工科大学の同窓会のみである。さらに佐藤は旅順工科大学同窓会会長であった相田秀夫の訪中活動と大連日中友好協会の設立についてそれぞれ詳しく検討している。

植民地時代の経験と記憶を述べる第5章では、同窓会会報や会誌などの第一次史料ではなく、主にインタビューと私信などの資料を利用している。そのため歴史研究としての説得力がやや弱いように思われる。同窓生の記憶に基づき昔の大連の地図を描いているが、そのことはもちろん彼らが叙述主体として記憶を再構成する過程を示している。ただし佐藤が提供したいくつかの例はほとんど個人の経験であり、集団としての記憶を研究する場合はやや制約がある。中国系同窓生についての叙述にもやや不足する点がある。佐藤は満洲日系大学の卒業生である一人の中国人同窓生が戦後中国の政治運動の影響を受けて中国で社会的に冷遇されたと述べているが、しかし佐藤はその他の中国系同窓生については語っていない。さらに、佐藤が行った同窓生インタビューと回想録の中で、調査対象者は中国の政治に関してあまり言及しなかったと明確に述べているにもかかわらず、その理由についての立ち入った分析をしていない。

(三)、研究課題と方法

戦後、満洲における高等教育機関は廃止されたが、同窓生の社会的関係は保たれていた。日本戦後同窓会は、活動を行うためにさまざまな政府機関や非政府機関にしばしば依存した。戦後、日本側の同窓会は、日本で長期的な活動を組織し、海外の多様な民族の同窓生とも連絡を取り合った。その際、海外への訪問活動や海外同窓との交歓活動などは定期的に行われていた。

本論文は、文献研究の方法を主に用いて、満洲日系高等教育機関の日本同窓会の出版物を収集・整理している。これに基づいて、中国、韓国、台湾の同窓が刊行した回想文集と関連する歴史資料を比較し、「集合的記憶」、「同窓会の社会学」および他の社会

⁶ 坂部晶子、『「満洲」経験の社会学——植民地の記憶のかたち』、世界思想社、2008年。

学的理論を参照し、歴史社会学の観点から各国の同窓生の戦後活動を要約する。満洲日系高等教育機関の同窓会の満洲に対する記憶を分析し、満洲で日系高等教育を受けた経験者の角度から東アジアの国々における異なる歴史記述に対して分析を試みる。

本論文では、様々な出自の同窓生により書かれた回想文を分析し、個々の集団の「満洲記憶」を包括的に分析することを目指している。集団的記憶が存在するかどうか、またはそれがどのように異なる政治色を示すか、そして戦後同窓会が社会にどのような影響を与えたのかを分析する。アスマン(Jan Assmann)やアスマン(Aleida Assmann)の「想起の文化」およびその他の歴史社会学、歴史哲学理論を検討した上で、社会学者アルヴァックス(Maurice Halbwachs)の「集合的記憶」理論とノラ(Pierre Nora)の「記憶の場」の理論に基づいて、戦後同窓会の場で様々な出自の同窓生の回想文に反映された「満洲記憶」の違い、および半世紀以上にわたる社会的文脈の変化とそこにおける日中、日韓、日台の同窓生の間の絆と友情、そこから生まれたネットワークが国際的友好と交流に与える影響を考察する。

すでに多くの同窓生は亡くなっているため、本稿は文献研究を中心とするが、オーラルヒストリーの研究方法(二人の建国大学同窓生に対するインタビュー)も部分的に用いる。建国大学をはじめとする満洲・満洲国における高等教育機関に関する第一次史料および各同窓会の会誌について考察を試みる。同窓生の経験について研究を進める際、一部の卒業生の日記、回想録、会報などの関連史料も参照して研究する。

(四)、各章の内容および分析視角

この論文は三部に分かれる。第一部は「満洲国の高等教育機関とその同窓会——歴史的概観」と題し、二つの章に分かれる。第1章では満洲の高等教育政策を紹介し、満洲教育の歴史を「満鉄時代」と「満洲国時代」の二部に分け、高等教育機関の発展について概説する。第2章では、収集された同時代文献、刊行史料、同窓会史料、経験者の回想文集を要約することにより、さまざまな教育機関の概要と満洲時代の教育機関の機能や学生・教職員の出自も含めて考察し、様々な教育機関について、その戦後同窓会の特徴を分析する。戦後同窓会を考察する際のポイントは、同窓会の歩み、同窓会活動の特徴、同窓生のキャリアとネットワーク、または同窓会の海外での活動状況である。第一部では初めに同窓会の語りと記憶という概念を導入する。

第二部では、満洲国の国策大学である建国大学をケースとして、考察と分析を行う。建国大学では、「五族協和」という満洲国国策を体現し、学生の出自も多様であった。そのため、建国大学の同窓会はもっとも代表的な例として説明することができる。さらに建国大学は満洲国が設立されたあとに建学されたため、満洲における他の大学と比べ歴史は短く、同窓生の年齢も満洲の他の高等教育機関の同窓生と比べて比較的若いからである。現存する資料の中では、建国大学に関するものは質量ともにもっとも豊富で多様であり、建国大学の同窓会も2010年まで定期的・継続的な活動と会報の発行を行っていた。このため、調査対象としては代表性を備えていると考えられる。さらに、建国大学の同窓生のほぼ半数は日本以外の出自の同窓生であるため、本研究における同窓会に関する「集合的記憶」の理論的考察(第三部)に、より多くの情報を提供することができる。第二部の第一章では建国大学の概況、第二章では建国大学のイデオロギー、第三章では建国大学における「反満抗日運動」、第四章では同窓会が刊行した私家版史料に記録された建国大学の崩壊を紹介する。第五章では、建国大学の戦後同窓会活動の特徴と戦後同窓会による海外同窓との国際交流の状況を考察する。

第三部は本研究の理論的考察部分である。第三部では、アルヴァックスの「集合的記憶」理論とノラの「記憶の場」という歴史社会学理論を用いて同窓会と同窓生の「満洲記憶」をめぐる相互作用について説明し、植民地教育経験者の異なる歴史認識を分析し、記憶の連続性と多様性を明らかにする。本稿では、「記憶」と「歴史」の対立・統一関係を分析する視座から、同窓会の語りと記憶の再構成を考察する。第三部の第一章では、同窓会の「語りと記憶の再構成」の視座から「集合的記憶」および「記憶の場」の理論を紹介し、第二章では、同窓会報における満洲記憶を紹介する。その際所属組織および時系列に沿って会報の内容を考察する。第三章では戦後日韓、日中国交回復と同窓会の活動を考察する。第四章は、出自ごとに分かれる同窓生の語りと記憶を検討する。日本人同窓生の場合、かつての友人である日本人同窓をめぐる語りと記憶、引き揚げの記憶、思い出、亡き人についての弔意表明のあり方などである。一方中国人同窓生の場合、反満抗日運動と中国革命への参加、または新中国建設への積極的参加などが集団的な満洲記憶を形成したことを示す。第五章では同窓会とネットワークを紹介している。はじめに同窓生のキャリアとネットワークを紹介し、さらに国際関係などの影響を受けたネットワークについても考察している。

(五)、史料状況

未刊行史料および同窓会関係私家版史料

1) 国際善隣協会所蔵史料

国際善隣協会とはもともと「満洲交友会」という財団法人であった。1947年7月に満洲交友会を引き継いだ社団法人「国際善隣倶楽部」が、中国やアジア諸国との友好関係を築くことを目的として外務省の管轄下に設立され(1972年に「国際善隣協会」と改称)、民間の友好交流において現在でも重要な役割を果たしている。建国大学の日本側卒業生のなかには善隣協会の役員として勤務した例が幾つか見られる(本稿で使用した国際善隣協会所蔵史料は本論文末尾の「文献目録」に挙げてある)。

2) 玉川大学教育博物館資料室所蔵史料⁷

玉川大学教育博物館は、小学校・中学校を含む旧満洲教育機関関係資料を中心として、1980年代から1990年代に多くの資料を収集し、保存している。⁸さらに、同窓生が寄付した資料も数多く収集している。その中には、大同学院、建国大学、旅順工科大学、新京工業大学、ハルピン工業大学、満洲医科大学、佳木斯医科大学、旅順師範学院女子部、奉天工業大学、中央師道学院、南満工業学校、蒙疆学校、ハルピン学院等の資料も含まれている。そのほかの私家版史料、例えば湯治万蔵編『建国大学年表』(1981年)、満洲国立大学ハルピン学院同窓会編『ハルピン学院史 1920-1945』(1987年)などの関係史料も所蔵されている。

本研究で使用した玉川大学教育博物館の所蔵史料は以下の通りである。

大同学院関係史料。大同学院は満洲国では建国大学と同じく高級官僚の養成所と評価された。一部の建国大学の卒業生は卒業してから大同学院に進学し、他の卒業生は満洲国の公務員になってから研修目的で大同学院に入学できた。大同学院の関連史料は、大同学院の学院史編纂委員会が編集した内容によって分類される。まず大同学院創設の周年誌という形で編集されたものに以下の史料がある。『友情の架橋・海外同

⁷ 玉川大学教育博物館(元玉川大学小原国芳記念教育博物館)は、1929年に玉川学園が設立された当初、教科書を保存する機関として建てられた。1969年、玉川学園創立40周年を記念して、大学図書館に「教育博物資料室」を設置し、所蔵資料の充実を図るため、1987年に「玉川学園教育博物館」を開設した。1996年、教育博物館(設立10周年)は玉川大学附属機関に再編された。

⁸ 本論文の資料収集の段階では、玉川大学教育博物館資料室が所蔵している私家版資料を大量に利用した。その過程では当時の玉川大学教育博物館館長大西珠枝先生、および田中弥生子先生のご高配により多くの資料を閲覧することができた。特に教育博物館資料室嘱託白柳弘幸先生には大変お世話になった。ここに謝意を表したい。

窓の記録——満洲国大同学院創設五十五年記念』（1986年）、『渺茫としても果てもなし——満洲国大同学院創設五十年』（1987年）、『久遠——創立六十年記念』（1999年）、『物語 大同学院・民族協和の夢にかけた男たち——創立七十周年記念』（2002年）。これらの記念誌は、大同学院の歴史をまとめたものであり、広い時間と空間の範囲から同窓会活動と同窓間の友情を記録している。記念誌には同窓生の連絡先を詳細に公開しているが、これは過去を記録するだけでなく、同窓会刊行物が同窓生のネットワークを維持する機能を担っていることを反映している。

以上のほかに、卒業年度ごとの私家版史料も収集されている。いわゆる『碧空緑野三千里』（1972年）、『大同学院6期生回想録』（1972年）『大いなる哉、満洲』（1966年）、『旺なる吾等』（1983年）である。同窓会総会により編纂された先述の周年誌と比べ、それらは一部の大同学院の卒業生の小範囲の「出来事」、あるいはこれらに対する「語り」と回想などが反映されている。しかし、このような小範囲の同窓会刊行物にも、総会との積極的な交流活動が反映される。それらは大同学院の戦後同窓会の高度的な組織性と活躍程度を示している。

建国大学関連史料。大同学院と比較すると、所蔵された建国大学の関連史料の量は多い。まず、建国大学同窓会により刊行された史料は次のようになる。『建国大学同窓会会報』No. 1-56(1954-1956年)、『建国大学史資料』創刊号—第5号(1966-1971年)、00『歓喜嶺 1980年』（1980年）、『歓喜嶺 1980年』（1980年）、『写真集 建国大学』建国大学同窓会(1986年)、『歓喜嶺遙か』上下(1991年)、『同学連歓1』（1993年）、『同学連歓2』（1997年）。これらの史料は、建国大学同窓会の戦後の活動を反映したものであり、『建国大学史資料』全5期の編纂からは、建国大学の同窓生が彼らに専属する集合的記憶および経験を解釈または支配しようとする意識を読み取ることができる。また、各期ごとに同期会組織が設置され、会誌と会報などの史料もそれらの組織により刊行される場合もあった。すなわち、建国大学1期生会：『会報』No. 1（1958年7月）、『歓喜嶺 建国大学一期生文集』（1989年）；建国大学2期会『二期』（1989年）、建国大学3期会『建国大学三期会会報』1-42号（1948-1995年）；建国大学4期会『楊柳 建国大学4期会報』1-27号（1948-1995年）；建国大学6期会：『曙きざす』（1981、1986年）、建国大学9期会：『建国大学9期生』（1995年）。

そのほか、一部の同窓生または教職員の回想録も所蔵されている。作田庄一『道を求めて』（自伝）、『道の言葉』（1963年）、藤井歓一（湯治万蔵編）『ひたぶるに、真

実に『藤井敏一建国大学日記抄、その他』(1992年)、中国同窓である聂长林の回想録も日本語に翻訳されて、同窓会によって出版された。『幻の学園・建国大学抗日曲折行——建国大学を出てから』(2000年)など。

旅順工科大学関連史料。旅順工科大学同窓会から刊行された私家版史料は次のようになる。同窓会報『旅順』、51-136号(1966-2010年)、『旅順工科大学開学90周年記念 平和の鐘』(2000年)、『旅順の日』(1973年)である。旅順工科大学の同窓生は戦後の日本の産業技術分野で活躍したため、その一部の同窓生が「興亜技術同志会」という同窓会に参加し、その興亜技術同志会から刊行した同窓会報『興亜』(1931-1943年;No. 24-49 1955-1965年)も玉川大学教育博物館に所蔵されている。

『興亜』の中では、日中国交正常化前の日中技術交流活動に関する内容も含まれているが、中国と日本の外交関係が正式に回復される前、技術レベルでの同窓生間の友好的な非政府交流の貴重な証拠となっている。『掉尾を飾る——最後の旅順工科大学予科生の記録』(1990年)も所蔵されている。

新京工業大学関連史料。玉川大学教育博物館に収集された新京工業大学同窓会の私家版史料は比較的に詳細である。とりわけ『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成50周年記念誌 北辰高く——青春の新京時代と追想の日々』(1998年12月)のなかでは、同窓会組織『蘭桜会』の成立事情が詳しく記録されている。それ以外では、蘭桜会福岡支部から刊行された『支部便り』(No. 3)に同窓会附属機構の活動状況が反映されている。旅順工科大学と同じく、異なる専攻の同窓生が学科別の同窓会を組織した。たとえば「化人会」(新京工業大学応用化学学科同窓会)、「机〔機〕友会」(同大学機械学科同窓会)、そして「採鉱学科同窓会」(同大学採鉱学科同窓会)である。それらの組織からは定期的に会誌と会報が刊行されていた。⁹また、新京工業大学の卒業生である鈴木作良は、彼の詩句や過去の回想で構成された文集『桜』(1983年)を出版した。その本には、在学中に撮影した多くの写真が収集されているほか、鈴木の個人的記憶も反映されている。すなわち従軍した経験や戦後引き揚げについての思い出なども含まれている。日本側の『新京工科大学関連史料』は、中国側で発行された『長春工業大学校友

⁹ 新京工業大学応用化学学科化人会 『化人』 復刊号—No. 12 1977-1997年；新京工業大学応用化学学科化人会 『化人会報』 No. 1-55 1984-2003年；新京工業大学応用化学学科化人会 『母校創立60周年校友聯誼会参加訪中団感想文集』；『機友会 会員通信抄』 No. 1-16 1991-1999年；採鉱三期会 会報『杏花』 No. 1-10 1994-2004年。

記事』と対照することができ、同時期の歴史経験に関する記憶を比較し、出自が異なる同窓生の異なる記憶を理解することができる。

ハルピン工業大学関連史料。ハルピン工業大学の状況は新京工業大学と似ているが、しかし玉川大学教育博物館に所蔵されている同窓会資料は多くない。収集した主な内容は次のようになる。『ハルピン工業大学写真集』（1985年）、『南崗』No. 1-17(1995-2006年)、『ハルピン工業大学採鉱・冶金同窓会会報』、『ハルピン工大採冶会誌』No. 1-4(1991-1995年)、電気学科同窓会編『会報』No. 4-11(1987-1994年)など。こうした史料には、在学中の同窓生の姿が反映され、さらにハルピンの街並みの風景も含まれており、当時の日本支配下のハルピンの様子を伺うことができる。

本研究は、それ以外にも、満洲医科大学など医科系高等教育機関の同窓会関連資料を収集した。玉川大学教育博物館資料室に所蔵されている満洲医科大学に係る史料の状況は次のようになる。『満洲医科大学一覧』（1934年）、同窓会機構である輔仁会編『輔仁』No. 55-64（1977-1985年）、『柳絮地に舞ふ(追補)-戦後の輔仁会』（1984年）、『満洲医科大学40周年記念誌』（1952年）、『満洲医科大学開学70周年祝典』（1980年）、『鴉群』No. 1-3(1973-1975年)、No. 55-59(1995-1998年)である。各時期の会報・会誌を見れば、終戦直後の輔仁会の一連の活動を考察することができる。例えば卒業生の就職と在学生の学籍編入などの「善後処理」、成立時の経済的困難、東京から関西への事務所移転、東京への復帰などの歴史事実がすべて反映されている。会誌にはまた、戦後における卒業生の国内(大学、官公庁、研究機関など)の活動近況に加え、韓国、台湾同窓の海外活動を記録し、戦後母校の変遷を詳細に叙述している。

類似しているのは満洲国立佳木斯医科大学であるが、その関連史料は満洲医科大学と比べ多くない。『万里雲濤——満洲国立佳木斯医科大学記念文集』（1980年）『満洲国立佳木斯医科大学記念資料集』（1978年）、そして満洲医科系教育機関の連合同窓会である蘭仁会¹⁰の刊行した私家版史料『蘭仁会史』（1981年）などもある。それらはすべて玉川大学教育博物館に所蔵されている。要約すると、こうした史料は満洲の医科系高等教育研究機関の戦後同窓会の活動と特徴を示しており、工科大学および文系大学と比較対照することができる。

¹⁰ 蘭仁会は、満洲国国立大学チチハル開拓医学院、満洲国国立大学ハルビン開拓医学院、満洲国国立大学北安開拓医学院、満洲国国立大学龍井開拓医学院の4学院の教職員及入学者によって結成された会である。

それ以外では、他の満洲高等教育機関の同窓会史料も所蔵されている。例えば、旅順師範学院女子部、満洲国国立奉天工業大学、満洲国国立中央師道学院、南満工業学校、蒙疆学校、ハルピン学院などの史料である。南満工業学校は創立時期が比較的早かったので、同窓会関連史料は相対的に詳細である。すなわち『伏水会報』（No. 1-45, 1961-2003）、同窓会創立 70 周年（1981 年）、95 周年記念誌（2006 年）などである。そして、韓国伏水会という海外同窓会組織がある。これは日韓同窓の交流実態を反映しており、相対的に高い史料価値がある。

3) 他の私家版史料

湯治万蔵 『建国大学年表』（1981 年）。建国大学同窓会により編纂・刊行されたこの年表は、1937 年から 1945 年までを対象とした建国大学の発展経緯および重要事件についての貴重な記録である。その主な内容には建国大学の創設の経緯、建学の精神、教授陣と学科設置の原則なども含まれる。さらに年代順に従って、学内の重要な講演、会議内容、学内で起きた事件と主な人物の心情・反応などを記録しており、史料集としても高い価値がある。『年表』は 1981 年に刊行され、建国大学同窓会編のその他の史料（『建国大学史資料』）、戦後各期同窓会の回想文の内容、塾生日記なども豊富に引用している。以上のように、『年表』からは、満洲高等教育を受けた経験から生じた「出来事」を記述し、支配しようとする意識を見出すことができる。こうして、建国大学の歴史を編纂するという営為にも、集合的記憶を構築しようとする意思が反映されていると見ることができる。

満洲国立大学ハルピン学院同窓会編 『ハルピン学院史 1920-1945』（1987 年）。この『学院史』は「ハルピン学院史」、「ハルピン学院外史」、「資料と年表」の三部分に分かれ、第一部では、ハルピン学院の前身「日露協会学校」の時期からはじめ、満洲州事変後の日露協会学校の閉鎖、さらに満洲国の成立以降の発展経緯、終戦前の最後の学期等の内容も記録されている。その中で、ハルピン学院は「拓殖」に従って発展された歴史事実を記録し、二二六事件が学院の発展にもたらした影響や学科設置の変化についても記録されている。第二部「ハルピン学院外史」は、主として戦後同窓会の関連活動を記録しており、さらに各期卒業生の回想文、師友往来、友情に関する記録、戦後シベリア抑留の経験についても記録している。第三部「資料と年表」はハルピン学院の組織上の変化（1920-1945 年）および同窓会の主な活動について「行事年表」の形で記録して

いる。他の同窓会が編集した史料と比べ、『ハルピン学院史 1920-1945』には多くの同窓生の個人的な記憶が集められており、その収集・刊行作業には、同窓会における当時の「出来事」についての支配的な意識も反映されていた。

2) 中国語刊行史料

中国語刊行史料は主に 1994-1996 年に出版された。その中には長春市政治協商文史資料委員会出版した『回憶偽滿建国大学』（1996）、『回憶偽滿新京工業大学』（1994）、長春工業大学編『長春工業大学校友記事』などがある。これらの出版物と日本語刊行史料との違いは、同窓会により編集されているとはいえ、編集過程に中国共産党当局が参加し全体を管理しているため、歴史資料としては統一された思想的傾向が反映されている点である。すなわち中国人同窓生は在学中、学習の過程でマルクス主義に対する憧れを抱いており、侵略者と卒業生の闘争も行われていたという観点である。そこでは中国同窓生の民族感情と革命熱情が反映されていた。

3) 韓国語刊行史料

建国大学在韓同窓会 『歓喜嶺・建国大学在韓同窓文集』 建国大学同窓会(1986 年)。

この文集は 1986 年に刊行され、同年に日本語に翻訳された。建国大学の他の同窓会関連史料とともに玉川大学教育博物館資料室に所蔵されている。この在韓同窓会文集は、日本同窓会記念誌『歓喜嶺』と同じ名をつけており、韓国同窓会と日本同窓会の密接な繋がりを反映していた。文集には主として韓国同窓の戦後経歴が記録されているが、戦後の生活、近況、活動領域と連絡先などが名簿の形で記録されている。そこには同窓会誌の社会的なネットワークとしての機能が反映されていた。この回想文集を見れば、韓国の建国大学同窓生が朝鮮戦争に参加した経緯を知ることができ、また彼らが戦後韓国社会でエリートとして活躍していた様子も考察できる。また、日韓国交回復後、韓国側の同窓会がある程度の社会影響力を利用し、積極的に日本側の同窓会と専門的な領域で協力し、日本への訪問活動を行い、また日本同窓の訪韓活動を接待したことなどもこの回想文集に記録されている。

第一部 満洲国の高等教育機関とその同窓会——歴史学的概観

第一章、 満洲国の高等教育機関政策と高等教育機関

第一節、満洲国における高等教育機関

1、 満洲医科大学

満洲医科大学の沿革は、「奉天医院」時代、「南満医学堂」時代、「満洲医科大学」時代の三つの時代に分けられる。

1) 奉天医院時代。1907(明治40年)年4月、大連病院奉天出張所が開設され、生川玉樹が所長に任ぜられた。1908年10月、大連病院奉天分院と改称し、さらに1912年8月、医院規程の改正により奉天医院と改称され、内科、外科、眼科、産婦人科、歯科、口腔科の5部が開設された。1914年5月には看護婦見習生15名が入学し、翌1915年5月、第1回生徒15名が大連医院に入学した。¹¹

2) 南満医学堂時代。1911年5月南満医学堂が設立され、大連医院長河西健次が医学堂長を兼任した。1911年8月、勅令第230号により南満医学堂に関しては専門学校令によることが公布された。同年10月、日本人本科学生20名、中国人予科生徒8名に入学を許可した。1912年6月、輔仁会規則を定め、発会式が開かれた。1915年9月、第1回卒業生10名を送り出した。

3) 満洲医科大学時代。南満医学堂は1922年4月に、勅令第162号を以て満洲医科大学に昇格した。南満医学堂廃止後、中国人に対し実地医術を教授する専門部学則制定にともなって、中国人学生を対象とする専門部(4年制、1学年定員40名)も設置した。「尚本学入学志願者にして日本語を解せざる者の為に付属予備科を設置し、1ヶ年間の予備教育を施すこととなった。」¹²

その学校の設立目的とは東アジアの大衆の衛生状態の改善であったが、大衆の医療保健の増進も目指されていた。その際、南満洲鉄道株式会社は、関東都督府の支持を得つつ、奉天附属地の大連病院奉天分院で南満医学堂を設立した。「蓋シ東亞ニ於ケル衛生状態ヲ改善シテ廣ク人類ノ保健ヲ増進シ且ツ優秀ナル斯道ノ人材ヲ輩

¹¹ 輔仁同窓会『満洲医科大学40周年記念誌』、「満洲医科大学四十年史」、1951年4月、第5-6頁。

¹² 前掲と同じ。

出シテ社會ニ貢獻セシムルハ單ニ大東ノ文化ニ資スルノミナラス亦以テ汎ク世界ノ福祉ヲ裨補スル所以ナリ是ヲ以テ南滿洲鐵道株式會社ハ夙ニ明治四十四年ヨリ奉天附屬地ニ南滿醫學堂ヲ創設シ此カ目的ノ達成ニ努メタリシカ時運ノ進展ハ醫育ノ向上ヲ促スモノ切ナルヲ以テ既設ノ學堂ヲ基礎トシテ本大學ヲ建設スルニ至レリ。」様々な学科の設置は主に医学理論の研究を目的としており、研究科を含むこのような「大学病院」の設立は、病気を治療し、患者を救いながら医療人材を育成するという意味を持ち、学生の状況にも配慮していた。予科は主に満洲人と中国人のために設置されていたが、学生間の交流と親善を図るために寮も設立された。

「本大學部各科ニ於テハ專ラ醫學ノ理論並其蘊奧ヲ攻究シ大學醫院ヲ置キテ應用ニ資シ更ニ研究科ヲ設ケ共ニ相倚リ相助ケテ斯道ノ發揚ト人材ノ育英トニ留意セリ、而シテ學部大學生ニ預備的教養ヲ施スタメ大學豫科ヲ設置ス、大學專門部ヲ附設シテ滿洲國人及中國人ノミヲ入學セシメ東亞ノ現状ニ即シタル醫學技能ヲ授ク未タ日本語ヲ解セサル者ニハ豫科ニ豫備科ヲ附シテ日本語學ヲ教ヘ進ンテ豫科或ハ專門部ニ入ラシム、又日本人學生生徒ニ對シテハ特ニ支那語ヲ課シテ將來ニ資セリ就中寄宿舎ノ如キハ三國人ヲ收容シテ融合親善ノ實ヲ揚クルニ努メ（後略）」。

中国語の重要性は始めてから示されたのである。中国人学生は1912年から予備科に入学できた。中国人学生には奉天省の官費により学資が支給された。「大正元年(明治四十五年)十月（中略）奉天省官費派遣中國人ニ豫科入學ヲ許ス爾後数々奉天省吉林省瀋陽縣等官費派遣生數名乃至十數名ニ豫科入學許可ス」。

滿洲医科大学は日本の敗戦とともに閉学したが、1945年までに約2,600人(うち中国人は約1,000人)、総じて17期の卒業生を輩出した。終戦後、1945年10月に八路軍により、また同年11月からソ連軍により管理された。1946年4月、中華民国国立瀋陽医学院となり、1948年3月、第2回瀋陽医学院卒業式(いわゆる満大第21期卒業生の卒業式)を開催し、1948年8月、日本人教職員および学生のほとんどが日本に帰国した。¹³

¹³ 前掲と同じ。

2、 哈爾濱工業大学

ハルビン工業大学の母体は1906年にロシアの下で東清鉄道の技術養成学校として設立された。その後1920年にハルビン工業大学が、ロシア式の工業大学の形で創立された。1928年、中国国民党の北伐が完了し、関東軍は張作霖の爆殺事件以降、ハルビン工業大学を日本の都合の良い様にするため東省特別区工業大学と改称した。満洲事変以降、日本は満洲国の建設に取り掛る。そして1937年、ハルビン工業大学は満洲国立ハルビン工業大学と改称し、第一期学生を入学させた。翌年(1938年)二期生として日系学生30名が入学した。1939年にノモンハン事件が発生し、その後ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発した。満洲国立ハルビン工業大学の二期生の中には召集で出征した学生もいた。さらに二期生の場合、1938-1942年の4年間の学習を経て、1942年に卒業後すぐに入営した者もいた。

1945年8月、ソ連が対日参戦し、8月15日満洲国は崩壊した。その時ハルビン工業大学の六期生は繰り上げ卒業したが、七期、八期生は在学のまま学校の閉鎖を迎えた。六、七、八期生の中にはソ連軍によりシベリアに抑留された者もいた。1950年6月7日、中国長春鉄道はハルビン工業大学の管理権を中国人民政府に引き渡した。

1920年の創立当時は鉄道技術者の養成を主とし、1949年までに3,500余名の卒業生を送り出した。彼らはアジア、北米、ヨーロッパ、オーストラリアなどの世界各国で活躍した。

ハルビン工業大学の戦後同窓会会誌『南崗』によると、海外の同窓で戦後各国の政府の要職に就いた人は多数いた。戦後、ハルビン工業大学は、中華人民共和国政府により接收され、中国第二の工科名門大学¹⁴として発展した。大学の創立記念大会も中国側により開催された。日本側の戦後同窓会は、2000年に開催されたハルビン工業大学創立80周年記念大会に参加し、参会報告を発表した。その報告によると、校友として記念大会に参加した各国政府要人は以下の様であった¹⁵。

中国：李嵐清(中央政治局常任委員、國務院副総理)

李長春(中央政治局常委、広東省委員会書記)

呉官正 中央政治局常委、山東省委員会書記

¹⁴ ハルビン工業大学同窓会『南崗——ハルビン工業大学日本同窓会誌』、第10号(1999年)、22頁。

¹⁵ ハルビン工業大学同窓会『南崗——ハルビン工業大学日本同窓会誌』、第11号(2000年)、10頁。

王兆国 全国政協副主席、中央統戦部長

周鉄衣 全国政協副主席

劉積斌 国防科工委主任

呂福源 教育部副部長

宋法棠 黒龍江省省長

大韓民国：

金泳三 韓国前大統領(ハルビン工業大学名誉教授)

3、 新京工業大学

新京工業大学¹⁶は、1937 年に「満洲工鉦技術学堂」として創設され、採鉦、電気、機械、応用化学、土木、建築の 6 学科が設置された。当時の臨時校舎は、新京の城後路に位置した。最初は、日本人(台湾、朝鮮籍も含む)向けの学校であったが、少数の中国人学生が満洲国政府の公費給費制度により入学を許された。学校の運営機構である理事会は、満洲国の国務院(民生部、經濟部など)、関東軍および満鉄などから派遣された人員により構成された。

満洲工鉦技術学堂は、1938 年に「国立満洲工鉦技術員養成所」と改称され、初代所長は満洲国民生部教育司長皆川豊治が兼任した。第一期生は 1938 年に入学した。1938 年から 1945 年まで、全 9 期の学生が集められ、1600 余名の同窓生が輩出した。その中で、中国人同窓生の人数は約 470 人であった(台湾出身者も含む)。¹⁷第一期の学生は 150 名であるが、その中で中国人学生は 20 名であった。中国人学生は 2 月 7 日に入学し、予備教育を受けることとなった。その後、日本人学生は 3 月末に来校した。4 月 4 日には開学式が挙行された。¹⁸

日本人学生向けの募集案内には「満洲工鉦技術学堂」という校名が書かれており、日本人学生に「旅順工科学堂」と同じ教育水準である学校と思わせた。しかし、彼らは入学してから、学校の正式名称は「技術員養成所」であることを知った。学校の建物も木造であった。さらに国防色の制服と戦闘帽などを見て、騙されたという気持ちを抱い

¹⁶ 中国人同窓生は、中国側刊行した同窓生回想文集では、新京工業大学を「長春工業大学」と称する。

¹⁷ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年。

¹⁸ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、15 頁。

た。日本人学生からの抗議に応じて、大学側は学制改革を行なった。日本人学生もその過程に積極的に参加し、学生自治会まで成立した。そのうち、中国人学生も学生自治会に参加し、自治会の代表に任ぜられた者もいた。¹⁹この過程では、満洲国國務院長官星野直樹、民生部次長田村敏雄、經濟部次長岸信介、大陸科学院院長鈴木梅太郎、関東軍参謀金子定一、南満洲鉄道株式会社、満洲電業株式会社等の企業代表も学校を訪ね、学生の改革要求を支援し、講演活動なども行なった。

1939年1月1日、校名は「国立大学工鉱技術院」と改称され、1月15日中国人学生が入学した。武田清が院長に赴任するとともに、採鉱冶金学科が分離され、冶金学科が増設された。学制もその時一変して、大学本科3年、予科1年となった。満洲国における新学制によると、国民高等学校は4年制であるが、日本内地では中学校は5年制であった。1年間の予科というのはとくに中国人学生のために設置された制度だといえよう。

1940年9月5日、学校は「国立新京工業大学」と改名し、武田清は初代学長に任せられた。

1943年に長谷熊彦が第二代学長に就任するとともに、通信学科が開設された。1945年まで、全九期の学生が在籍し、1945年8月15日の終戦および学校の閉鎖まで、六期の学生が卒業した。

新京工業大学については以下のような特徴がある。まず教職員には、教授(ほとんど日本人)を除いて、大陸科学院研究員、満洲鉱業開発所研究員もいたが、そのなかには台湾、朝鮮、または中国大陸出身者もいた。さらに新京工業大学は、大陸科学院および満洲地区各工場と密接な協力関係があったが、学生は毎年の冬休みと夏休みに、満洲における工場で校外実習活動または卒業設計などを行うことができた。²⁰新京工業大学の教育管理はかなり厳しいと評価された。²¹入学試験合格率は約10%であるが、入学してからも各学年の期末試験は非常に厳しかった。当時の100満点制では、二つ科目に60点以下がある場合は不合格となり、50点以下の科目が一つでもある場合には

¹⁹ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997年、16頁によれば「この中で、学生自治会が結成され、学生運動を指導する7名の委員が選挙によって選出されました。この7名の学生委員は、採鉱学科一期生の庄司美智郎をリーダーとして、他の6学科から日本学生の代表と、中国学生代表の葉永春が選ばれました」。

²⁰ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997年、24—25頁。

²¹ 前掲26頁。

留年扱いとなった。また、学校のルールも厳しかった。学生の日常生活は軍隊式に行われており、自由に外出することは禁じられていた。

4、 建国大学

満洲事変勃発以降、1932年3月1日に満洲国が設立された。1934年3月1日に満洲国では帝政が実施され、執政溥儀は満洲国の皇帝となった。1935年4月2日溥儀は訪日に出発し、1ヶ月後、『回鑾訓民詔書』を發布し、建国精神に従って、日本天皇に忠誠を誓った。その様な歴史を背景として、1936年11月に建国大学建設計画が研究・検討された。当初、辻政信と石原莞爾は満洲でアジア大学を創設する計画であったが、満洲国の建国精神と王道政治に対応する大学の建設案に妥協した。

1937年3月26日建国大学創設の方針が固まり、6月までには建国大学の創設要綱案、予科第一期生徒選抜要領案、建国大学令(案)、学科及び実科編成案、建国大学研究院創設趣意書が起草された。総長は当時の満洲国国務総理張景恵であり、1937年7月16日、統制経済学者である京都大学経済学部教授作田庄一が建国大学副総長に任ぜられた。建国大学では満洲国の建国精神と民族協和理念が強調され、満洲国の「棟梁」になるべき人材の養成を目指していた。

学生を募集する時からいわゆる民族協和原則が守られ、「共学共寮」制度が導入された。すなわちすべての学生は寮で一緒に勉強し、暮らすこととなった。しかし、その様な「民族協和」精神が強調されていた大学でさえ、中国人学生のあいだでは反満抗日感情が芽生えていった。1940年には、彼らは反日的な政治色を持つ「読書会」に参加し、校外の組織と連絡を保ち、反満抗日運動に参加した。

建国大学は1938-1945年のあいだに第一期から第八期までの学生を募集した。戦後には、一部の日本人学生がシベリア抑留を経験し、また中国人学生の一部は延安に向かい、中国共産党に参加した。国民党に参加した中国人学生は戦後の中華人民共和国で非常に大きな政治的打撃を被り、冷遇された。韓国では建国大学の同窓会もできたが、日本の同窓会は1951年から2010年まで積極的に活動していたため、本論文にとって好個の研究対象となる。本論第二部では建国大学の建学・崩壊・戦後同窓会などについてさらに立ち入って分析し、第三部では出自が異なる卒業生集団の満洲記憶について考察する。

第二節、関東州における高等教育機関

5、 旅順工科大学

旅順工科大学は 1909 年に日本政府が関東州旅順に設立した官立旧制大学であり、その前身は旅順工科学堂であった。前年 1908 年に関東都督大島義昌は総理大臣桂太郎宛てに、「旅順工科学堂創立覚書」を提出した。その覚書で大島は「由来満蒙の地は、人文蒙昧にして百工未だ挙がらないといえども、土地広く、人口日に加わる。一旦文明の緒につかば、諸般の工業踵を返して勃興し、ために工芸技術の士を要すること（後略）」と書いて、旅順工業学堂の計画書を添付した。1909 年 3 月 8 日に第 26 回帝国議会でその予算案が通過し、旅順工科学堂の官制に関するする公布が発表された。

旅順工科大学の同窓会誌『旅順の日』は、明治時代の旅順工科学堂の歴史的意義について、後藤新平の感想を引用している。「そもそもが最初本学堂設立の必要を感じる由来は（中略）露国政府は旅順を以て極東における政治的軍事的策源地となすべく、国費を惜しまず雄大の経営を成したるが、これを継承したる我が帝国は、いかにしてこれを経営すべきか（中略）この土地は他の方法によりて旅順の価値を認め、経営を生かさざるべからざるに至れり（中略）余が旅順を東亜における文明的経営の策源地たらしめんがため、まず一大学を設立すべしという余の意見は、偶然にも桂公（桂太郎）の意見と一致し、ついに幾多の苦心と曲折とを経ていよいよこれが実行を見るに至れり。（中略）第一露国造営の海軍工場を利用する便あり。その他海軍兵団海軍病院等利用すべきもの甚だ多きは幸いなり、海軍省ともこれら建物及び機械類を無償にて交付を受くる約束なりしに、その後政治的変動のための好む所にあらざりしも、満洲を去りて内閣に入り（中略）旅順はわが租借地にありて日中露三国の交渉あり、最も神聖にして偉大なる名誉ある日露の戦跡は、学生の修養に絶大の感化を与うることを得るべし。」²²旅順においてそのような大きな学園を建設することは、後藤によると、

²² 後藤新平『学堂設立の趣旨及由来並びに将来の学堂に対する希望』（1915 年 10 月 11 日演説）、旅順工科大学同窓会『旅順の日——旅順工科大学同窓会 60 周年記念会誌』六十周年記念誌編集、1973 年 5 月

旅順を学園都市として建設するとともに、満洲の経済発展にも役立つというのであった。

1910年4月20日には始業式が挙げられ、その後毎年5月10日は旅順工科学堂の「開学記念日」と定められた。1909年9月の府令により、旅順工科学堂に機械工学科、電気工学科、採鉱冶金科が開設された。1916年には予備科が設置され、中国人学生は予備科で予備教育を受け始めた。旅順工科大学同窓会記念誌は、旅順工科学堂の特徴を以下のように述べている。学生には「興亜の士」の標準で軍事的な管理を行っており、学生に「全寮主義」的な生活習慣の修得を求めた。学校では様々な伝統的な文化活動を行った(ダイナマイト節、寮歌集編集やストームなど)。²³

1922(大正11)年3月31日の勅令160号によって、「旅順工科学堂」の廃止とともに、官制「旅順工科大学」が公布され、大学と改称された。この変遷は、同窓会刊行文集では「昇格運動」と呼ばれた。この昇格は日本内地において大阪工業大学が大阪帝国大学工学部に昇格した1929年より7年ほど早かったため、旅順工科大学の卒業生にとっては自慢できることだと思われた。²⁴

その後、1926(大正15)年2月に大学官制の一部が改定され、付属専門学校が廃止され、同年4月に大学での講義が始まった。その後、1928年5月10日に正式に開校式が行われた。1938年4月、付属臨時技術員養成所が設立された。大学設立後、学科が追加された。応用化学科は1936(昭和11)年6月に設立され、航空学科は1939年4月に設立され、教養学科は1942(昭和17)年4月に設立された。1941年7月の統計によると、旅順工科大学には40人の中国人学生を含む320人の予備学生がいた。大学本科の場合は、20人の中国人学生を含む260人の本科の学生がいた。

1945年8月の終戦後、ソ連軍は8月22日に旅順に入り、旅順と外界とのつながりを切断した。最終卒業式は8月25日に行われ、大学は9月以降ソ連軍に接收された。大学本部は10月7日に大連に移転した。この時、大連に様々な大学本部が集まった。その後、1946年11月30日に本部が閉鎖され、旅順工科大学の歴史は終わった。

²³ 旅順工科大学同窓会『平和の鐘——旅順工科大学同窓会90周年記念会誌』九十周年記念誌編集、2000年12月、第19-20頁

²⁴ 前掲『平和の鐘』21頁。

第二章、各教育機関の概要と同窓会の特徴

第一節、戦後同窓会の規模

興亜技術同志会

興亜技術同志会は 1913 年 12 月に成立された。その際、人数は少なく組織もまた確立しなかったが、助教授として旅順工科学堂に残り、のち満鉄に入社した関真が初代幹事長となった。その後、白仁武学長が興亜技術同志会の会長となり、本部組織を固め、各地の同志会成員間の連絡を強化し、『大陸工報』を毎月刊行した。その『大陸工報』は単なる同窓会会報というだけでなく、興亜技術同志会が、名実ともに大陸における先端技術開発の責任を遂行してきたことを意味した。²⁵1934 年大連に技術会館が設置され、同所に本部事務所が開設された。²⁶

その際、満洲技術協会が『満洲技術協会報』を発刊したが、その後『大陸工報』と合流し、新たに『興亜技術同志会月報』を発刊した。1932 年、その『月報』を『興亜』と改題した。一方、戦局が厳しさを増してくると、『興亜』の発刊も一時断絶することになった。終戦につぐソ連軍の大連進駐によって、同窓会事務所も閉鎖された。引き揚げまでは幹事長の住所において連絡事務が進められたが、1947 年 3 月、相田秀方幹事長が東京に引き揚げてきたときには、湯浅忠平東京支部長を暫定会長に推した。その時、「靈陽技術同志会」の名の下に各支部役員の活躍によって、引揚げてくる成員との連絡も次第にとれるようになった。1952 年 5 月 10 日、興亜技術同志会は創立 40 周年を迎え、同志会はその後も会員の事業とともに発展してきた。²⁷

終戦後、日中関係も新たな歴史的転機を迎えた。相田秀方幹事長は 1955 年以来 2 度の訪中活動により、終戦以降の日中関係の改善に大きな奉献を行った。1966 年の総会には、「興亜技術同志会」は正式に「旅順工大学同窓会」と改称し、会誌も『旅順』に改題された。

輔仁会

²⁵ 「興亜技術同志会・旅順工大同窓会略史」旅順工大同窓会『旅順工大創立六十周年記念誌——旅順の日』1970 年、1-3 頁。

²⁶ 前掲と同じ。

²⁷ 前掲と同じ。

輔仁会は満洲医科大学の同窓会組織であり、1946年に設立された。輔仁会の同窓は、日本の復興と共に、日本の医学界でそれぞれの地位を確保し活躍した。輔仁会によって刊行された『満洲医科大学同窓会刊行資料 柳絮地に舞ふ―追補』（1984年）には、日本側、中国側同窓の寄稿が収録され、そこでは戦後の「善後処理」などから始まる輔仁会の様々な活動について記述された。輔仁会の発展経緯についても、寄稿した同窓生の個人的記憶の角度から、詳しく記録された。その際、輔仁会会長である熊田正春はこの段階の歴史を「母校を失った同窓生の苦難の立上りからの歩みであり、その後同窓会の動向、推移の歴史を綴った」と表明した。²⁸

輔仁会の戦後の機能について、『追補』では以下のように表現している。「太平洋戦争は終結を迎え、満洲医科大学の終焉をとげた。職員も学生・生徒もなす術もなく今後の運命の行方に戸惑った。中国人の暴動、ソ連兵の進駐と戦後の奉天の移り変わりは目まぐるしかった。生命の保障だけはまあまあと感じ取れたものの、行末は暗たんたるものであった」²⁹。その時期の輔仁会の主な機能は「学生生徒日本の大学への転入学」、「学位問題」、「職員の日本での就職」の三つであった。

輔仁会の成立当初の重要な人物は、伊藤尹である。伊藤は南満医学堂を卒業してから大野章三病理教室で研究し、その後九州の野口病院で7年間副院長を務めた。彼は外科・甲状腺の専門家であり、1937年に東京都渋谷区に伊藤病院を設立した。その後、東京大空襲により、伊藤病院は山梨県に移動した。1946年に、満洲からの引揚げにより、満洲医科大学の同窓生は日本に戻り、輔仁会の本部が誕生した。1951年に開催された輔仁会の総会では伊藤尹の貢献を多としたが、同時に同窓会の本部を大阪へ移転することを決定した。当時、日本全国には10数か所の同窓会支部があった。1957年に大阪本部の運営人員の人手不足のため、ふたたび伊藤病院に同窓会本部を移転し、伊藤を輔仁会の副会長に選出した。「善後処理」が一段落ついてから、各方面の人事工作も順調に進められた。「輔仁学術座談会」も開催され始めた。座談会には、常に有名な専門家が招かれた。彼らの特別講演会では、会員は日進月歩の医薬学の新しい知識・技術について専門的に交流し討論した。

²⁸ 熊田正春、「序文」、『柳絮地に舞ふ（追補）――戦後の輔仁会』（1984年）

²⁹ 熊田正春、「満大善後処理事務所の成立と学生生徒転入学の経緯」、『柳絮地に舞ふ（追補）――戦後の輔仁会』（1984年）、8-13頁。

戦後輔仁会の歩み、とくに本部の動きについては、熊田が以下のように記している。「伊藤尹先生即ち伊藤病院を中心として諸先輩の努力と、会員の団結で今日（中略）かつて満洲医科大学で学んだという共通の意識は、会員相互の連帯となり強固な絆となって発展して行ったのである。戦後伊藤尹幹事長の尽力により、昭和二十六年四月、東京目黒の雅叙園における全国的な同窓会が、戦後初めて華々しく行われ、ここに母校なき同窓会の基盤が確立されたと言えるだろう（後略）」³⁰。『柳絮地に舞ふ—満洲医科大学史』に寄せられた原稿を読むと、全国各地に分散した輔仁会員が相寄り、助け合い、次第に同窓会支部が活発化する状況がつつさにうかがえる。1980年以降、中国においても同窓会が結成される気運が醸成された。³¹

第二節、戦後同窓会の活動の特徴——輔仁会を中心

輔仁会の戦後の主要な活動は以下の如くであった。

- 1, 善後処理。学生の転入学、学位問題、そして就職手配など。
- 2, 各支部を結成すること。
- 3, 会誌・会報を刊行すること、同窓会刊行物によって同窓生ネットワークを強化すること。
- 4, 定期的に医学交流活動を行うこと。

その過程には教授や同窓生の間でのキャリア上・生活上の提携と相互支援が反映されていた。『柳絮地に舞ふ(追補)—戦後の輔仁会』にはその提携について具体的な例が幾つか言及されている。「その頃、京城帝国大学医学部の今村(今村豊)教授は胡蘆島を経て奉天に来ておられた。満大の鈴木(鈴木直吉)教授に『日本政府文部省では教授が代表となり、資料を整えて交渉しなければ相手にしない』と伝えた。鈴木先生はその週の教授会の席上でこのことを報告したが、当時の教授では各教授とも呆気にとられたようでほとんどがそのまま満洲に居残れると思っており、先生の発言には耳もかさず何の反応も示さなかったと鈴木教授から聞かされた。その後、鈴木教授の斡旋で三項目の交渉の満洲医科大学の代表となり、日本に戻って以下の項目について各方面

³⁰ 熊田正春、「満大善後処理事務所の成立と学生生徒転入学の経緯」、『柳絮地に舞ふ（追補）——戦後の輔仁会』（1984年）、8-13頁。

³¹ 熊田正春、「序文」、『柳絮地に舞ふ（追補）——戦後の輔仁会』（1984年）

と交渉した」。「鈴木教授は、満洲医科大学代表としての委任状も証明書も持たず自らその役を守中清学長に買って出る結果となって、文部省並びに厚生省への折衝の満洲医科大学代表に決定したのであった。大学関係の書類作成は、大学庶務の斎藤寛一氏がその任に当たった」³²。

資料によれば、輔仁会は戦後以下のように推移した。「輔仁会本部は一時関西の山岡義郎先生に移った。本部は関西から九州へとの話もあったが、やはり本部は東京にという事で昭和 32 年より再び東京に戻った」³³。本部の関西移転について、同窓生の上田三郎は以下のように述べている。「輔仁会の本部が関西に移され事務所を第一病院に置く理由は関西から東京に次いで同窓生の数が多いという事、すなわち第一に松浦先生第一病院の医師の九割が満大卒業生で占められている実情と、第二に病院形態であるため種々な連絡や輔仁(会報)の発行に最善の場所と考えられたものと思う。」「本部が第一病院に置かれている間に 4 年一度の全国医学総会が京都で開催された。この機会を利用し輔仁同窓会が京都の料亭で行われることになった」³⁴。

輔仁会報は戦後始めの 10 年の間に、同窓間の連絡という機能を果たした。同窓会が編集した同窓会名簿には「1955 年を過ぎた頃より、同窓会員も夫々、そのところを得、大いに満大の実力を示し始めた。そして会員名簿を作ることにした。1957 年 4 月、名簿が出来上がった。」³⁵輔仁会の会誌は「輔仁」と命名され、一年 4 回発行された。「当時終戦後日本に引き揚げ、復員、安住の地を求めて日本全土に我々同窓生が移動している最中だったので、輔仁誌の果たす役割は近況交換、住所移転の通知が主な任務だった。」³⁶

その後、同窓会の発展とともに、輔仁会も地方に支部を設立した。その支部は北海道支部も含めて、東北輔仁会、静岡県支部、近畿支部、京滋支部、兵庫支部、愛媛県支部、山口県支部、福岡県支部等。³⁷輔仁会北海道支部の結成については以下のように記録されている。「輔仁会北海道支部の初会合は、1947 年夏、札幌で行われた。集まったのは終戦

³² 土方文生「東北地区出身学生の転入学の実際——東北帝国大学及び新潟医科大学への転入学」、『柳絮地に舞ふ（追補）——戦後の輔仁会』（1984 年）13-22 頁。

³³ 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ（追補）——戦後の輔仁会』（1984 年）34-36 頁

³⁴ 上田三郎、「輔仁会本部関西に移転」、『柳絮地に舞ふ（追補）——戦後の輔仁会』（1984 年）36-38 頁。

³⁵ 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ（追補）——戦後の輔仁会』（1984 年）34-36 頁。

³⁶ 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ（追補）——戦後の輔仁会』（1984 年）34-36 頁

³⁷ 『柳絮地に舞ふ（追補）——戦後の輔仁会』（1984 年）

後北大医学部(北海道大学医学部)に転入学した学生が主で、満洲医大卒の所謂先輩は折居(折居圭三)と伊勢(伊勢俊明)の二名だけであった。芝生の上に車座になって牛乳とコッペパンだけのご馳走であったが、それでも元気に「東亜の文華」と校歌を大声で歌ったことを懐かしく思い出す。そしてその時支部長は折居にすること、また次回からできるだけ多くの北海道在住の輔仁会員に出席してもらう様に勧誘すること、兎も角毎年この支部総会を開くこと等を決めて散会した。」³⁸

当時の支部の構成員は、引き揚げてきて仕事を再開した医師と、アルバイトによって生活を支えていた学生であったから、経済的には必ずしも恵まれず、従って初期のうちは年一回の支部総会も学生寮や会館等を借りて行われた。1957年以降の北海道支部の総会開催の様子や会員の動向または現況等については、伊勢俊明が以下のように述べている。「当支部が設立当初に、会員諸君が年一回は必ず支部の会合を開こうと決心したことがその通りになり、現在に至るまで休会した年は全然なく、三十五年にもなんなんとする長い間続いて来たことは、驚異的とも言えることで本当に嬉しく思っている。」³⁹

東北地方の輔仁会については、同窓生高坂知浦が寄稿「東北輔仁会のことども」で以下のように述べている。「1947年から1948年にかけて我が満大同窓生がボツボツ引き揚げて来た。その後は毎年開きたいと願ひながら、引き揚げ後の生活再建に力をそがれ、その余裕がなかったというのがというのが実情である。(佐々木統一郎先生と連絡がついた後)先生は宮城県塩釜市に居を構えられ、大勢の同窓、後輩の面倒を見ておられた。そうこうしているうちに、佐々木統一郎先生から小生に連絡があり、宮城、山形両県合同の同窓会をやらないかとの提案があった。結構なことなので山形県の諸君と相談の上、両県の中央に当たる天童市で開催することになった。1963年のことである。そうこうするうちにこの会を東北全県に広げようという話になり、翌年秋田から振り出すことになった。その後青森、盛岡と順次に廻り始めたのであるが、その間秋田の同窓生をはじめ、岩手の阿部鹿次郎、宮城の伊東市男等は最も熱心に会を取り仕切っていただいた。」⁴⁰。

³⁸ 折居圭三、「北海道支部の結成と今日までの経過」、『柳絮地に舞ふ(追補) 一戦後の輔仁会』(1984年) 38頁。

³⁹ 伊勢俊明、「北海道支部の現況」、『柳絮地に舞ふ(追補) 一戦後の輔仁会』(1984年) 38頁。

⁴⁰ 高坂知浦、「東北輔仁会のことども」、『柳絮地に舞ふ(追補) 一戦後の輔仁会』(1984年)、42-44頁。

それ以外は、輔仁会成員も戦後に積極的に寮歌祭に参加した。寮歌祭と輔仁会については、『柳絮地に舞ふ(追補)―戦後の輔仁会』に以下のように記されている。

「1961年10月7日第一回日本寮歌祭が東京後樂園の近くの文京公会堂において開催された。満大予科等21校が参加しているが、いわゆるナンバースクールでは三高だけであった。⁴¹⁾」。

第三節、戦後同窓生のキャリア——輔仁会を中心に

輔仁会は戦後日本で同窓生の間における医学新知識と技術の架け橋となった。善後処理が終わってから、輔仁学術座談会と医学交流活動などは日本国内から海外へと展開していった。

まず、日本国内では、戦後輔仁会における同窓間のネットワークが十分に反映された。『満洲医科大学同窓会刊行史料 柳絮地に舞ふ―追補』に、戦後の満洲医科大学の大学・研究所関連分野で活躍している同窓生についてのアンケート調査が行われた。⁴²⁾ そのアンケート調査を通じて、輔仁会は同窓の戦後医学界におけるキャリアおよび成果を詳細に記録した。終戦直後から始め、引揚げ、帰国、善後処理期、その後の日本国内・海外でのキャリア状況、学術活動などについてすべて記録された。

そのアンケート調査によれば、満洲医科大学の同窓生には少なからぬ細菌学・病理学の専門家がいた。一部の初期の学生は、卒業してから関東軍に所属し、軍務に就き、終戦後に復員した。アンケートによれば、彼らの多くは1947-1948年の2年間に葫蘆島を経由して帰国した。終戦後、1945-1947年の三年間、一部同窓は中国で国民党政府の管理下の医療機構に入り勤務した経験をもつ。例えば、森川義金は終戦前に財団法人大連医院研究部長(病理科兼細菌科勤務)として勤務し、終戦後には国民党に雇用され、中国長春鉄路公司大連中央鉄路研究部医長に任ぜられた。⁴³⁾ 山本義男は、1945年12月から国民党政府により留用され、長春大学医学院病理学専門の教授として雇用された⁴⁴⁾。大石省三は、戦後3年間満洲医科大学の眼科の助教授として働いたが、瀋陽医学院眼科教授として転職した。黒子武道は、1945年4月に関東軍衛生部幹部教育部で見

⁴¹⁾ 前掲と同じ。

⁴²⁾ 国行昌頼、「大学(研究所)関係同窓生の活躍動向アンケート調査」、『柳絮地に舞ふ(追補)―戦後の輔仁会』(1984年)、125-148頁。

⁴³⁾ 前掲125頁。

⁴⁴⁾ 前掲128頁。

習いとして勤務し、新京の第二陸軍病院で戦争の終結を迎えた。その後、彼は中国国民党政府に留用された。⁴⁵

そのほか、一部の同窓生は中国の内戦の後にも中国東北に抑留され、中国国民党政府により留用されたが、中国共産党の東北地区占領の後も彼らは留用され、医学専門家として働き続けた。前に記した山本義男は、1948 年以降中国人民解放軍長春第三軍医大学病理学教授として勤めたのち、1953 年に留用解除され、帰国した。⁴⁶武内陸哉も、山本と同じく、瀋陽医学院生理学科主任教授(国民党の支配下)から、中国医科大学生理科教授(共産党の支配下)として勤め、1953 年留用解除されて日本に帰国した。⁴⁷

輔仁会の同窓は戦後に日本国内の衛生健康事業に尽力した。満洲医科大学同窓生のなかには戦後に国立療養所の所長として務めたものも多かった。国立療養所は戦時中各県に一ヶ所軍事保護院の管轄のもとに設立された傷痍軍人療養所であり、軍人軍属の肺結核患者を収用していた。戦後には、住宅難、食料不足、環境不良などの原因により肺結核患者の数は激増していた。その状況を改善するために、日本では 1946 年から 1954 年の間、国立療養所は 183 箇所、肺結核病床は 64,500 床にまで増設された⁴⁸。国立療養所所長を務めた藤田和雄は満洲医科大学同窓生と国立療養所について、次の様な評価を行っている。「各療養所長は、目まぐるしく変化する時代の要請を素早くキャッチし、自分の管理する療養所の現状とにらみ合わせつつ、厚生本省からの、上からの指示にたよらず、所側のイニシシアチブで療養所の性格づけに努力し運営してきた。いわば、戦国時代の一国一城の主たるべき心情であったといっても過言ではあるまい中略我が満大同窓生の活躍は他の大学卒業生に伍して、一段とめざましいものがあったことは自他共に許すところであろう。」⁴⁹

第四節、戦後同窓会と外交関係

日本戦後同窓会は会員の引き揚げ後の生活の建て直しとともに、安定的な生活を得て、同窓会を充実しながら社会の各分野で活躍していた。日本と隣国の国交回復

⁴⁵ 前掲 137 頁。

⁴⁶ 前掲 125 頁。

⁴⁷ 前掲 133 頁。

⁴⁸ 藤田和雄、「満大同窓生国立療養所長列伝」、『柳絮地に舞ふ（追補）—戦後の輔仁会』（1984 年）、149 頁。

⁴⁹ 藤田和雄、「満大同窓生国立療養所長列伝」、『柳絮地に舞ふ（追補）—戦後の輔仁会』（1984 年）、155 頁。

とともに、隣国との科学技術・文化などでの交流の使命を遂行する同窓会に変わりつつあり、隣国との友情の架橋ともなっていた。

新京工業大学同窓会における訪中活動

新京工業大学の場合は、「日中友好技術者訪中団」および「朋友会訪中団」の名の下に、中国東北地方を主として、2回の訪中活動を行った。⁵⁰新京工業大学の訪中活動は同窓会訪中記念誌に載せられた。そこには中国人同窓生の寄稿も掲載された。その際、在学中に反満抗日運動・地下読書会に参加した中国人学生⁵¹も懇親会に出席し、満洲時代における学生の間での民族的葛藤を互いに諒解した。懇親会に参加した中国人同窓が次のように日本人同窓に挨拶し、中国側の立場から学生時代の軋轢に対して語っている。「第一期生が学校から出たのは1941年の春で、1940年から今年の1979年まで、丁度38年になる。（中略）38年の間、世界各国で多くの変動があったが、中国と日本の変動が最も夥しいものであった。（中略）中国と日本は近く100年以来、幾多の不幸な事態が起りましたことで、両国人民の友好往来を妨げ、これは全く日本軍国主義者のやったことで、日本人民と何も関係がないものである。」⁵²さらに「過去の不愉快なことはもはや新しい友誼にかえられ、われわれが面会できたことは又、中日両国政府の支持と同窓生自身並びに各界友好人士の努力に負うところが多いものであらうと思うのである。」⁵³

一方、新京工業大学同窓会訪中活動に参加した日本側の同窓も会誌で母校における学生時代を回想しながら、中国同窓との友好関係を目指し、中国に対する積極的な態度を伝えている。具体的には、次のような語りが普遍的である。「この度の訪中で特に感じたこと。流石に中国は雄大でスケールが大きい。バスの中からまた汽車の中から。あるいは名所旧跡の訪問で一桁違っているという感じを持ったのは私

⁵⁰ 新京工業大学校友訪中団の記念誌『朋友們——私たちの母校訪問記』によれば、第一次訪中団は1979年11月23日～12月6日に北京・瀋陽・撫順・ハルビン・長春を訪問した。第二次訪中団は1980年4月28日～5月7日には大連・瀋陽・撫順・長春を訪問した。

⁵¹ 新京工業大学同窓会『朋友們——私たちの母校訪問記』によれば、挨拶して懇親会に参加した中国人同窓は以下である。高向適（機械1期）、高旭徴（採礦1期）、汪振山（建築1期）、王著（建築1期）、丁明新（電気1期）、孫書棋（應化2期）。そのうち、1996年に中国側同窓会誌である『旧「満洲」国立新京工業大学中国人学生の記録』に反満抗日運動および革命活動についての文章を掲載した同窓が高向適、高旭徴、汪振山、丁明新などである。

⁵² 高向適「中日両国の平和友好は両国人民の根本利益に合致」、新京工業大学母校訪問団『朋友們——私たちの母校訪問記』、1980年10月1日、11頁。

⁵³ 王著「同学の集合により輝かしい展望を開こう」、新京工業大学母校訪問団『朋友們——私たちの母校訪問記』、1980年10月1日、13頁。

だけではあるまい。」⁵⁴「何を書いてもほんの一部のような気がするが、強いていえば大きな国、息の長い国だなと思った。かつて日本のした事を忘れた訳ではないが、一衣帯水の隣国で長いつき合いを考えてくれる有難い国、頼りになる大事な隣人との思いを深めさせられた。」⁵⁵さらに日本同窓は、日中友好の雰囲気が当時の中国東北地区にあふれていた様子に驚いている。「日中友好の気運が各地で見られたが（中略）瀋陽での一晚、鈴木君と唐昆⁵⁶君の家に招かれた。（中略）『唐〔昆〕君が日本語うますぎるので、私達は中国語を学ぶ要がなかった。中国語が話せないのは唐君のせいですよ。』ただ唐君が『僕等は自分の子供に日本語を教えているが貴君達も子供に中国語を学ぶようにしてくれよ。』といわれたのには本当に参った。」⁵⁷

さらに、新京工業大学の日本人同窓生も中国に対する郷愁に似た感動を感じていたが、中国が開発途中国であるという事実も客観的に認識していた。「バスが止まり我先と降り立ち（中略）夢中でカメラのシャッターを押しまくった。樹木の大きくなったことは聞いていたので驚ろかなかったが、改めて年月の長さをお思い知られた。（中略）今まで生きていて良かった、俺の青春の跡を確めたぞって腹の底から思った。」⁵⁸

満洲医科大学同窓会における医学交流活動

満洲医科大学同窓会である輔仁会の場合は、戦後医学交流の形で、中国を訪問して、中国人同窓および医学会同僚と医学交流を行なった。その時、どの名目で交流活動をすれば良いかについて、輔仁会で検討されている。満洲という言葉は中国にとって侵略の代名詞ですらあった。そしてその医学交流が、満洲医科大学の中国医学交流を目的とする東方医学研究会の名の下で行われることになった。

⁵⁴ 井下国明、「感じたことあれこれ」、新京工業大学母校訪問団『朋友們——私たちの母校訪問記』、1980年10月1日、18頁。

⁵⁵ 千葉誠幸、「夢のようであった訪中」、新京工業大学母校訪問団『朋友們——私たちの母校訪問記』、1980年10月1日、27頁。

⁵⁶ 新京工業大学中国側の同窓会誌で反満抗日運動および中国革命に熱心的に参加していた人物として記録されていた。

⁵⁷ 長連全、「思い出の数々」、新京工業大学母校訪問団『朋友們——私たちの母校訪問記』、1980年10月1日、21頁。

⁵⁸ 千葉誠幸、「夢のようであった訪中」、新京工業大学母校訪問団『朋友們——私たちの母校訪問記』、1980年10月1日、27頁。

さらに、輔仁会同窓は戦後日本と海外の医学分野でも積極的な交流活動を行った。一部の同窓の交流経歴について簡単に述べたい。前掲のアンケート調査によれば、多数の卒業生は日本国内および海外で優れた研究業績を挙げた。たとえば牧野堅は1949年から日本ビタミン学会の評議員となり、1961年にモスクワで開催された国際生化学会で講演した。彼もアメリカ国立衛生研究所、タフト医科大学及びウィスコンシン大学癌研究所で招待講演を行った。⁵⁹それ以外にも根本義衛は1946年8月に中国領モンゴル自治邦政府中央医学院の教授として働き、終戦後の1947年2月、邦人送還の米軍のLST船で船医として勤務した。1947年4月から広島市役所保健課にオーストラリア進駐軍の軍医の技師として勤務した⁶⁰。一方、松尾吉恭は、癲病の専門家として、1953年からライ菌の研究に専念した。彼は1965-1966年、1967-1968年に2度訪米し、それぞれ一年間、ライ病研究を行った。その後、1975年に、松尾は外務省の委託により、インドから訪日した医師を教えた経験を持つ。1975年以降、松尾は文部省短期在外研究員としてアメリカ合衆国、ベルギーおよびドイツ連邦共和国の主として癲病研究事情を視察、1978年厚生省よりアメリカ合衆国の癲病研究状況の視察を行った。1978年以降、タイ、フィリピン、韓国の三国における癲病の化学療法共同研究に顧問として参画した。⁶¹

第五節、語りと記憶

1、日本人同窓生の語り。

『満洲医科大学同窓会刊行資料 柳絮地に舞ふ―追補』に反映された同窓生の語り。

この回想文集は三つの大きな部分に分かれている。すなわち、1) 善後処理、2) 輔仁会の歩み、3) 輔仁会員の活躍である。寄稿には輔仁会同窓の満洲記憶が反映されていたが、その中で特に満洲医科大学の同窓のあいだで共感を持って使用されている用語と表現がある。さらに、特定の人に対する思い出も紙面を賑わしている。

「ブタマン会」

⁵⁹ 国行昌頼、「大学（研究所）関係同窓生の活躍動向アンケート調査」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984年）、126頁。

⁶⁰ 前掲130頁。

⁶¹ 上と同じ、139-140頁。

熊田正春の回想によると、輔仁会は別名「ブタマン会」と称される。「ブタマン会」は毎年正月に開催された。集会の場所は当初の伊藤病院からブタマンを作る中華料理店に移動したこともあった。「伊藤病院での何かの集まりで、ブタマンを食べる機会があり、その時、同窓生皆でブタマンを食べる会をやろうということになった。」⁶²この語りは、戦後の生活難を記録したが、さらにその様な集まりが同窓の連帯感を増進したことを反映した。小さな中華料理店の中で、同窓生たちはブタマンを食べながら、満洲記憶を共有した。「とにかく、ブタマンは我々かつての青春への、また瀋陽にあった満洲医科大学への限りない憧憬であり、同窓会の或る意味でのシンボルでもあった。中略私など、もともと精神科ということもあったであろうが、伊藤病院での学術講演会の講演は上の空で、あとで豚まんが食べられるという楽しみを目当てに出かけたように記憶する。そして講演のことは何も記憶に残っていないが、初めの頃のブタマン会での光景は今尚脳裏にまざまざと刻まれている。かくて全国の支部でも勃然としてブタマン会が誕生し、輔仁の結束と親睦と融合の役割を果たしてきた。」⁶³

さらに、「ブタマン会」という別名で輔仁会を表示することには、輔仁会同窓の集団に対する所属意識が存在するといわれている。すなわち満洲医科大学の日本同窓が共有する集合的記憶が「ブタマン会」という表現で反映されている。そして、「ブタマン会」の語りを使い、満洲経験を回想する次のような回想からは、複雑な感情が解みとれる。「『輔仁』誌の創刊号は昭和三十二年九月一日にしてようやく発刊されている。実に戦後十年である。この十年で会員は終戦の傷手から立上り自らの基盤を築いたのであろう。（中略）輔仁会の歴史に何ひとつ記録のない空白の時代である。そうした空白を埋めることを企図した本誌であったが、今やはり空しい努力であったことを痛感している。わずかに伊藤病院から起こったブタマン会、学術講演会、それを遡る善後処理事務所の追想が輔仁の戦後の歴史であって、それを演出したのは伊藤先生であった。ブタマン会が、26年から伊藤宅を離れて中華料理店で開かれるようになったのは、日本の復興を物語るものであり、先生の御病氣もさることながら各自が自立して金を払い、平等に食事をする時代を示唆するもので、あるいは一部にはいつまでも伊藤先生に迷惑をかけることを潔としない現れでもあったかもしれない。」⁶⁴

⁶² 熊田正春「戦後輔仁会の功労者伊藤先生」、『柳絮地に舞ふ（追補）—戦後の輔仁会』（1984年）2-8頁。

⁶³ 上と同じ。

⁶⁴ 前掲の資料と同じ。

上長に対する思い出

満洲医科大学の同窓生や戦後輔仁会の歩みにとって重要な人物についての語りも、会報・会誌によく反映されている。伊藤尹は輔仁会の活動に大きく貢献した人物であるが、彼に対して会誌には多くの記録が残されている。「戦後の輔仁会を語るには伊藤病院と伊藤尹先生とをまず上げなければならない。伊藤病院は渋谷区、原宿二丁目、河口湖、武蔵小山及び現在地と転々としているが、輔仁会が最もお世話になったのは、武蔵小山の伊藤病院時代と現病院とであろう。武蔵小山の伊藤病院の開設は1945年11月とのことであり、終戦後満大の引き揚げの第一陣が東京に到着したのは1945年12月で、伊藤病院としても開院1ヶ月後で大変な時であった。敗戦により母校を失い、全く着のみ着のままの同窓生が東京で成功している先輩の伊藤先生を訪ねた。伊藤先生は戦後第一代の輔仁会幹事長である（中略）数多くの後輩たちに嫌な顔一つせず、卒業生に対しては就職の、学生に対しては転入学のそれぞれのお世話をしてくださった事は、同窓生が等しく認め、今日もなお忘れえないものであろう。」⁶⁵

熊田正春は以下のように述べている。「戦後混乱期の善後処理は伊藤尹先生の愛校心からスタートしている。学生の引き揚げと学業中途の学生の転入学などの問題について努力した。」⁶⁶「戦後の輔仁同窓会は伊藤病院から始まる（中略）満洲よりまた戦地より哀れな姿で日本へと目指して引き上げてきた（中略）満洲医科大学という一つの団体としての大学、同窓会の日本での基地は伊藤病院であった。そしてその中に戦後いち早く設置されたのが満大善後処理事務所であった。」⁶⁷

伊藤は幹事長として学生生徒の転入学問題に尽力した。「本学のため同院内に善後処理事務所・同窓会本部を設置した。約五百名にのぼる学生生徒の転入学問題、ついで在奉天勤務職員及び復員軍人等の帰国後の就職斡旋等のため、伊藤君はかねて在日中の先輩・同僚と比較的早期に帰国し得た小数の教職員及び学生の協力によって、順調に解決し得た。その後、幹事長に推薦せられて、種々の問題の解決に奔走すること五ヶ年余。」⁶⁸

⁶⁵ 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984年）34-36頁。

⁶⁶ 前掲の資料と同じ。

⁶⁷ 熊田正春「戦後輔仁会の功労者伊藤先生」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984年）2-8頁。

⁶⁸ 武井右馬之輔「伊藤尹病院長 本学及び輔仁会への貢献」、『柳絮地に舞ふ（追補）―戦後の輔仁会』（1984年）8-13頁。

『追補』の中では、一部の同窓が日本人の立場で終戦直後の遭遇・傷痛について語っている。例えば「居留民会」、「ソ連軍の暴行」などである。熊田正春の回想によると「そんなある夜、それら兵士の一団は鈴木教授宅と我が家を襲った。教授は『無礼者』と一喝して、兵士隊の酷い暴行を受け、肋骨を折られた。私は幸い袋叩きを受けただけで済んだが。」⁶⁹「私たちは暴行や危害を避け、いや恐怖心も強かったと思うが、大広場の紅葉町組合教会に鈴木教授の家族共々移り住んだ（中略）かつて父が長春の公学堂長をしていた時の教え子である憲兵隊長呉大佐に訴え出た。」⁷⁰その後、呉大佐の介入により、彼らは元々の満洲医科大学の住宅に戻り、帰国の日を待っていた。その際、鈴木道吉教授の帰国手続きに問題があり、従兄弟の名前を使って難民として帰国せざるを得なかった。その件について、熊田正春の回想では以下のように記録されている。「いよいよ引揚げの当日、集合場所で『鈴木教授ではないか?』と咎められ『う』と頭を振ると『名前は』と聞かれたが、とっさに従兄弟の名が出ずに冷汗をかいたという。」⁷¹

新京工業大学の戦後同窓会誌は数多く発刊された。そのうち、新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌など同窓会総会により刊行された会誌がある一方で、専攻による各学科の支部会誌・会報⁷²もあった。ここでは同窓会「蘭桜会」記念誌である『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌、北辰高く一青春の新京時代と追想の日々』（後『記念誌』と略称する）の中に反映された内容について考察してみよう。

『記念誌』では、まず「国立満洲工鉦技術員養成所」および「国立大学新京工鉦技術院時代」（1938-1947 年）の歴史を紹介している。その部分では、養成所開設当時の「要人」⁷³および開設当時の教職員（学監、科長、主事、事務員、配属将校など）の写真を載せ、さらに養成所の概況、教官職員住所氏名録などについても記載されている。養成所が新京工業大学に改称された後、第一回卒業生を送る時の学長

⁶⁹ 熊田正春「満大善後処理事務所の成立と学生生徒転入学の経緯」、『柳絮地に舞ふ（追補）—戦後の輔仁会』（1984 年）8-13 頁。

⁷⁰ 前掲と同じ。

⁷¹ 前掲と同じ。

⁷² 例えば、応用化学科化人会会誌『化人』（1977-1997 年）、『化人会報』（1984-2003 年）、『母校創立 60 周年校友聯誼会参加訪中団感想文集』、機械学科『機友会 会員通信抄』（1991-1999 年）、採鉦三期会会報『杏花』（1994-2004 年）などがある。

⁷³ 『記念誌』によれば、いわゆる要人とは星野國務院総務長官、貝瀬顧問、皆川所長である。

講演、さらに学術報告書、日系学生募集公告などの内容も資料として記録されている。

『記念誌』の第3章から学生の語りと記憶が掲載されている。他の同窓会では上長に対する思い出が記載されるのが通例であるが、『記念誌』では新京および満洲大陸に対する回想文が多く掲載されている。そのうちでも寮生活に関する語りが比較的多く目に付く。「全員が寮生活を送る制度はその最たるものと思う。『同じ釜のめしを食う』という言葉があるが、名実共にそのものだ」⁷⁴。ある同窓生は寮生活の日課について次のように述べている。「(1)起床:朝6時、(中略)小広場へ出て点呼を受ける;(2)体操(中略);(3)朝食(中略);(4)登校:7時頃、登校準備を整えて玄関前に集合し、各科別に隊伍を組んで出発(中略)、徒歩で約4km。この至誠広場から南に大同大街に沿って、新京医大、新京工大、新京法政大学が並んでおり、ずっと先に建国大学があり(後略)」⁷⁵特に、「点呼」については、『記念誌』で次のように記録されている。「さて、一応隊長の手前出した頸をまた布団の中に引きこめるうちに、再び快い眠りに誘われる。(中略)床を離れるまでは辛い、勇を振るって、寮庭に出てみると、朝の空気は全く素晴らしい。」⁷⁶

『記念誌』では日本敗戦の頃の出来事も記録されている。抑留に関する記述も少なくない。新京工業大学採鉱学科の同窓生は次のようにソ連抑留生活を語っている。「栄養不足と過労で、望郷の念を抱いたまま亡くなる人もある。下帯一本で脇腹に抑留者番号を墨で記入され、毛布一枚掛けてある遺体を月光の下、雪橇で森の中に運ぶ。」⁷⁷同じくソ連に抑留された柴田四郎は、ソ連軍の強盗行為に対して以下のように回想している。「集結の途中で、出沒するソ連兵に私物の全てを奪われ、またまた丸裸になってしまった。(中略)(ソ連軍は)お守り袋に異常な関心を持ち、徒党を組んで、用便中の兵士のお守り袋を狙った。」⁷⁸

⁷⁴ 木村宏(建築三期)・「寮の思い出、あれこれ」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成50周年記念誌 北辰高く—青春の新京時代と追想の日々』1998年12月、142頁。

⁷⁵ 有志七名(機械四期)・「四期生と城後路寮」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成50周年記念誌 北辰高く—青春の新京時代と追想の日々』1998年12月、148-149頁。

⁷⁶ 山岡詩瓢(応化四期)・「寮生活の一日」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成50周年記念誌 北辰高く—青春の新京時代と追想の日々』1998年12月、152頁。

⁷⁷ 二俣昌永(電気三期)・「異国の丘——歌と私のソ連抑留」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成50周年記念誌 北辰高く—青春の新京時代と追想の日々』1998年12月、241頁。

⁷⁸ 柴田四郎(電気三期)・「ソビエト抑留記」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成50周年記念誌 北辰高く—青春の新京時代と追想の日々』1998年12月、244頁。

さらに『記念誌』では、引き揚げに関する出来事も語りの重点として着目されている。「私は留用技術者として 1947 年 5 月初めまで西安で働き、日本へ引き揚げたのですが、奉天で約 1 ヶ月半の収容所生活を送った。（中略）収容所の食事は朝と晩の二回、いずれもコウリャン飯に醤油をお湯で薄めただけである。私は引き揚げ者二十八名の責任者を引き受けていたので生活をどうするか迷った末、とにかく仕事を探そうと奉天市内に出かけ（後略）。」⁷⁹

2、 中国人同窓生の語り

『新京工業大学中国校友記事』に反映された教育経験者の証言——集合的記憶の観点から

『長春工業大学中国校友記事』は中国人新京工業大学卒業生の寄稿を編集した回想文集である。この『記事』は、もう一つの中国人同窓生回想文集である『回憶偽滿新京工業大学』の内容も参考にして、1997 年に日本語に翻訳された。

まず、学生の思想や生活は、学生科の責任によって管理されており、学生はすべて校内で生活する全寮制度であった。「（前略）朝はベルが鳴ると一斉に起床、洗面ののち、戸外に集合、各隊長の引率で駆け足、早朝体操を行いました。その後 1 時間ほど、自習や新しい科目の予習など」を行い、「朝食のあと 20 分ほど歩いて学校に着き、授業を受け（中略）午後は 4 時限の授業ののち昼食、午後は 3 時限で、放課後は課外活動や掃除」を行った。「夕食は 2 時間ほど自習やその日の授業を復習し、その後舎監の夜の点呼を受け、就寝」した。⁸⁰戦争をめぐる中国人同窓生の回想によると、戦争が拡大するにつれて食糧不足になったので、学生たちは南嶺の街頭へ大勢で出かけて煎餅（テンピン）を買って飢えを凌いだ。一方日本人学生はしばしば夜中に付近の畑へ出かけ、じゃがいも、とうもろこし、枝豆などを寮に持ち帰り、煮て、同室の学生に分け合っていた。⁸¹『記事』によると、新京工業大学の寮は 3 度移転した。寮は「蘭桜寮」と命名された。その理由は「蘭は満洲国の国花、桜が日本の国花である」からであるという。⁸²

⁷⁹ 原憲正（採鉱一期）・「生々流転」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌 北辰高く——青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、238 頁。

⁸⁰ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、28-29 頁。

⁸¹ 前掲 29 頁。

⁸² 前掲と同じ。

中国人同窓生には、在学期間に受けた教育は、常に「軍国主義教育」として再構成された。『記事』の中で中国人同窓生は、在学中に経験した「反満抗日運動」について、次のように回想している。「軍国主義教育は日本人学生に、侵略と領土拡張の軍国主義思想を注入し、忠君愛国、絶対服従の武士道精神を培い、帝国主義の『大東亜共栄圏』ための犠牲になることに価値があるという観念を植え付けるためのものでした(ママ)。同時に、実弾射撃や行軍等の軍事訓練を出征準備のために強引に進めた。軍国主義思想を注入するために、毎日早朝、天照大神や天皇に向かって遥拝をさせ、度々隊伍を組んで新京神社に参拝し、また食事の前にはみんなに天照大神に感謝の祈りを捧げるなどさせた。その上工大の日本語『寮歌』は赤裸々に日本帝国主義の野心を暴露した内容となっている。」⁸³

学生の制服は統一した規格があった。高等術院以前は日本の高等専門学校のスタイルに従ってリボンのついた黒い丸帽と黒色の制服であり、「技術院」とか「大学」の徽章のある帽子をかぶり、各科および学年・クラスの区別を表した。1940年に工業大学になってからは、学生の制服は国防色のウールのサージ服となり、角帽とカーキ色のラシヤの外套に改められた。冬は防寒帽と防寒靴をつけ、教練のときは戦闘帽とゲートルを巻いた。⁸⁴さらに、中国人学生はそのような寮歌を通じて、軍国主義教育を実感した。『記事』によると、軍事訓練などは「教練科」に属するが、中国人学生は日本人学生と分けて訓練されていた。軍事訓練は毎週一回となり、たまに「軍人勅諭」を読んだり、たまに「歩兵操典」を学習したり、戦時期の日本の歌謡を歌ったりした。日本人学生は分隊、小隊、中隊と分かれ、突撃訓練や実弾射撃の演習をした。太平洋戦争が勃発してから戦線が拡大し、日本軍の兵員が不足し、1943年から学徒動員が始まった。「最初の頃の応召者はまだ熱狂的なところがあり、神社で別れを告げ、光栄の気分浸かりながら駅頭から送られてゆきました。のちに戦況が日々に悪くなってきたところの応召者は、顔から笑いが消え、元気がなくなってゆきました。日本軍は武器も兵力も尽き、とうとう『神風号』決死隊のような肉弾攻撃に頼らざるを得ない段階に達し、日本人学生の中には『人生25年』と口々に叫びながら、死ぬために前線に送られてゆきました。統計によれば、日本の敗戦によって戦争が終わるまでに、一期生から五期生までの

⁸³ 前掲 31 頁、寮歌は次のようになっている：歴史は遠し、燦として；日出づる国に、溢れる；興亜の使命、果たすべく；新に国を、興したる；我等が抱負、誰か知る。

⁸⁴ 前掲と同じ。

日本人学生のうち 70 名余りが、ビルマ、沖縄、ニューギニアから南太平洋、サイパン島に至る戦線で前後して戦死し、5 名の学生がシベリア抑留で亡くなっています。」⁸⁵

『記事』はそのほか「勤労奉仕」に関する集合的記憶を反映していた。中国側の同窓生は「勤労奉仕」を、「日本の侵略者が各大学の大学生を組織」した、「軍需生産のための「強制労働」と表現している。『記事』にはさらに「勤労奉仕」について次のような記録がある。「[1943 年]6 月 14 日、工大の学生は新京神社に参拝の後、他校の大学生と共に児玉公園に集合、「勤労奉仕」大隊を編成、雨の中で閲兵式が行われました。6 月 19 日には東寧に向けて出発しました。綏芬河一帯は原始森林で、その中の昼夜を分かたず雨を冒して行軍、樹木を伐採し、泥土を除けて新しく道路を修築しました。各人がテント、支柱、毛布、シャベルや鶴嘴、そして飯盒と何日分かの食料を携帯していました。晴れた日でも太陽を見ることができないほど湿気の多い密林地帯で、ブヨが飛び交い激しく人を刺し、熊や猿があたりを駆けたり吠えたりして、恐怖の気持ちでいっぱいでした。このように大変劣悪な環境と困難な苦難に堪えられず、途中で病死するものもありました。7 月 20 日になって、毎日の労働や行軍の疲労で力が尽き、長い道のりを一ヶ月の長きに往復し、この『勤労奉仕』は終わりました。」⁸⁶この他、1943 年、1944 年の冬休み、夏休みには、学校側は上級生を組織し、撫順、鞍山、瀋陽[当時は奉天]などの地区の鉱工業企業へ「勤労奉仕」と称して、日本軍の軍需品の生産労働や兵舎の建設に強制的に参加させたという。

『記事』で中国人学生は、そのような軍国主義色が濃厚な学府での学習の動機について、以下のような要因を指摘している⁸⁷。「第一に、工業救国のために学問をしたい志を立てていたことです。当時の認識は、アヘン戦争以来、中国は度々列強の侵略と屈辱を受けたため、主として科学技術面や工業面で先進諸国より遅れていました。ですから強国となるためには工業を振興することによってのみ可能です。第二に、中国人学生は争うほどの気持ちで勉強し、弱気は絶対に示しませんでした。日本人学生との学習の上の競争でも、民族間の優劣を争う競争として体現しました中略第三に、中国人学生にとって学習できる機会が得難かったので、軽々しくこの機会を捨て去るようなことはありませんでした。(中略)工大への入試に当たって、多くの制限を受け、また

⁸⁵ 前掲 32 頁。

⁸⁶ 前掲 33 頁。

⁸⁷ 前掲と同じ。

多数の家庭には生活困難者もあり、公費で大学に入学できるようなことは簡単なことではありませんでした。第四に、学習するに当たっての障害は二つであり、まずは日本語で講義を受けること（英語とドイツ語の講義も日本語で行われました）、次に口頭での講義が主体で、基本的に教材と合わせた講義がなかったことです。（中略）そのため毎日の夜の自習は深夜に及び、ひどい時は翌朝午前2時を過ぎることもありました。難しいとこにぶつかった時はおひやで頭を洗い、徹夜することともありました。」⁸⁸個人で苦学する他に、先輩に依頼して、互助学習し、団結して学習の困難を克服した。

新京工業大学で感じた民族感情も中国人学生の集合的記憶に残っている。課外活動では、日本人学生の多くは武道や野球の練習、あるいは囲碁などに参加して、中国人学生は「バスケットボールを愛好していた。」⁸⁹『記事』には、韓修玉という学生に関する以下のような記述がある。「かつて満洲国側は我々を『満洲国大学生バスケット代表チーム』として、朝鮮や日本へ試合に行かせようとしたが、韓修玉らは『満洲国』代表になることはとんでもない民族の恥辱だとして、勉強せねばならぬということで参加を拒否した。」⁹⁰つまり、韓修玉らは、課外活動の選択に民族感情を交えていたといえよう。

そのような環境のなかにあって、中国人学生の間では、先輩から後輩へ、愛国的な意識が伝えられた。これは主に左翼書籍の回覧や愛国歌謡を練習するなどの方法によって進められた。そのような方式は、大学当局から見ると「非合法的な」方法であるが、それ以外は新学年が始まった時の歓迎会や、卒業生を歓送するときのパーティ、公園での散歩など合法的な方法で行われた。「歓迎パーティなどでは、日本人学生が中国語を知らないという弱点を利用して、王伝久などは公然と興奮しながら高らかに『起て！ 奴隷となるなかれ人民（後略）』（義勇軍行進曲のこと）を歌い、載鴻范は悲憤しながら『我が家は東北松花江の畔に在り（後略）』を歌い出した。」⁹¹中国人学生の観点から見れば、学校側は団結を軽視し、その団結に反対することは民族抑圧のための主要な施策であった。つまり学校側は、「12・30」事件後、中国人学生はすべて「思想犯」の後援者であると見なした。『記事』によると、中国人学生はそのような差別と闘った。

⁸⁸ 前掲 34 頁。

⁸⁹ 前掲と同じ。

⁹⁰ 前掲 30 頁。

⁹¹ 前掲 51 頁。学生の中で主な転唱された歌は「蘇武牧羊」、「滿江紅」、「義勇軍行進曲」、「流亡三部曲」、「大路歌」等である。

「私たちは常に中国人の校友に不利な徴候が表れないか警戒し、日本人学生の給食差別の下相談や、ストームなどするような状況をつかんだ時は、先輩校友たちは互いに通報し、対策を研究した。また日本の上級生が事件に託けて中国人学生を説教しようとした時は、先輩校友が全面に出て交渉にあたり、『日満親善、民族協和』のスローガンを利用して中国人学生が自分たちで処理することを彼等に要求した。そして一致団結して校友の人身の安全を図った。」⁹²

『記事』は、中国学生間の愛国的な感情から生み出された団結と感情を集合的記憶として記録している。「同窓生の関心は、入学試験のときから始まった。九期生の場合、予備試験の合格証を受け取った後、先輩から入学試験が実施されるときになると、先輩の校友は長春[當時は新京]駅まで迎えに行き、旅館を探す世話をしたり、気候の心配りや、入学試験への自信を持たせ、試験に合格するように前祝をしたりした。新入生は入学後、毎年みんな歓迎会に招かれ、学校の政治状況や学校の規則、注意すべき事項、学習に励むべきことを紹介されて、将来、祖国に報いるための準備がされた。」⁹³すなわち、中国人学生の人数は少なく、ともに勉強した時間が短くても、その逆境の中の友情はひととき忘れがたいものであった。『記事』は以下のように述べている。「当時は大変困難で、不幸な境遇に置かれていた。我々は『三等国民』であり、また『三等学生』とされていた。中国人であることが明らかであるのに「満系」と呼ばれ、政治上の圧迫や行動上の監視を受けた。中国人学生は、宿舎も分けられ、思想や言論や挙動に至るまで、舎監や日本人学生の厳密な監視を受け、書籍や日用品など常に秘密捜査されていた。」⁹⁴

愛国感情に従って、「軍国主義」に抗する「反満抗日」運動が発生するのは自然である。「12・30」の大がかりな逮捕以後、警察や特務は常に学校を訪れて「思想犯」を捜し、政治的迫害による恐怖心を植え付けようとした。また日本の軍国主義教育は、厳しい階級概念を学生の頭にたたき込んだ。「街頭で上級生に逢えば必ず敬礼をし、上級生はいつでも下級生をなぐって、罵ってもよかった。」⁹⁵日本人学生はいつも「満系学生」を侮辱し、叱責してもよかった。中国人学生は常に身の安全と民族の尊厳がおびやかされ、精神上の長期にわたる抑圧を防ぐことができないまま、苦悶と悲憤の状況が続き、

⁹² 前掲 37 頁。

⁹³ 前掲と同じ。

⁹⁴ 前掲と同じ。

⁹⁵ 前掲と同じ。

毎日のように抗日戦争の一日も早い勝利を待ち望んでいた。そして、彼らの集合的意識は「必ずや団結して共に国難に向かい立ち上がるべきである」⁹⁶というものであった。

『大連、アカシアの学窓——証言、植民地教育に抗して』に反映された高等教育経験者の証言——個人的記憶の観点から

竹中憲一『大連、アカシアの学窓——証言、植民地教育に抗して』は、64名の中国人植民地教育経験者に対してインタビューを行った。竹中は、彼らの教育経験に従って中等教育から高等教育まで分類し、学生らの個人的記憶を考察した。そのうち、満洲国高等教育経験者は旅順工科大学の張大鈞、奉天工業大学の陳海震、吉林師道大学の王文学、新京政法大学の劉志明である。彼らには、満洲国の学校で行われていた神道の儀式および「東方遥拝」に反発する感情と、それに対する中国人としての民族感情が生まれた。これは、中国の建国大学同窓生の回想文集『回憶偽満洲国建国大学』の中に反映されたイデオロギーと共通する側面を持つ。一方、個人的な記憶と出来事に関する観点は異なった傾向を有している。張大鈞は最初満洲国の留学生試験を受け、成績が良いので、「日本のどの大学でも無試験で入学できる資格を獲得した。」⁹⁷彼の担任教員は「満洲国の最高学府である建国大学」⁹⁸の入学を強く勧めたが、張は卒業して満洲国の官吏となることに抵抗感があったので、結局旅順工科大学に入学した。入学して感じたのは、「建国神話」などの思想教育から解放され、自由な雰囲気の中で勉強できたことであると述べている。彼によれば、旅順工科大学では学科選択などに一部差別があったが、基本的に民族差別はあまり感じられなかった。日本人学生のほとんどは日本から来た学生で、植民地に特有の民族的差別感情を持っていなかったのも、素直な気持ちで付き合えたという。中国人としての張の反日感情は勉強に向けられた。「成績は日本人学生を抜いて、いつも一番であった。成績がいいと差別されることもなく、教師もかわいがってくれ、日本人の友人も多くなった。」⁹⁹

⁹⁶ 前掲 36 頁。

⁹⁷ 竹中憲一、「日本人学生に成績で勝つ」『大連、アカシアの学窓——証言、植民地教育に抗して』明石書店（2003 年）、257 頁。

⁹⁸ 前掲 257 頁。

⁹⁹ 前掲 254-258 頁。

陳海震は 1945 年奉天工業大学に入学した。奉天工業大学は日本人学生を主としていた。その大学は、日本の高等専門学校のレベルに対応し、日本人は三年で卒業、中国人は四年で卒業となった。陳は応用化学科に入学した。授業はすべて日本語によるもので、英語、数学、物理、機械などの科目があった。陳の回想によると、彼は「その時ハルピン工業大学出身の張という先生から科学を習った。張は時々陳を自宅に招いて、日本の敗戦が近いこと、新しい国造りが必要なこと、科学技術の重要性、日本人の中にいても中国人としての誇りを持って行動すべきことを話して聞かせてくれた。」¹⁰⁰これは奉天工業大学で受けた最初の政治的な影響であった。さらに陳は寮で中国人同窓から反日的政治運動の宣伝を聞かされた。「大学生になると、政治のことも理解できるようになっていた。寮の同室に何という学生がいた。最初はあまり話もしなかったが、知合いになるにつれて、日本の中国侵略について腹を割って話す様になった。何から誘われて政治グループの学習会にも参加した。学習会で上海、北京から送られてくる社会科学の本を読んだ。学習会では、何は勉強して新しい国のために役立つ人材になるよう呼びかけた。」¹⁰¹そして陳も反日的な感情を勉強に向けた。彼は睡眠時間を削減して応用化学の勉強に没頭したという。

王文学は 1944 年に吉林師道大学予科に入学した。王は在学中に「勤労奉仕」で吉林省の通化県に行った。彼の回想によると「軍隊の監督下で山に入り、一ヶ月半ほど作業が続いた。」¹⁰²作業の環境は悪く、卒倒するものが続出したが、それでも軍需品の生産ということで、強制的に働かされた。王は通化県で日本の敗戦を知った。「民族的抑圧から解放されたという喜びと、大学での勉学を中断しなければならないという気持ちが入り交じった複雑な感じであった。」¹⁰³彼は通化県を離れ大連に帰ることにした。その時「通化県から撫順まで列車が出ていたが、撫順から奉天までは列車はなかったので、五、六冊の授業ノート以外の持ち物はすべて捨てて、奉天に着いた。奉天では日本人学生と間違われ、集団暴行を受けそうになった。」王は終戦直後奉天の混乱的な状況について回想している。「奉天に収容されていたアメリカ人が暴動を起こしたり、日本

¹⁰⁰ 竹中憲一、「仲秋節の「勤労奉仕」」、『大連、アカシアの学窓——証言、植民地教育に抗して』明石書店（2003 年）、268-269 頁。

¹⁰¹ 前掲 269 頁。

¹⁰² 竹中憲一、「吉林師道大学に学んで」、『大連、アカシアの学窓——証言、植民地教育に抗して』明石書店（2003 年）、274 頁。

¹⁰³ 前掲 274 頁。

人商店が潰されたり、道を歩いている日本人が襲われたり、着のみ着のまま奉天に逃れてきた日本人で収容所はごった返していた」。¹⁰⁴

劉志明は1942年に新京政法大学を受験して合格した。彼によると「政法大学は学費免除で、給付金として一ヶ月二七円が支給された。日本人以外にロシア人、モンゴル人、朝鮮人も交じっていた」。¹⁰⁵劉によれば、新京政法大学では、法律の勉強より「精神教育」が強調されていた。「毎朝『東方遥拝』の後、時局講話、軍事訓練が行われ、身体が弱かった中国人の友人が冷水浴で重度な肺炎になり死亡するという事件も起こった」。¹⁰⁶彼の個人的記憶によれば、終戦前後の思い出は、以下のようなものであった。「1945年になると、日本人学生はほとんどが学徒出陣し、中国人学生30数人だけになった。授業はなく、毎日が『勤労奉仕』」の日々であった。」¹⁰⁷彼は「勤労奉仕」の経験から「日本の兵隊の中にも厭戦気分が広がっているのを知った」¹⁰⁸。

第二部 満洲建国大学とその同窓会

第一章 建国大学の概要

第一節、満洲国の建国理論と建国大学の創設

満洲國通信社編『満洲國の歴史と精神：少國民讀本』（満洲國通信社、1938）は満洲国通信社が発行した若者向け教育讀本で、満洲国の建国の歴史と満洲国の建国精神を紹介している。それによれば、張学良政権下では「苛斂誅求」により、満洲国民の生活が困難であった社会の現状が強調されている。讀本によると、関東軍は「満洲事変」を惹き起こし、張学良など軍閥を追放し、満洲人民が平和に暮らし働くために必要な条件を提供したと主張されている。この讀本によれば、帝国体制の実施と「大満洲帝国」の樹立には、歴史的な必然性があるという。この歴史資料には、満洲国の設立以後に行

¹⁰⁴ 前掲 274 頁。

¹⁰⁵ 竹中憲一、「法律家を目指して」、『大連、アカシアの学窓——証言、植民地教育に抗して』明石書店（2003 年）、280 頁。

¹⁰⁶ 前掲 280 頁。

¹⁰⁷ 前掲 281 頁。

¹⁰⁸ 前掲 281 頁。

われた社会の広範囲にわたる若い満洲国民に対するイデオロギー教育と、満洲国設立以前の満洲人民の集合的記憶に対する支配者側の意識が反映されている。

民間団体としての協和会は、満洲建国初期にも建国理論を樹立するにあたって重要な役割をになった。満洲国協和会編『満洲国協和会之概要』（大同2(1933)年）は、協和会の組織形式、最高機関、組織大会、創立宣言及び綱領について紹介していたが、その中に「協和会とは何か」、「協和会結成の遠因」、「協和会結成の近因」、「設立の動機と構成人物」、「協和会の使命と東亜連盟」、「過去1ヶ年間の事業」など詳しい項目も含まれている。とくに強調されたのは、協和会の性格についてである。すなわち協和会は政党ではないということで、ドイツのナチ党、イタリアのファシスト党とは異なり、さらに中国の国民党や共産党とも異なっていることが説明された。この『概要』によれば、協和会とは、満洲の在地エリートによる、さまざまな民族の歴史的現実と産業構造の社会的現状に基づき、古くから各民族によって開発されてきた資源を守り、満洲の社会的安定と経済的發展を保証する「思想建国団体」である。『概要』では、張学良は満洲内部で生じた社会矛盾（宗教団体の林立、社会の混乱、農業の不振、馬賊の横行など）の原因を海外（日本側）に負わせた者と批判されている。一方彼張学良は民族感情を利用して、南京の蒋介石政権と合流し、満洲地区に「三民主義」を導入した張本人とされた。さらに、排外政策に訴えて満鉄など日本企業の社員の給料を削減し、在留邦人に圧迫をもたらした。

そして、『概要』によると、満洲事変後、満洲国の創立過程において、社会各部門の活動を円滑に進めるために、満系有力者をも含めた上層組織が必要であるとされた。

『概要』では協和会の組織について、以下の三つの点が重要な点であると強調された。

- 1、「満洲国協和会」は満洲人民により自発的に結成された「思想建国団体」である。
- 2、「協和会」は政党ではないとする一方で、共産党の「攪乱」、国民党三民主義の「欺瞞」及び資本主義の「重圧」を批判している。
- 3、「協和会」は満蒙在住民の生存欲求を反映し、満洲国を効率的に運営する。他方で協和会は、下層機構を整備するための必要条件も提供している。

満洲国外交部編『満洲国民之総意』（満洲国外交部、1932年）は、満洲国が独立した原因と事実経過を説明し、満洲国の独立は三千万民衆の総意を表していると主張した。リットン調査団報告書を反駁し、国際連盟にその報告書の錯誤を訂正するよう要

請した。そのほか、『総意』には、満洲における様々な民族の在地住民から、満洲国政府について好意的で、張学良については批判的な「意見書」も編集されていた。例えば「痛论旧政权之虐政、讴歌新政府之恩泽」(在満俄人移住者代表意見書)、「旧政権の虐政についての痛論、新政府の恩恵についての謳歌」(在満露人移住者代表意見書)、「主張民族自決之公理, 希望国联支援満洲国」(奉天省農工商学各界代表之意見書)、「民族自決の公理を支持し、国際連盟の満洲国支援を希望する」(奉天省農工商学各界代表の意見書)、「宣明満洲国民之決心、主張民族自決之自由」(新京總商会代表之意見書)、「満洲国民の決心を宣明し、民族自決の自由を主張する」(新京總商会代表の意見書)、「历数人民既往之痛苦、称扬建国以后之幸福」(吉林各县人民代表之意見書)、「人民既往の痛苦を列挙し、建国以後幸福を称揚する」(吉林各县人民代表の意見書)、「驳斥李顿报告之荒谬, 解释満洲建国之真相」(黑龙江省民众代表之意見書)、「(リットン報告の謬説を駁し、満洲建国の真実を解釈する」(黒龍江省民衆代表の意見書)などである。

さらに、異なる民族の小学生が出した満洲国に対する『意見書』も収録されていた。例えば、『東省特別区小学生意見書 (「为什么拥护満洲国哪?」, 「旧军阀与人民之害」; 「王道政治对人民之利」; 「各民族感谢满足我国善政」)』(『東省特別区小学生の意見書』(「なぜ満洲国を擁護するか」、「旧軍閥は人民に害」、「王道政治は人民に利」、「各民族は我が国の善政を感謝する」)); 以及『在満朝鮮人小学生之意見書 (「日月重光」; 「誓死拥护乐土」; 「回忆从前之痛苦」)』(『在満朝鮮人小学生の意見書』(「日月重光」、「必死で楽土を擁護する」、「前の痛苦を回想する」))などがある。それらの意見書には、1932年3月1日に『建国宣言』が發布されてから、儒家思想と組み合わせた「王道政治」、「王道楽土」などが如何に民衆の思想に浸透したのかが反映されている。「新学制」が実行される以前、満洲領域では一部地域で国民党体制下の教育制度が行われていたが、関東軍方面が一番警戒していたのは国民党の「党義教育」である「三民主義教育」、さらに共産党により行われたマルクス主義的な教育であったという。従って、中国人が共感する伝統的な儒教思想を利用するのが適当だと考えられた。

1937年10月10日に満洲国により『新学制要綱』が發布された。その中では「建国精神及訪日宣詔ノ趣旨ニ基キ、日満一徳一心不可分ノ関係及民族協和ノ精神ヲ体認セシメ東方道德特ニ忠孝ノ大義ヲ明ニシテ旺盛ナル国民精神ヲ涵養シ徳性ヲ陶冶スル」ことが教育方針として示された。最初1935年皇帝溥儀が帰国して『回鑾訊民詔書』を發布した。その中で溥儀は「朕、日本天皇陛下ト精神一体ノ如シ」、即ち満洲国の建国

精神を儒教色彩が濃厚である「王道」から、天皇統治に適合的な「皇道」に転換させた。宮沢恵理子によれば、「このころ関東軍は満洲国内を軍事的に完全に掌握するために中略勃発した抗日東北義勇軍蜂起に対する討伐を繰り返した。関東軍の軍事制圧が次第に完成する傍らで、満洲国政府は建国五周年となる 1937 年以降を第二期国家建設期とみなし、これを機に組織改革・新学制・第一次産業開発五カ年計画・開拓国策計画などの実施を予定していた。」¹⁰⁹

積極的に一連の行動を展開した関東軍は、教育の側面でも、満洲国の国策に見合った様々な計画と政策を行った。建国大学は、新学制に従って設立された。「建国大学令」によると、建学目的は「建国精神の神髓を体得し、学問の蘊奥を究め、身を以て之を実践し、道義世界建設の先覚的指導者たる人材を養成する」であると表現されている¹¹⁰。換言すれば、「建国大学令」により、建国大学は満洲国の建国精神を体現したのである。最初の石原莞爾等のアジア大学構想とは非常に異なっていたが、建国大学の創設は、満洲国の国家建設と関東軍の戦略目標と緊密に結びついていた。

「建国精神」の「神髓」の体得のため、建国大学では「道義世界の先覚的指導者」を養成するのは必須であった。一方建国大学創設準備と同時期に、協和会が「建国精神」のイデオロギー教育として力を入れていたのは、青年訓練の実施であった。建国大学と協和会の青年訓練は、非常に類似していた。宮沢によれば、「この青年訓練の内容は、建国大学の教育方針と共通点が多く、明らかに両者は同一の思想に基づいて構想されている。」¹¹¹宮沢は「建国大学創設と協和会との関係を直接示す資料は発見されておらず、両者の関係(の実態)については従来不明とされてきた」と述べる一方、「建国大学と青年訓練の共通点を考察することによって、建国大学設立構想は協和会の青年訓練を補完するものであると結論づけることが可能であると思われる」と判断している¹¹²。以上に述べた共通点に着目すると、建国大学とは満洲国における国策大学であると考えることが出来る。建国大学は、満洲国の建国精神を体現する必要がある、さらに戦時期の必要に従って思想・精神訓練の内容を調整し、満洲国に貢献しうるエリート官僚の養成機構として構想された。

¹⁰⁹ 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、風間書房、1998 年、12 頁。

¹¹⁰ 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史総論』満蒙同胞援護会、1970 年、607-609 頁。

¹¹¹ 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、風間書房、1998 年、20-21 頁。

¹¹² 前掲 21 頁。

第二節、建国大学の概要

関東軍は中国東北地区で 14 年の支配を行った。その時、主な日系の高等教育機関では実業を重視し、理科系が中心であったが、一方建国大学は文科系の最高学府であった。小山貞知によれば、その建学目的は以下のようであった。

「吾人は建国大学の創設により中略二つの大きな問題が解決されたことと思ふ。一つは今次創造的經營的国家の新組織として、行政機構が改革され、協和会が拡大強化されたのであるが、然る上はそれに充当する人物が必要である。建国大学は実にその人材を養成する所である。その二つは日満一徳一心、民族協和、王道楽土、道義世界の実現を理想とする満洲国の新原理が昨年(1936 年)九月十八日軍司令部指示『満洲帝国協和会の基本精神』により大体見透かしがついたのでこれからはその蘊奥を極めれば良いのである。」¹¹³

従って、国策大学として、建国大学の創立階段では、アジアに向け生徒を募集する計画であった。しかし、開学以前に日中戦争が始まったため、実際の生徒募集は日本全国および中国東北地区、朝鮮半島、台湾でしか行われなかった。従って、学生の出身は日本、中国、朝鮮、台湾、モンゴル、ロシアなどであった。建国大学には、開学から閉学まで八年間、ずっと「共学共塾」を行っていた。そのため、異なる出自の同窓生集団を研究すれば、各同窓生集団の満洲記憶の差異を考察できる。

建国大学の教授については、石原莞爾構想では「各地の先覚者・民族革命家を招聘する」予定であった。実際には日本人以外の教授の招聘活動は根本龍太郎¹¹⁴により行われた。1937 年に日中戦争が勃発したため、海外から教授を招聘するのは難しくなった。建国大学の教授陣は日本国内の各大学から招聘されたが、外国人教授は中国国民党系学者である鮑明岑と朝鮮学者である崔南善などわずかしかなかった。この二人は、宮沢恵理子の研究では「政策教授」と呼ばれている。すなわち関東軍の政策によって教授になったという意味である。日本人建国大学教職員については、『建国大学同窓名簿』に記録がある。戦前の資料としては、東洋文庫に 1941 年度版「建国大学要覧」が所蔵されている。また『建国大学研究院月報』に教職員の略年譜などが記録されている。「建国大学要覧」(1941 年度)に従って建国大学における日本人教職員の状況を見

¹¹³ 小山貞知、『満洲評論』第 13 巻第 5 号(1937 年 7 月 31 日)2 頁、時評欄。

¹¹⁴ 当時満洲国総務庁事務官。

ると、以下のような特徴がある。第一に、学長である作田庄一が京都帝国大学経済学部教授であった関係で、京都帝国大学卒業生・関係者が多数である。第二に、東京帝国大学文学部国史学科教授である平泉澄の推薦を受けたものがあり、多くの経済学者が京都大学から赴任したことを考えれば、学科ごとに異なる出自の学閥があったと考えられる。¹¹⁵

最初の構想では、卒業生のため「建国大学研究院」と大学院を設置することが予定された。1938年9月1日には「建国大学研究院令」が公布され、建国大学に属する研究機構として建国大学研究院が設置された。

一方大学院は、構想のようには順調に進まなかった。第1期生の卒業は1943年6月であり、日本は太平洋戦争の最中にあった。そのため、日本、朝鮮および台湾の卒業生はその後軍隊に入り、また、半数以上の学生は学徒出陣で学業を中断した。そのゆえ、建国大学で大学院を設置するのは困難となった。

建国大学の学生の志願資格については、以下のように規定されていた。「日本内地人、朝鮮人、台湾人ハ満20歳マデ、満露人ハ満21歳、蒙人ハ23歳マデ支障ナシ。但シ無妻ノ者ニ限ル。」¹¹⁶宮沢恵理子は、建国大学の生徒募集と入学について詳しく紹介している。「1938年の3年後の1941年には、[中学]5年卒業者は前期2年に編入することになったが、満洲国内の他民族の学生はその後も前期1年に入学した。また1945年には建国大学は前期2年、後期3年の5年制となり、中学5年卒業者は前期2年に、4年卒業者は前期1年に入学し、前期3年生は後期1年に繰り上げとなった」。¹¹⁷

1941年の『建国大学要覧』には「学生出身地別調」という表が示されているが、その表によると、建国大学当時主な学生は日本人(276名)と中国人(254名)であり、次の人数が多かった学生は朝鮮人学生(37名)と台湾人学生(12名)である。

¹¹⁵ 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、風間書房、1998年、101頁。

¹¹⁶ 「満洲建国大学生徒募集公告」、1937年8月10日。

¹¹⁷ 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、風間書房、1998年、181頁。

第二章 建国大学とイデオロギー

第一節、建国大学の創立者たちのイデオロギーと建国大学の建学

建国大学の設立は石原莞爾のアジア大学という構想により始まった。『満洲国史・総論』には次のように記されている。「満洲国は建国以来わずかな期間に目覚ましい発展を遂げたが、民族協和を国是とする理想国家永遠の発展を期するためには、さらにその指導原理を確固たらしめ、かつその指導者たるべき人材を満洲国自体で養成する必要があり、さらには広くアジアの復興に奉獻すべき大学として、亜細亜大学設立の議が、1936 年関東軍により提出された。」¹¹⁸

石原莞爾と満洲国については、膨大な先行研究がある。ここでは主としてマーク・R・ピーティ『「日米対決」と石原莞爾』を主として参考にする。建国大学については、宮沢恵理子の研究を参考にして検討する。石原莞爾の「世界最終戦争」論について、宮沢恵理子は次のように要約している。最初に、日本の権益放棄、内面指導廃止の方針の下に、理想的協和会が設立され、それから理想国家である満洲国の建設に至り、日中、日満親善を求める。次は東亜連盟の結成に進み、しかる後に、準決勝争(対ソ、対英戦争)と最終戦争たる対米戦争に至る。¹¹⁹

石原莞爾自身の著作から見れば、満洲国の建国は、協和会、東亜連盟、または昭和維新と密接な関係がある。1938 年建国大学の建学以前には、石原莞爾は満洲国に対する「内面指導」の方策をまとめ、満洲国の主権を協和会に渡すことを唱えていた。石原莞爾は、満洲国で「アジア復興運動」といわれる東亜連盟構想を実現すると、「アジア民族間の人種的協力の創出であった中略満洲国は満洲に住む各種民族のための『民族の楽土』になるはずであった。」¹²⁰彼自身が持っていたアジア観は、彼の満洲勤務の過程とともに発展してきた。しかしこの石原の構想にもかかわらず、「満洲国指導方針要綱」(1933 年 8 月 8 日)は、両国間の軍事的・経済的に密接不可分な関係を構築すると主張し、「内面指導」の方針を変えなかった。その結果、石原の思想は、関東軍内部の指導思想とかけ離れて異端的な思想となった。¹²¹

¹¹⁸ 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史総論』満蒙同胞援護会、1970 年、592 頁。

¹¹⁹ 宮沢恵理子、『建国大学と民族協和』、1998 年、31 頁。

¹²⁰ マーク・R・ピーティ、『「日米対決」と石原莞爾』、たまいらば、1992 年、117 頁。

¹²¹ 前掲 118 頁。

1937 年 3 月以降の具体的な建国大学建学活動のなかでは、参加者は次のような三つの類型に分かれる。

A. 日本軍部	B. 満洲国政府	C. 学者
関東軍参謀長 東條英機 参謀本部作戦部長 石原莞爾 陸軍省軍務局満洲班班長 片倉衷 関東軍参謀部第四課課員 辻政信	満洲国国務院総務庁長官 星野直樹 満洲国国務院総務庁次長 神吉正一 協和会中央本部総務部長 皆川豊治 総務庁人事処人事処長 源田松三 総務庁人事処人事科長 木田清 総務庁人事処事務官 根本龍太郎(以上日系) 張景惠等(満系)	東京帝国大学教授 寛克彦 東京帝国大学教授 平泉澄 京都帝国大学教授 作田庄一 広島文理科大学教授 西晋一郎

(出典：『建国大学年表』 7-8 頁。)

平泉は有名な「皇国史観論」者である。彼は建国大学の創設について次のように回想している。「大学創設には、誰を中心とするかが問題です。最初は本庄繁大将を総長にするという話が起った。次には牛島(実常)中将、それはかなり進みました。それから一時は、小畑敏四郎中将の名前が出た(中略)今日の話は、明日はひっくりかえる。明日の話も明後日に変える。それはひどいものでした(中略)相談もやめてもらいましょう。相談しても仕方がない(中略)私は辞めようとした。ところが『やめられては困る、是非相談に乗ってくれ』という軍の話です」。¹²²

平泉澄はその他の 3 名の教授すなわち寛克彦、作田庄一、西晋一郎を推薦した。彼はその理由について次のように説明した。「東京帝大、京都帝大(中略)などと同じ学風で

¹²² 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、13 頁。

甘んずるとすれば特に建国大学を創設する必要はない。建国大学をつくる以上、日本の学風とは別個のものでなければならない。従来の日本の大学は、あまりに欧米の学問のなまかじりに過ぎている。それから離れて、アジアはアジア、特に日本独自の思想、学問というものが建てられて、世界の学問、文化に寄与するものとして新しいものが出てこなければならない。その意味で、仏教哲理を研究し、神ながらの道を研究しておられる寛克彦先生。経済学の面で『道』を考えておられる作田庄一先生。倫理学の上で西洋倫理とは違う東洋倫理を求め深遠な道を説かれる西晋一郎先生。この三人の先生を中心に新しい学風を考えたら良いと思ったわけです」。¹²³

平泉とこの3名の学者では、各自の学術的観点は異なっていたものの、建国大学の建学理念と方針についての観点ではほとんど差がなかった。彼らは「道德教育」を原則とし、欧米の法理に基づいた「権勢国家観」に反して、アジアの「道德国家観」を主張した。すなわち作田庄一の観点は以下のように要約される。「『神の道』や『天の道』を始めとする各種の宗旨道や、哲学一般・史学・文学・武学・国家学・実務学科等を収めた。専門学部としての政治学部は、従来の法学部を改めて政治学科目を多く収め、日本の法学部構成と著しく変わったものとなした。ヨーロッパの大学では、ローマ法やゲルマン法やイギリス法等の伝統を承けて法律系統を特に尊重する(中略)しかし日本の大学がそれを真似て法律万能の教え方をなし(中略)西洋人には『法』と聞けば襟を正すだけの遵法精神が養われているが、東洋人はそうでなく、西洋の法律観念に該当するものは寧ろ道德観念であろう。それは西洋の権勢国家観に対する東洋の道德国家観を強く意識せしめることにもなるのである」。¹²⁴建国大学創設に関わった学者たちは、自由主義的な学風にかなりの不満を持っており、アジア特有の学風を満洲の最高学府である建国大学で発展させようとした。

創設にかかわる学者らは、関東軍により招聘されたが、軍人が建国大学の学長に就任することには明白に反対した。石原莞爾と片倉衷は学者たちの主張を支持したが、辻政信は建国大学学長の内定者であった牛島貞夫中将に就任辞退を勧告した。その経過について、三品隆以は次のように回想している。

「牛島(内定)総長辞任の経緯:東京事務所でのことだが、石原さんはよく『兵隊と役人のお古は満洲にはいない』とっておられた。そこで『建国大学にも兵隊のお古

¹²³ 前掲 13-14 頁。

¹²⁴ 前掲 81 頁。

を使うことにはゼッタイ反対。』というのが片倉さん始め、我々の考えだった。なぜいけないのかというと、既成大学の先生を排すると言いながら、軍だけは既成高級軍人を推薦するというのは大義名分に反するというのが特に片倉さんの強い意見でした。退役某将軍が初代副総長ということになり、既に満洲にもいって関東軍司令官、参謀長、政府の要路にもあいさつをし、本人も勇み立って帰ってきたということがわかった。『これは大変』ということで、ちょうど上京していた辻に『将軍を引き下がらせるよう説いてこい』ということになった。さすがの辻も『満洲で挨拶までしてきたのをやめてくださいともいえんのじゃないか』というのを『いや、だめた』ということで、とにかく将軍の自宅に行ってもらった。辻もこれは大変な仕事だと言いながらもようやくみこしをあげた。深夜二時間辻はねばった。はじめは『いやしくも退役ながら自分は軍人である。陸軍省に呼び出され、満洲まで行って関東軍にも挨拶して、よろしく願うとまで言われてきているのに、君たち幕僚、下輩がやめろとは筋が通らぬではないか』と言われて辻も参ったらしい。しかし辻は建国大学の広遠な理想を説明し『これは到底軍人の出るところはない。私たちは事務的にはやっているが、副総長となると閣下には無理だ。』と説得に努め、将軍も不精不精、納得されたらしい。そこで今度は陸軍省や関東軍からいうわけにいかぬので、ご本人が辞退するという形にしてもらって、辻は真夜中になって、汗を拭き拭き帰って来た。『今夜はまったく参った』と、一生に一度のタメイキをもらしたことです。』¹²⁵

1937年7月、東京方面の創設委員は新京に到着した。¹²⁶7月15日から17日の3日間、新京日本軍人会館の大講堂で「建国大学創設委員会」が開催された。委員長東條英機、副委員長星野直樹、東京方面の委員は西晋一郎を除いて全員出席した。満洲方面の委員は、張景恵、羅振玉、袁金鎧、稻葉岩吉、宇田一、辻権作等であった。¹²⁷学校の管轄に関する具体的な件について、寛克彦は神道の観点から、皇帝直轄が必要であると提案したが、星野直樹は政府が管轄しなければならないと主張し、この案に対し反対した。結局、「建国大学令」の第二条では「建国大学ハ國務總理大臣ノ管理ニ属ス」と規定され、¹²⁸政府管轄に決定した。以上のような議論を踏まえた上で、「建国大学創建綱要」

¹²⁵ 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、24頁。

¹²⁶ 前掲40頁。

¹²⁷ 前掲41頁。

¹²⁸ 前掲51頁。

(1937 年 8 月 5 日)¹²⁹、「建国大学令」(1937 年 8 月 5 日)¹³⁰および「満洲国建国大学生徒募集公告」(1937 年 8 月 10 日)¹³¹という三つの文書が作成された。

第二節、建国大学教育者のイデオロギー

建国大学の教育を考察すると、学長は建国大学の教育の責任者として、非常に重要な意味をもつと考えられた。建国大学に対して、1938 年 5 月 2 日の開学から、1942 年 6 月作田庄一副総長の辞任まで四年間は建国大学教育の第一段階と認められる。1942 年 6 月、軍事参議官陸軍中将尾高亀蔵は後任の副総長に就任し、1945 年 8 月建国大学の閉鎖まで厳しい管理政策を行ってきた。その他、教授、塾頭なども建国大学教育の担い手として検討する。

まず、「建国大学令」の第 4 条から見ると、学校では総長は特任であるが、副総長は「特任若は兼任」、教授は「特任若は薦任」である。第 5 条では、「総長ハ学務ヲ綜理シ所属職員ヲ統督シ高等官ノ進退ニ関シテハ之ヲ専行ス」。¹³²第 6 条には、副総長は総長の職務を代理する権力を有すると書かれている。第 14 条によると、建国大学のもとに評議会を置いて、その評議員は教授の中より総長によって指名される。¹³³

建国大学の教育の担い手らのうちには、出自によって学術的主張とイデオロギーが異なっている場合もあった。この点について検討すると、先ず建国大学の教授らの学術的観点の相違から考えてみよう。建国大学の教授陣のうち、前掲のように、京都帝国大学出身の学者は統制経済を主張しており、学生に対しても満洲の建国理念を広く宣教していた。例えば、岡野鑑記は『建国大学研究院月報』で、統制経済について自らの認識を以下のように闡明した。

「満洲計画経済の性格を論ずる前に、計画経済自体の概念規定が先決問題である。計画経済とは、従来の自由主義経済組織に対立する所の或る他の新国民経済組織であることには異論がないが、従来の資本主義の本質たる私有財産制と営利主義と市場経済とを、如何なる限度において許容するかによって著しく異なるが為である。統制経済とは、従来の自由主義的国民経済における営利主義と市場とより発生する諸矛盾を、

¹²⁹ 前掲 52 頁。

¹³⁰ 前掲 51 頁。

¹³¹ 前掲 56 頁。

¹³² 「建国大学令」、第 5 条、1937 年 8 月 5 日。

¹³³ 「建国大学令」、第 14 条、1937 年 8 月 5 日。

国家及社会的各機関に依って、個別的に是正せんとする経済活動を言(う)」¹³⁴。彼によると、満洲国の経済は、全体的計画経済より、部分的計画経済である。従って、満洲国の経済について、岡野は「満洲計画経済の主体は、国家機関及その権限を委任されたる社会的諸機関である。政府の各種の経済行政機関中特に総務庁企画処及企画委員会が、経済参謀本部的中枢機関である(中略)社会各機関としては、多数の特殊会社、商公工会、及他の経済団体としての協会、連合会、連盟組合等々がある。即ち国家と此等の諸機関との法律的統轄関係を点検する(中略)満洲計画経済の目的は(中略)一定の国家目的に規定されているのである。最高の絶対的目的は、王道楽土の道義的模範国家の建設であるが、現階段における直接目的は国防国家の完成である。」¹³⁵

副総長作田庄一は、同時に建国大学研究院院長として研究活動を指導していた。彼の思想に関する学術的研究は経済理論と神道論の二つに集中した。彼の経済思想の集大成である『自然経済と意志経済』(1931年)により、彼は、国家に相当するような国際共同団体の創出を主張し、その「意志」によって、国際経済が統制されることを理想とした。そうでなければ、列強の帝国主義支配による弊害を解決できないと述べる。¹³⁶

建国大学の教育の担い手である教授らも¹³⁷、創設委員会四博士の学術理念および政治的主張と一致するというわけではなかった。例えば、藤田松二¹³⁸は、学校当局の主流的思想とは異なり、座学より農事訓練などの重要性を学生に教えた教授である。建国大学の学生はよく藤田に「工場の労働者は機械に追われてでも仕事をするが、百姓は自分の意志で鋤を奮わねばならない労働だ。手を拱いて畠はそのまま、何も出来てこない。同じ体を使ってもスポーツは遊びだが、百姓は遊びでは出来ない。それでいて経済的に報いられることは甚だしく少ない。君たちにはそれを体験してもらうのだ。都会の喫茶店で煙草をふかしながら、『農村問題は……』などと議論する連中の屁理屈など、何の役にも立たない。自分で百姓をして見なければ駄目だ」などと言われた。

139

¹³⁴ 岡野鑑記「満洲計画経済の性格」、『建国大学研究院月報』、創刊号、2頁、康德7年9月15日。

¹³⁵ 前掲と同じ。

¹³⁶ 宮沢恵理子、『建国大学と民族協和』、1998年、141頁。

¹³⁷ 『満洲年鑑付録——満洲職員録』、1941年、9頁。

¹³⁸ 藤田松二、京都帝国大学卒業、農学士、農事訓練・塾頭、大分県立玖珠農学校教諭・宮城県農林主事・宮城農学寮長。加藤完治の高弟で、宮城農学寮で石原莞爾と知合い、建国大学に赴任と言われる。終戦直後に長春で死亡。

¹³⁹ 三村文男(一期)「建国大学における自由と不自由」、建国大学同窓会(編)『歡喜嶺遥か：建国大学同窓会文集』、1991年、208-209頁。

さらに、藤田より過激な発言をする教職員もいた。昭和維新運動に関わっていた農事訓練助手の北原勝男は、藤田の後輩であり、藤田の紹介で建国大学に赴任した。三村文男は自分の回想録次のように記した。「北原先生は（中略）農業訓練の時間中に『おれたちは反満抗日でないといかん』とか、『協和服を着ているヤツらはみんなぶち殺してしまったらいいんだ。ロシア革命のときには、ネクタイをしめているヤツが殺されたんだよ』などといわれるので、びっくりしたことがある。」¹⁴⁰

先に述べたように、建国大学では、創立者により推薦された教授がかなりいたが、学閥意識の発生は不可避であった。日本人学生の回想にはそれが示されている。「放課後第一塾では東大法学部教授蠟山政道氏の講演があつて、演題は『物心両面よりみたる東亜体制』となっていた」。¹⁴¹彼らは校則違反を承知の上で、週末に蠟山政道の講演を聞きに行った。「形式的な校則違反以上に教官側で問題となったのは、作田副総長が唱えられた『近代の学問の否定』という命題に対して、蠟山氏は『近代の学問』の代表者だったのである中略さらに東大対京大の学閥意識がこれに加わり、他の学生に対する影響も心配されたようである。」¹⁴²

さらに、一部の教授は、多民族からなる建国大学の教室で、自らの学説を教えたが、日本以外の民族の学生にとっては反論すべきイデオロギーとみなされた場合もあった。東洋史の教授丹羽正義¹⁴³は、明治時代の中国史学者である矢野仁一の弟子であり、中国史に対する観点は中国人学生とは非常に異なっていた。彼は、中国史における「朝貢体制」を批判し、それは中国皇帝により中国を「天朝上国」と見なす誤った認識であると述べた。彼によると、中国史の中に記録されたいわゆる「朝貢」の本質は、夷狄らは幣物を中国皇帝に献上し、代わりに朝廷は彼らに絹などを恩賜することである。換言すれば、これは一種の物々交換ないし互惠的貿易関係だと認識できるという。このような言論は、民族的自尊心が強い中国学生には、かなりの感情的抵抗を与えるものであった。¹⁴⁴

¹⁴⁰ 前掲 212 頁。

¹⁴¹ 前掲 209-210 頁。

¹⁴² 前掲 210 頁。

¹⁴³ 丹羽正義、京都帝国大学卒業、文学士、東洋史・中国文化、姫路高校教授、神宮皇學館教授。戦後には学芸大学・岐阜大学教授、愛知淑徳大学講師。

¹⁴⁴ 閻德藩、《偽滿建國大學人物素描》，長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第 49 輯』

1997 年，58 頁内容を参考する。

第三節、建国大学学生の自己認識(中国人学生を主として)

終戦後、一部のかつての建国大学中国人学生は、中国政府に務め、日中関係の正常化過程で活躍した。¹⁴⁵日中国交回復後、中国人学生も建国大学同窓会会報・会誌に寄稿し、日本側同窓と連絡しながら、しばしば建国大学在学中の経験を述べていた。¹⁴⁶一方、戦後中国政府により、1997年に中国長春市政協文史・学習委員会が編纂した『回憶偽滿建国大学』という公式の回想文集が刊行された。そこで、中国人学生は、建国大学教育を受けた卒業生の観点から、自らの建国大学経験を回想している。

その回想文集を分析すると、建国大学で教育を受けた中国人学生は、みな同じく満洲国を「偽滿」と呼び、建国大学を「偽滿建国大学」と呼んだ。その呼び方からはすぐに彼らの政治的立場について了解することができる。まず、于家齐¹⁴⁷など一期生は、建国大学の教育は「失敗した」¹⁴⁸という結論を出した。彼らは、作田副総長の「道義世界」という指導に納得できず、逆にその虚偽性を批判した。彼の回想内容によれば、中国人学生のもとに「読書会」が結成されたのは、中国人学生の民族意識および反日感情を体現したものであった。その後の憲兵隊による反日中国人学生に対する逮捕活動は、事実上は建国大学教育の失敗と「建国大学精神」の破綻を意味していた。¹⁴⁹

五期の劉世澤¹⁵⁰は建国大学の教学内容及び学生生活を回想した。まず建国大学の授業では、日本語と中国語は満洲国の第一語学とみなされ、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語などは第二語学と称された。モンゴル人学生の母国語であるモンゴル語、または朝鮮人学生の母国語である朝鮮語は、授業で開設されていなかった。毎年、ソ連に関心を持つ中国人学生が半数ほどいたが、彼らは自らの関心からロシア語を学んだ。¹⁵¹中国人学生らは、建国大学における授業の科目の中では、「精神教育」に対して非常に強く反発していた。劉によると、森信三教授は講義では学生に「満洲国とは日本の皇

¹⁴⁵ 例えば、建国大学出身者である劉徳有が中国貿易代表団の通訳者として、日中民間貿易協定の締結過程に活躍していた。前掲浜口裕子『満洲国留日学生の日中関係史——満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』、163-166頁。

¹⁴⁶ 建国大学同窓会により刊行された『建国大学会報』、各期会誌、および記念誌『歡喜嶺』などにたまに見つける。

¹⁴⁷ 于家齐、建国大学一期生、吉林大学教授。

¹⁴⁸ 于家齐、『偽滿建国大学及其剖析』、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、5-6頁。

¹⁴⁹ 建国大学学生逮捕事件に対して、中国側は主に「反滿抗日運動」、「12・30事件」と呼ぶが、日本側には「思想検挙事件」などと称す。

¹⁵⁰ 劉世澤、建国大学五期生、遼寧省社会科学院に務め。

¹⁵¹ 劉世澤、『偽滿建国大学概述』、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、28-41頁。

道思想に基づいて創設された国家である」¹⁵²とか、「満洲国の設立は大東亜共栄圏の第一歩」とか、または「日本と満洲国は親子の関係である」と教えた。¹⁵³歴史授業では、建国大学の教授は「満蒙論」を主張し、中国東北地区は満蒙の発祥地であり、中国の一部として認めなかった。これは、中国人学生から見ると、彼らの民族的尊厳を極めて犯すものとだと認識された。

さらに、中国人学生は「八紘一字」と「大和民族優位論」などの理論が入り交じった「民族協和」教育を認めなかった。彼らは、いわゆる「民族協和」の本質は、日本の同化政策に他ならないと認識した。劉によると、建国大学には、他の民族の学生に対する日本人学生の差別が少なくなかった。日本人学生らは、満洲出自の学生、すなわち漢族、モンゴル族、回族を一括して「満系」と呼んだが、公式には「日系」とされた台湾人および朝鮮人に対しては台湾人を「台系」、朝鮮人を「鮮系」と呼んだ。白系露人の場合は、彼らは「露系」と呼ばれた。そのような「系」を民族の後ろに付けて、異なる民族の学生に自分自身の出自を人為的に自己認識させるのは、建国大学の「民族協和」の虚偽性と事実上の民族差別を反映していた。¹⁵⁴

七期¹⁵⁵の谷学謙は、入学した時は1945年1月であった。彼は、1945年初頭の学校生活について次のように回想した。「1945年1月、私は日本人と一緒に入学した。その時は冬休みであったが、何名かの後期の中国人学生と日本人学生が我々を迎えに来た。日本人学生は比較的に慎ましくて、口数が少なかった。谷らは雰囲気盛り上げるために喋ったり笑ったりした。ある日本人学生は『新聞には載らなかったけど、実際には日本の艦隊は全てミッドウェー島に沈没した。本土作戦が迫っているのは、もう秘密ではない』と言った。一同はこれを聞いて、長い間誰も一言もいわなかった」¹⁵⁶。谷は、自分が「民族矛盾の中に居た」と述べている。彼によると、表面的に見れば、建国大学には民族差別はあまりなかった。当時満洲国では、日本人と中国人高級官僚だけが白米を食べられたが、一般的な満洲国庶民には雑穀しか提供していなかった。しかし、

¹⁵² これは劉の言葉。

¹⁵³ 劉世澤、《偽満建国大学概述》、長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』

1997年、28-41頁。

¹⁵⁴ 前掲と同じ。

¹⁵⁵ 建国大学における中国人学生の学期換算方式は、状況によって異なる。谷の場合は、彼は新京第一中学校から入学試験に参加し、合格してから直接に「建国大学前期二年」に入った。

¹⁵⁶ 谷学謙、『生活在民族矛盾之中』、長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』

1997年、268-273頁。

建国大学では、中国人に提供した雑穀と日本人に提供した白米を混ぜて学生に提供した。このような「共食」は、建国大学の当局から見ると「民族協和」の一つの実践であったが、しかし中国人学生はこれに対しそれほど感銘した訳ではなかった。

谷は、侵略戦争は日本軍国主義者が発動したことだと述べる一方で、日本人学生は中国人と同じく戦争の被害者であると書いた。しかも、彼は次のように建国大学で体験した気持ちを述べていた。「我々はそれなりに反抗することができるが、彼らは一刻たりとも反抗的な意志を表せない。中国人学生と日本人学生は表面上互いに『不可侵』であるが、実際には相互に対立していたのは間違いない」¹⁵⁷。

第三章 建国大学における反満抗日運動

第一節、日系高等教育機関における反満抗日運動の展開

日系高等教育機関における反満抗日運動は、建国大学一校のみで発生したことではなかった。『建国大学年表』、『新京工业大学校友紀事』、田中恒次郎『「満洲」に於ける反満抗日運動の研究』などの史料および関連研究によれば、当時東北地区の多くの機関で反満抗日運動が行われた。教育機構について見れば、満洲国における教育機関の中国人学生、日本から帰国した満洲国の元留学生、さらに満洲国における政界、新聞界などの青年知識人らは、「亡国奴」となることを拒否し、反満抗日運動に身を投じた。

建国大学の中国人学生佟均鎧は、反満抗日運動の主要な組織者であり、戦後「赵洪」という変名を使って、自分が参加した反満抗日運動について回想文を書いている。その回想文は、中華書局 1989 年版の日本帝国主義侵華資料集第 8 巻『東北歴次大惨案』および、『回忆伪满建国大学』に収録された。そこで彼は建国大学における反満抗日運動について以下のように記録した。

「1940 年(中略)校内から反満抗日運動が始まった。まず『読書会』を組織し、その後東北人民抗日地下組織東北抗戦機構の指導下、我々は『建国大学幹事会』を組織した。幹事会は、積極的に日本帝国主義に抗する宣伝活動を展開した。17 名の建国大学中国人学生が幹事会に参加した。1941 年冬、日寇は東北青年に対して大きな虐殺と迫害を行った。1942 年 3 月 2 日の午後、授業中にもかかわらず、日本関東軍憲兵司令部特高

¹⁵⁷ 前掲 271 頁。

課の特務らが突然に偽建国大学を包囲し、新田[伸二]の指揮に従って、学校塾務科とともに、柴純然等の13人を逮捕した。彼らは別々に長春関東軍憲兵司令部に送られた。こののち、吉林、海龍両市でも建国大学の学生2人が逮捕された。今回の逮捕行動の3ヶ月前には、建国大学の校内で孫松齡¹⁵⁸という学生を逮捕した。1ヶ月前には、瀋陽建国大学学生である楊増志を逮捕した。1942年3月、建国大学学生と同時に逮捕された者は、長春法政大学の慕長江、張文韜、さらに留日帰国学生であった王宏文と張輔三であった¹⁵⁹。王宏文と張輔三は、国民党系東北抗日地下組織東北抗戦機構の幹部であった。彼らは京都帝国大学と東京農業大学の卒業生であった。¹⁶⁰

以上に述べたように、東北地区の日系大学における反満抗日運動は、国民党系の活動と共産党系（延安系）の活動があり、従って、異なる集団の語りも異なっていた。大部分の中国同窓は回想文のなかで、自分の属した運動は中国共産党が指揮した地下工作の一部であると述べている。彼らはその運動を通じて民族意識を自覚したが、さらに進んでマルクス主義の優位性と中国革命の必然性を確信したと回想文の形で語っている。

もちろん、反満抗日運動には中国国民党系の影響も及んでいた。さらに、戦後に国民党に入党したため、中華人民共和国成立後に政治的に圧迫された元建国大学生もいた。

中国側で出版された他の日系高等教育機関の同窓回想文集でも、その時期の「読書会」と「反満抗日運動」が在学時期の重要な出来事として語られていた。その部分の内容については、第三部で詳細に整理し、考察することとしたいが、ここでは「新京工業大学中国校友記事」のなかで指摘された読書会の歴史的な意義について引用しておく。

「（前略）彼等は友人の心の奥底に潜むものを以前から知っていて、あちらこちらに自発的に読書会を組織し、民族としての気骨の保持と、民族の決意を呼び覚ますため、進歩的な著書を広めて、反満抗日運動を進めていった。読書会は、傀儡政権〔「満洲

¹⁵⁹ 長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』1997年、154-155頁。

¹⁶⁰ 同上。

国」] が統治する東北の暗黒の夜空に、あたかも散りばめられて煌く星々のような存在であった。」¹⁶¹

第二節、学生読書会と反満抗日運動

建国大学における反満抗日運動は、『建国大学年表』（以下『年表』）によると 1940 年 11 月中旬に起きた。日本の建国大学戦後同窓会の私家版史料『年表』、宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、または中国側卒業生回想文集『回憶偽滿建国大学』を参考にして、建国大学の反満抗日運動の経緯を整理しておく。

まず、『回憶偽滿建国大学』に収録した回想文の著者、たとえば高克（《偽滿建国大学反満抗日活動及其發展》）、佟鈞鎧（《我在偽建国大学の抗日斗争》）、田夫（《回忆建国大学的读书活动及其它》）、马镇山（《禁书何处来》）、張凤祥（《“兴中会一读书会”事件纪实》）などは、読書会の参加者・組織者として、自ら経験した反満抗日運動を記述した。

建国大学 2 期生であった佟鈞鎧は、戦後「趙洪」で変名した。彼によれば、1939 年建国大学に入学してから、前期 3 年（1939-1941 年）の学習過程で、彼ら中国人学生は多くの「進歩書籍」¹⁶²を読んできた。その書籍の由来は、一部は建国大学図書館から盗んだものであったが、一部は新京の吉野町（今の長江路）の古本屋で購入したものであった。それ以外に塾頭¹⁶³から借りた本もあった。さらに多くの書籍は東京にある内山書店から郵便で購入したものであった。趙によれば、その本は文庫本であり、携帯に便利であった。そうした書籍は彼の民族意識の覚醒を促した。進歩的な書籍を読みながら、彼は 2 期生であった王用中などと交流し、その過程で民族意識と抗日思想を育んだ。1940 年 4 月のある日、1 期生の柴純然は趙洪と会って、自分が校外地下抗日人員と連絡を取り合ったが、彼らの面談を仲介できると伝えた。「前略その後、5 月中旬のある日曜日、柴純然は建国大学付近の南湖公園に行き、その地下組織の人員と会ったと通知した。紹介を通じて、向こうは張輔三といい、年齢は約 24、25 歳と見える。彼は、我々に関内抗戦の状況および東北地区で地下反満抗日活動を行う重要性を知らせた。我らも

¹⁶¹ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、38 頁。

¹⁶² マルクスやレーニンの著作など、満洲国の『理念』からみてふさわしくないと考えられる書籍。

¹⁶³ 趙洪によれば、山内一男と井辺房夫はたくさんの中国語蔵書を持っていた。

建国大学校内の状況を彼に教え、その後互いにもっと密接な連絡が欲しいと言った。その時は、張輔三はどんな背景である人なのか全然知らず、ただ柴の紹介に従って、その人を信じていた。その後、何回の接触を経て、彼の公式的職業は協和会中央本部青少年部の職員であると認識した。張は実際に、東北地下国民党が指揮した「東北抗戦機構」の新京地域の幹部であった。彼は、新京における高等教育機関で地下抗日運動の発動と宣伝に従事していた」¹⁶⁴。

その後、1940年6月から7月の間、建国大学読書会の成員は頻繁に張輔三の家に行き、建国大学校内の状況を報告した。張は、建国大学学生中の読書会成員に図書借覧と個別談話を通じて抗日思想を宣伝し、組織を拡大することを目指していた。当時、1期と2期の中国人学生は読書会組織の主な働きかけの対象であった。1940年秋、趙洪らは、張輔三の発議に応じて、建国大学校内にその「東北抗戦機構」に属する「建国大学同志会」を設立した。その後、「建国大学同志会」の拡大とともに、1940年末から1941年初には、「建国大学同志会」を「建国大学前期同志会」と「建国大学後期同志会」の二つに分けた。その二つの組織は別々で動いたが、定期的に張輔三と連絡した。その後、一連の組織変動に伴って、前後期の「同志会」は1941年9月頃に解散し、代わりに学生らは「建国大学幹事会」を結成した。その時には、楊増志、柴純然、陳学博が幹事に任ぜられ、楊はその中で総幹事を務めた。幹事会の下には三つのグループを設置した。趙洪の仕事は、3期生の二人の学生と一緒に3期生の中に宣伝活動を行うことであった。¹⁶⁵

1941年10月、建国大学幹事会は秘密刊行物『前哨』を出版する計画を立て、その仕事を趙洪と陳東旭に任せた。『前哨』は1941年10月から11月まで、建国大学幹事会成員の寄稿・取材の形で、1期・2期が出版された。頭初、『前哨』は幹事会成員の間に流通したが、11月建国大学1期生である孫松齡がチチハルで逮捕されたため、幹事会は2期の雑誌を全部焚くと決定した。その後、太平洋戦争の勃発と共に、建国大学当局は中国学生に対する監視活動を強めた。このため建国大学幹事会の活動は停滞した。¹⁶⁶翌1942年の2月上旬、趙洪は柴純然から、楊増志が冬休みを利用して「東北抗戦機構」の「張という奉天の某大学の学生」と会いに奉天に行った時、日本憲兵により

¹⁶⁴ 長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、127-128頁。

¹⁶⁵ 前掲と同じ。

¹⁶⁶ 長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、前掲129-130頁。

逮捕されたことを聴いた。1942 年 3 月 2 日午前、建国大学塾務科の新田伸二¹⁶⁷は、何名の日本憲兵を率いて、中国学生趙洪、王用中、陳東旭、闫凤文、闫樹臣を逮捕した。同日、1 期生の柴純然、李樹中、3 期生の董国良、乔国玉らが逮捕された。他の同窓であった赫崇義、馬維良も海竜県と吉林市で逮捕された。崔万賢と陳学博は一斉逮捕が行われる前すでに関内に逃げたため、逮捕を免れた¹⁶⁸。

趙洪等は新京にある「日本憲兵隊本部」の拘留所に拘留され、1 ヶ月後、新京監獄に移送された。1943 年 4 月、新京高等法院では「12・30」事件のうち、建国大学学生の反満抗日に対して判決を下した。趙洪の回想によると、「楊増志、柴純然は無期懲役の判決であり、趙洪は懲役 15 年、李樹中、陳東旭は懲役 13 年、胡毓崢は懲役 10 年、闫凤文は 8 年、那庚長、闫樹臣、董国良、乔国玉は各懲役 5 年と判決であった。王用中は入獄ののち、先に精神病に罹って、その後も日本人看守による太刀で傷つけられ、刃傷で敗血症に罹って獄中で亡くなった。柴も 1944 年に獄中で病死した。他の人は 1945 年「8・15」の後に出獄した。」¹⁶⁹

『建国大学年表』には、それ以前に起こった 1941 年 11 月 14 日の学生逮捕事件についての記録がある。「十一・十四(金) 反満抗日の政治犯容疑にて、満人系学生十八名、憲兵隊にトラックにて連行される。国民党の方面から誘惑の手が伸び、同族学生の間にも知られないような連絡があつて、ついに反満抗日の陰謀犯として学園から拉し去られた。この件につき作田副総長辞意表明。」¹⁷⁰学生逮捕事件については、『年表』が作田庄一副総長の発言を記している。「満洲の治安当局に政治意識強く、長期に亘る教育眼の足らなかった故と思われる。」¹⁷¹一方三品等は、反満抗日運動の発生は、逆に建国大学の自由な学風を反映した事件であると考えた。そのような運動は建国大学の創設趣旨に良く合ったものと認識した。「昭和 16 年の夏頃だったと記憶するのですが、大本営参謀だった辻が上海に立ち寄った時のこと¹⁷²中略中略。たまたま、その時、私が作田先生からお手紙をいただいて『自分としては相すまない、大学内に不祥事が

¹⁶⁷ 新田伸二：塾頭、陸軍士官学校本科病気退学後、小学校教員を勤める。辻政信と名古屋幼年学校で同期生。辻の推薦で 1939 年建国大学赴任。1949 年シベリアにて病死。(宮沢、資料参考)

¹⁶⁸ 長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第 49 輯』、1997 年、130 頁。

¹⁶⁹ 前掲 131 頁。

¹⁷⁰ 作田庄一の生前の証言。湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、319 頁に引用。

¹⁷¹ 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、320 頁。

¹⁷² 三品の回想によって「夏頃」っていうことは、建国大学反満抗日政治犯逮捕した 11 月より半年前のことと考えられる。

あり、使命達成が困難になった。せつかくの皆さんのご期待に沿うことができなく、すまなく思っている。』という趣旨のことだった。上海の旅館の一室で辻にこのことを話すと辻は『これは国民党組織の事件じゃないか』という。先生のお手紙で私もそう思っているが、私は辻に『大学の学生がそこまで行ったことは大変なことだ、これで建国大学も真物になった。』という、辻は『そうだ、作田先生が責任をとるところか、先生は誇りとされるべきだ、建国大学万歳だ』といいました。『先生に、祝電を打って二人で祝杯をあげよう』ということになった。¹⁷³

学校側の教職員も中国人学生の反満抗日運動をきっかけとして反省を迫られることとなった。森信三¹⁷⁴は回想で次のように述べている。「学生思想事件：突如として満洲系の学生の中に思想事件が勃発して、20 名前後の学生が、突然検察当局によって逮捕監禁せられという事件が勃発したのである。これは、建国大学の創設いらい始めての事件だっただけに、その衝撃も甚大だったわけである。(中略)その根は学外にあり、さらには遠く延安に根ざしていたものであって、彼らのうちの数名は、既に満洲国境を脱して、遠く延安へ脱出していた者もあったわけである。それ故この問題は、ひとり建国大学内部の大事件というだけではなくだったのである。」¹⁷⁵

台湾人学生李水清は、12・30 事件は建国大学の管理問題を反映しているものと捉えた。彼は、次のように述べている。「この事件が発生してから、全校に暗雲が立ち込め、皆が悶々の情に陥り、学生は沈黙に沈んでしまった。(中略)私は同室の学生に向かって言った。『この事件は彼ら個人個人の問題ではなく、我々が共同して負わねばならない問題である。』と。同室の二名の日系学生も私の意見に賛同した。(中略)しかしながら、我々の背後で中日二大民族の交戦は激化し、平和の望みも無い。この状況で民族協和の空談を重ねても如何ともしがたい。」¹⁷⁶李は、立場を変えて考えれば、中国人学生の心中の苦悶がよくできると語っている。「(前略)民族協和は、必ず先ず、民族自覚を自分の中に認識し、他民族と相互の立場を替えて考慮することであり、初めて共通の認識を獲得して、真正な民族協和に到達できるのである。」¹⁷⁷彼によれば、12・30 事件

¹⁷³ 宮沢恵理子、『建国大学と民族協和』、1998 年、

¹⁷⁴ 森信三、1896 年生まれ、京都帝大卒、文学士、塾教育・精神講話・哲学概論、天王寺師範学校教授、西晋一郎の弟子、国民精神文化研究所員。戦後神戸海星女子学院大学教授。宮沢恵理子『建国大学と民族協和』資料引用。

¹⁷⁵ 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、323 頁。

¹⁷⁶ 李水清（高沢謙三訳）『東北八年回顧録』建国大学同窓会、2007 年、36 頁。

¹⁷⁷ 前掲 37 頁。

の影響は次のようであった。「一二三〇事件発生後、(中略)日本の同級生も遭難学生に非常に同情的であり、彼らの苦衷を明瞭に理解していた。一二三〇事件は建国大学創立の理想を押し潰してしまっただが、同窓学生の友誼は返って深まった。」¹⁷⁸

朝鮮人学生である金泳祿は、逮捕事件について次のように回想した。「1941年11月14日、この日は建国大学の決定的な日となった。前期3年生の時だ。学生全員が講堂に集合させられた。やや時が過ぎて、新田塾頭が緊張した顔で入ってきた。1人、2人、と名を呼ばれた者が外に出て行った。訳はわからなかったが、妙な緊迫感があった。長い時間にたくさんの名が呼ばれた(中略)名を呼ばれた学生たちは皆満系だった。王用中もその中に含まれていた。八路軍の組織のメンバーだったとも言うし、国民党だったとも言われた。」¹⁷⁹朝鮮人学生金泳祿は、中国人学生に関して一番印象的であったのは、彼らの沈黙であったと回想している。金によれば、王用中が獄中死したことを聞いた中国人学生は、全員沈黙していたという。金の回想は、朝鮮系の学生の視角から建国大学の中国人学生の性格を描いている。

建国大学における「反満抗日運動」の政治色と政治的性格についても確認しておこう。。反満抗日運動に参加した一部の学生、例えば国民党側の影響を受けた楊増志などは、戦後中国で政治的には非常に冷遇された。一方、趙洪のような学生らは、戦後中国政府のメンバーとなり、日中交流の舞台で活躍することになる。

第三節 反満抗日運動の影響

1、建国大学の管理層の変化

建国大学の管理層では、学生の反満抗日運動およびそれに続く二波の一斉逮捕(12・30, 3・2)の後、極めて大きな人事異動が行われた。なかでも一番大きな変化は、作田庄一副総長の引責辞任であった。阿蘇谷博の回想によれば、多くの学生・職員らは1942年5月31日ごろ、作田の辞職の噂を聞いた。その後1942年6月6日、「重慶派学生検挙事件」¹⁸⁰を理由とする作田の「引責辞職」が発表された。¹⁸¹

¹⁷⁸ 前掲と同じ。

¹⁷⁹ 金泳祿・「蠅螂の夢」、建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、16頁。

¹⁸⁰ 原文のママ。

¹⁸¹ 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、352頁。

内海庫一郎¹⁸²は、作田副総長の辞任の原因について次のように回想している。

「建国大学3期生の機関誌によると中略思想問題で建国大学生が大量検挙された事件が、その直接のきっかけだったという。しかし当時の私は、学内で日ごろから作田先生の悪口をかげで言っていた連中の間にささやかれていた「作田使いこみ」説に傾いていた。薩摩出身の新城某というひどく無軌道な会計係長がいて、乱脈きわまる経理をやっていたのだが、表向き分任出納官吏は作田先生名義になっていたのも、たぶん、金銭のことには疎い先生が、その責任を被らせられる羽目になったのだろうと考えていたからである。」¹⁸³

作田庄一副総長は1942年6月13日に最後の講話を行った。その後、谷口勉と阿蘇谷博の回想によれば、数多くの第1・2期学生は沈黙しながら泣いた。¹⁸⁴ 作田庄一副総長の退官について『建国大学年表』は以下のように学内の教職員の反響を記録している。

「かくしてその任でない私が、教務科長をしている間に、後で考えれば、私などの知らない領域で、徐々に作田先生に対する政治的なものが、動き出していたかと思われるのである。そして（中略）先生のご引退が発表せられることになったのである。学内の教職員は、かねてそうした動きがあるらしい噂は耳にしている、当時の満洲では、何時も何かの噂は行われていたことで、差までにも考えていなかったのであるが、それがついに事実となってみると、全学は愕然として驚き、建学いらい嘗てない悲愁の雲に閉されたのである。それはいわば、慈父に死なれた人々の悲しみともいえるべきものであった。そして今さらのように、先生の人間的な温情と、その深い学殖に対して、敬慕の念を新たにしたのである（中略）そこで私共は、せめて盛大な送別の催しをしたいと考えたのであるが、先生は断乎としてそれを却けられてお訣れの式らしいものもあつたかどうか、定かな記憶もないほどである（中略）作田先生としては、自分は今副総長としての地位は去るが、しかし建国大学の教官としては、引き続き内地から出かけてきて、学生たちに講義はすること故、何もことさらしい決別式だの、花々しい送別の宴などは、して欲しくないとお考えだったようである。私なども最

¹⁸² 内海庫一郎、1912年生まれ、京都帝大卒、経済学士、統計学、京都帝大経済学部副手、1938年建国大学助手。1939年助教授。1940年から国務院総務庁統計処事務官と兼職。戦後北海道大学・武蔵大学教授、宮沢恵理子『建国大学と民族協和』298頁。

¹⁸³ 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、352頁。

¹⁸⁴ 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、358頁。

初のうちは、そうした先生の深いお心を解しかねていたのであるが、しだいにそれが解ってくると共に、なるべく先生のご意志に添うように、考えるようになったのである。」¹⁸⁵

3日後、1942年6月16日に陸軍中将尾高亀蔵が建国大学の副総長に任ぜられた。尾高副総長の就任式訓詞は以下の如くであった。「第一、予は建国大学生なりとの強烈なる自覚を持て。第二、慈愛親切になれ。第三、規律を尚び勇氣と実行力とを養へ」。

186

『建国大学年表』によれば、建国大学の教職員は、この新任副総長に対して次のように述べている。「(真覚正慶¹⁸⁷先生)昭和17年の春は、初代の作田副総長が去ったあとへ、張鼓峰事件の将軍が二代目として押し込んできた。関東軍の秦参謀長が勝手に決めた天下り人事で、軍人専制の満洲でのこと、どうにもならない。正に建国大学の危機であった。就任の訓示を聞いてやっぱり一同顔を見合せた。」¹⁸⁸

「さて、建学の慈父たる作田庄一先生を、心ならずもお送りした後へ赴任したのは、尾高亀蔵という予備の陸軍中将だったのである。この人は、例の張鼓峰事件を引き起こした当の責任者であって、その責めを引いて、現役から去らざるを得なくなったとのである。しかも陸軍部内でも「赤鬼」という異名で通っていて、非常に癪癖が強く、何を仕出かすかしれないというので、この人が膝許の東京にいることを、最も忌み憚った東條英機が、満洲の地へ追っ払おうとしたところが作田先生のご引退が、例の学生の思想事件のために、ご予定よりも半年早められた真因のようである。つまりご本人としては、当然大將まで昇進すると思っていたのが、張鼓峰事件で詰め腹を切らされて、憤懣おく処を知らなかったのも、東條英機が忌避しての人事だったとのことである。」¹⁸⁹

¹⁸⁵ 森信三「作田先生の御退官」湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、360頁。

¹⁸⁶ 「尾高副総長就任式訓詞」湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、359頁。

¹⁸⁷ 真覚正慶、東京帝大卒（1932年）、1943年植村敏夫助教授の後任として満炭から転任、建国大学講師となる。ドイツ語担当。後に助教授となる。戦後千葉大学、城西大学教授。宮沢恵理子『建国大学と民族協和』304頁。

¹⁸⁸ 真覚正慶の回想、湯治万蔵編『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、359頁。

¹⁸⁹ 森信三「作田先生の御退官」湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、360-361頁。

『年表』に収録されたこの二つの段落を見れば、建国大学の教職員は、作田副総長の辞任を明らかに遺憾に感じていた。さらに、建国大学は学者である作田副総長の就任により大学としての存在を認められた経緯があったので、建国大学の教職員は軍人後継者に対して非常に不満を懷いた。森信三は次のようにその気持ちを述べている。

「どうも東條英機という人は、こうした処があつたらしく、例えば山下^{ともゆき}奉文大将が、常に第一線に廻されたのも、その為だと国民の一部は噂し合っていたのである。しかし、そのために非常な迷惑を蒙ったのは、建国大学自体であって、その結果がいかなるものであったかは、私もここにその詳細を記すに忍びないものがある。そしてそれは、ひとり尾高予備陸軍中將のためというよりも、建国大学そのものの名誉のためである。だが、全然書かぬというわけにもゆくまいと思うのは、それでは尾高副総長の在任期間は、完全に空白にする他ないからである。」¹⁹⁰

軍人副総長は建国大学に消極的な影響を及ぼした。

2、中国学生の反日活動と延安への期待

『回憶偽滿建国大学』には、馬鎮山の「対敵闘争の片断」という回想文が掲載されている。そのなかの「1942年以降の読書活動」の部分では、1942年3月2日の逮捕事件は「12・30」運動の一部として認識されていた。その後、1942年8月から、建国大学で再び反日書籍の回覧活動が始められた¹⁹¹。その「第二次読書会」における組織状況と政治傾向は1942年3月2日の逮捕事件前の活動とは異なっていた。「第二次読書会」の組織者は馬鎮山、賁長銘、戴励明であり、三人は読書会活動を続けることを決めた。その過程で、考慮すべき幾つの問題に対しても検討が加えられた。¹⁹²：

「1、まず、今の普遍的な悲観的な気持ちを克服する必要がある。日本は今太平洋戦争の最中であるが、英米と両方の敵となったから、汪精衛が日本に降伏すると悲劇的な最後を迎えるはずだ。2、各期の中堅学生に連絡し、対敵闘争を全校的規模で広げる

¹⁹⁰ 森信三「作田先生の御退官」湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、361頁。

¹⁹¹ 「進歩書籍」とは『回憶偽滿建国大学』の中で中国人同窓生の政治立場によって判断されたことであり、中国が社会主義国家としての政治環境に依拠している。そこで回想録の原文を読めば、満洲国の建国精神とイデオロギーに反する書籍であると判断できる。

¹⁹² 傅昭：《対敵闘争的片断》長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、145-146頁。

必要があるが、第5期の学生に重点を置く。3、必ず個別に連絡する形で行う。先ず同窓に友人として連絡し、民族思想を啓発し、その後彼らに反日書籍を配って、その過程で中心的な学生を発見し、彼らに依頼し活動を広める。4、何の組織も設立せず、組織の名前も作らず、校外との連絡もしないほうがいい(後略)」¹⁹³。

1942年冬休みの前、戴、賁、馬三人は再び会議を開いた。その主要内容は第6期の学生に対する宣伝活動の方法である。会議で検討された主要問題は以下のである。

「1、新入生が入学する前に工作を展開するほうが良い。」彼らは冬休みの時、他の在学学生のネットワークを動員して、入学する生徒との連絡を取り、彼らに学校の状況を紹介する機会に民族精神について啓発的な活動を行った。2、日本人同級生が来る前に、中国人新入生との十分な交流が必要である。その時は各塾の中心となる学生を見つけ、彼らと連絡を取って、その後の活動の展開に役立てる。3、新入生にどのような書籍を回覧するのが適当であるのかを決める。基本的には民族思想を啓発する書籍は良いが、¹⁹⁴信頼できる人には『中国近代史』、『中国通史』、『大衆哲学』などもっといい書籍を回覧する。」¹⁹⁵

1943年第6期の新入生が入学してから、上に述べたように、馬鎮山らが建国大学中国人学生の中に中心的に働きかけるべき学生を選んだ。一方、戴らは続けて第4期、第5期学生の中で活動した。その際、活動方式は形式上には比較的に隠蔽であり、マルクス主義のほかに、読書会の成員らは中国共産党に対する理解をもますます深めた。特に1943年後半、読書会は、毛沢東の『新民主主義論』のパンフレットを手に入れた。その際、『新民主主義論』を読んで中国共産党に対する希望が生じ、延安へ脱出すると決めた者もいた。しかし、当時の建国大学の学生は、共産党方面と連絡する手段をもたなかった。彼等は関内に移って対日闘争を行いたかったが、実際には行けず、そのまま建国大学に在学し、読書の方式で学校当局と闘った。¹⁹⁶

¹⁹³ 1942年8月

¹⁹⁴ その書籍とは中国の左翼作家の小説、ソ連の小説、および日本語へ翻訳された『三民主義』などがある。

¹⁹⁵ 傅昭・《対敵闘争の片断》。長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、147頁。『中国近代史』は李鼎聲著、『中国通史』は呂思勉著、『大衆哲学』は艾思奇著である。

¹⁹⁶ 同上、148頁。

1944年6月、「第二次読書会」の主要組織者である戴励明、賁長銘、马镇山、高世俊などは卒業後学校を離れなければならなかった。彼らは卒業前に、小説か理論書かを問わず、回覧できる反日書籍を全て学校に残した。そして、後継者に様々な具体的内容を引き継いだ。「第二次読書会」に参加した建国大学生は、8月15日以降、「東北青年連盟」を結成し、中国共産党と連絡を取ることができた。1945年10月1日に中国共産党の指導により彼等は「新青年同盟」を結成し、中国革命への道を歩み始めた。¹⁹⁷

一方、1941年に入学した第4期学生は、逮捕事件以降、「読書会」の主力メンバーとなっていた。一部の学生は、積極的に読書活動に参加した後、建国大学から出て重慶ないし延安へと向かった。4期生の丁漢章¹⁹⁸は、回想文でその学生らの思想と経緯を述べている。「中国学生は団結していた。我らは反日書籍の回覧をしながら、中国人上級生との談話もつねに行っていた。反日書籍は我々の反満抗日の熱情を奮い起こし、敵と闘う決心を強めた」¹⁹⁹。

丁漢章は、馬維良、傅昭、胡毓崢らと協議した。さらに彼も、上級生として、5期の学生と話し合った。こうして別々に話し合う形で、中国人学生は建国大学における思想教育を批判し、互いに連絡をとった。これが逮捕事件後の建国大学における中国人学生の反日活動の実状である。²⁰⁰その後、丁の祖父、父、叔父2名の家族4名は、ある阿片館の盗難事件で逮捕された。丁の父はその時体調を壊し、獄死した。丁は次のように自分の悲憤を表現している。「国の恨みをはらさずに父の仇を討たなければならない。復讐の念に燃えた。」²⁰¹

丁によれば、1943年夏には、4期の学生は自発的に「抗日救国団」という秘密組織を結成した。そのなかには、組織班、宣伝班、情報班、破壊班、暗殺班などがあった。組織の総責任者は聂長林であった。「救国団」は、刊行物『拓荒』も出版したが、寄稿文には主に理論研究、戦争に対する考え方、国内外の時局に対する分析などがあったという。当時彼らは『拓荒』を床の隙に隠し、学生用荷物室で秘密集会を行った。日本人学生が入ると、中国人学生はタバコを吸うふりをした。²⁰²

¹⁹⁷ 傅昭・《対敵闘争的片断》。長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、150頁。

¹⁹⁸ 丁漢章、建国大学四期生、退職前大連水産学院教務長として勤めた。

¹⁹⁹ 丁漢章《国难家仇出走客 黎明风雪远归人》、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、203頁。

²⁰⁰ 前掲と同じ。

²⁰¹ 前掲と同じ。

²⁰² 丁漢章《国难家仇出走客 黎明风雪远归人》、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文

他の中国人学生と異なり、丁らは、日本敗戦前、個人的連絡を通じて関内へ脱走した。丁は次のように回想している。「私の中国人同窓趙作藩は法政大学²⁰³で勉強していたが、彼は 1943 年関内に行く前に、彼の同窓である郭燕生を通じて、情報を私に伝えた。私は、関内に行ったら北平の灯心胡同で北大学生である陳人明を探して、その後新郷に行って、趙主任を探して欲しいと伝えた。」²⁰⁴この内容から見れば、北平で学生地下組織が活動していた様子を確認できる。丁によれば、他のルートもあったという。「白振鐸が探したルートは北京大学教授丁福之を経由して冀南解放区へ向かうルートであった」²⁰⁵

丁は重慶で疎開中の東北大学²⁰⁶の経済学部 2 年に編入された。そこで、彼は学生運動に参加した。その際、疎開中の東北大学の学生も「読書会」、「民主青年社」、「東北問題研究社」などを組織した。その組織社の幹部たちは、中国共産党南方局青年組の劉光に直接的指導された。青年組は彼らに共産党系の刊行文献と書籍を郵送し、さらに共産党方面の思想教育も行った。重慶での人生について、丁は次のように回想している。「読書会の学習と討論により、我らは抗日が長期の戦争になることを覚悟した。我らはよく共産党系の『新華日報』や毛沢東の著作を密かに読んで、一緒に時局を分析しながら、校内の重大的な事件について討論した。1945 年春には、我らは李先念が指導していた湖北解放区に行った。私が重慶に着いたら、白振鐸と聂長林は(私を)高崇民に紹介した。高は東北救亡会の総会の責任者であるが、その組織は共産党の指導を受け、東北人向けの政治団体であった。組織の任務は蒋介石の独裁統治に反対し、国民党の積極的な抗日行動を要求することであった。高は私をある印刷工場に派遣して、雑誌『反攻』²⁰⁷の印刷と発行に責任をもたせた」。²⁰⁸

史資料總第 49 輯』、1997 年、204 頁。

²⁰³ 新京法政大学。

²⁰⁴ 丁漢章《国难家仇出走客 黎明风雪远归人》，長春市政協文史和學習委員會『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第 49 輯』、1997 年、206 頁。

²⁰⁵ 前掲と同じ。

²⁰⁶ 1936 年西安事変後、国立東北大学と改称され、1938 年 3 月に四川省三台县に疎開された。

²⁰⁷ その刊行物は東北救亡總會により刊行された。『反攻』では主に東北光復に関する文章を刊行していた。さらに蒋介石の不抵抗政策などに対して批判するエッセイも刊行されていた。

²⁰⁸ 丁漢章《国难家仇出走客 黎明风雪远归人》，長春市政協文史和學習委員會『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第 49 輯』、1997 年、211-212 頁。

第四章 建国大学の崩壊

第一節、作田副総長の辞任——管理層の問題

いわゆる「反満抗日運動」は、客観的には建国大学の価値体系に重大な影響を与えるとともに、満洲国の建国理念が危機をはらんでいることを明らかに示していた。逮捕された建国大学中国人学生との関係が密接であった朝鮮人学生金永祿によれば、満系学生の「反満抗日運動」のために、満洲国の建国理念を体現すべきはずの建国大学としては、「その存立基盤に大きな打撃を受けるものだった」²⁰⁹。それ以前、石原莞爾などによって規定されたのは、「民族協和」の原則に従って満洲における最高学府を創建することであった。つまり「人種、思想、宗教を超越して、世界的な偉人・碩学に至る」²¹⁰という構想であった。「反満抗日」事件の発生とともに、作田副総長の辞任が表明された。

作田庄一副総長の退官は、学校側としては非常に衝撃的なことであった。その時のことを、森信三は次のように述べている。「全学は愕然として驚き、建学以来嘗てない悲愁の雲に閉ざされたのである。」²¹¹これは、作田は建国大学で非常に崇高な地位を占めていたことを示していた。作田の辞任に対して、建国大学の教職員は「慈父の死なれた人々の悲しみともいふべきもの」²¹²だと述べた。作田副総長の後継者である尾高亀蔵は張鼓峰事件で厳しい処分を受けた元予備陸軍中將であり、学者的背景がなかった。知識人が集まる建国大学の中では、作田庄一ほど尊敬と人望を得ることがなかったと考えられる。

真覚正慶は後継者である尾高亀蔵副総長に関し次のように回想している。「張鼓峰事件の将軍が二代目として押し込んできた。関東軍の秦[彦三郎]参謀長が勝手に決めた天下り人事で、軍人専制の満洲でのこと、どうにもならない。」²¹³尾高の就任訓話が終わった後、教職員との初めの面会について、真覚正慶は次のように述べている。「長老として答辞を述べるべく、やおら進み出た竹風先生は、開口一番、声をはげまして言

²⁰⁹ 金泳祿・「蠅螂の夢」、建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、16頁。

²¹⁰ 前掲と同じ。

²¹¹ 森信三「作田先生の御退官」湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、360頁。

²¹² 前掲と同じ。

²¹³ 真覚正慶「作田先生の御退官について」湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、359頁。

った『われわれはいわば四十七士である。志操と団結は固く、いかなる風雪辛酸をも意としない。ただ私かに憂う、大石内蔵助はしっかりしているのかと』そう言ってじつとにらみつけた。将軍はカッと赤くなり、胸の勲章が小さきみにふるえて音を立てた。勝負はあった。」²¹⁴それらの逸話は、建国大学の日系教職員が、軍人出身の尾高亀蔵の副総長就任に対して不満と抗議を示したことを明らかにしている。

中国側の同窓会回想文集には、同様に作田副総長の辞任が学生に与えた衝撃が反映されている。さらに、管理方式など具体的な場合に後継副総長と作田副総長の間に大きな違いがあったことが記述されている。聂長林の回想には次のように記されている。「逮捕事件は、当初学者による学校管理を唱えた初代副総長作田庄一に、非常に強い衝撃を与えたと言えよう。彼は自分の面子にかけて、逮捕された学生のために四方奔走した。(中略)その後、作田副総長は引責辞任しなければならなかった。後継者尾高亀蔵は元陸軍中将であった。作田のような国家主義者でさえともかく理論文献を引用して学生を教化したが、軍人であった尾高はなによりも威圧により服従を強いた」。²¹⁵

『建国大学年表』には尾高副総長の管理方式について直接に指摘する箇所は少なかったが、総力戦の進展に従って建国大学研究院の研究内容にも変化があらわれたことが反映されている。『年表』によれば、1943年4月1日の「康德十年度、年度研究題目決定新部員発令進捗す」という項目では、「戦時期経済国策研究班」と共に「総力戦研究班」の編成が協議されたことが示されている。「総力戦研究班」の班長は尾高院長に任せ、研究題目は「満洲国総力戦体制の確立に関する研究」であった。²¹⁶具体的には、「総力戦研究班」の研究内容について次のように記録されている。「1、国家総力戦論(分担:尾高等)、2、総力戦における軍事体制の研究(分担:尾高等、3、総力戦における政治体制の研究、4、総力戦における経済体制の研究)(後略)」²¹⁷さらに朝鮮人学生に対する教育にも尾高副総長は塾教育担当者との質疑応答にあたって指導意見を提出してい

²¹⁴ 前掲 360 頁。

²¹⁵ 聂長林《対偽満建国大学の回憶》，長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第 49 輯』、1997 年、454-455 頁。

²¹⁶ 「昭和十八年(康德十年)四月一日、康德十年度、年度研究題目決定新部員発令進捗す」、湯治万蔵編、『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、381 頁。

²¹⁷ 前掲 385 頁。

る。²¹⁸『年表』には、さらに、「1943年4月3日、尾高副総長は先頭に立ち、建国大学の学生と共に、東條英機首相の訓示を聞いた」²¹⁹と記録されている。

作田から尾高への交代にも関わらず、中国人学生は依然として秘密の読書活動を行っていた。関内へ脱走する事件も続発した。こうした背景の下、中国人学生と日本人学生の間のも矛盾も激化した。

第二節、建国大学における学生間の軋轢

中国側の回想録は学生間の軋轢が多く記録され、建国大学が唱えた「民族協和」が批判されている。中国人学生聂長林の回想には、日本人学生の「民族的優越感」がはっきり記述されている。

「日本人学生がよく『やつら』という言葉を使って中国人学生を軽視していた。建国大学ではよく『共学共食』を宣伝し、いわゆる『民族協和』精神を讃えていた。しかし雑穀を食べる時、日本人学生は『またコウリャンだなあ』、『またとうもろこしだなあ』と言ってしばしばため息を出した。そのような表情と語気は、中国人学生として非常に屈辱的と思われた」²²⁰。

聂によると、新入学生の替え歌に次のような中国を侮辱する言葉があった。「万里の長城でおしっこをすれば、支那も雨だ、モンゴルも雨だ」²²¹。さらに、聂によれば、他の民族の学生もあまり日本人学生と「民族協和」の話をしなかったという。「他の民族の学生が個人として日本人学生と『協和する』ことはあったが、自分の同胞の中に戻ると『裏切り者』として孤立した」。²²²

聂は、建国大学が「共塾共学」を通じて、「民族協和」の精神に従って学校内の民族友好に努力したことまでは否定していない。しかし、それだけで同窓間の友情を認めることはできないと明らかに主張している。いわゆる「民族協和」は理想的な状態であ

²¹⁸ 「鮮系教育について」、湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、390頁。

²¹⁹ 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、396頁。

²²⁰ 聂長林《対偽満建国大学の回憶》，長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、431頁。

²²¹ 前掲432頁。

²²² 前掲と同じ。

り、学校当局の脳内にしか存在しなかったという。彼によれば、中国人学生と日本人学生の関係は、「同床異夢」で表現することが一番正しいという。²²³

中国人学生が回想録で「民族協和」の虚偽性を批判する一方、日本人学生も建国大学における民族間の矛盾と衝突について記録している。森崎湊の日記を整理・出版した『遺書』からは、日系学生の中国人学生に対する態度を見出すことが出来る。

「満系の不甲斐なさ、生活態度というか、思想というか、落ち着きのなさに日頃腹を立てているおれも、やはりよく思われることは嬉しい。人から好意を持たれると、(好意を持たれたかのようにおれが感ずると)おれは簡単に、極めて単純に嬉しくなってしまう。くそ、満系の奴らは何とだらないのだ。何と自覚がないのか。何という不甲斐なさだ—と夢中になって憤ることはあっても、やはり満系のものから好もしく思われると、実に他愛もなく参ってしまう。我ながら、こればかりは全く不思議に思われる。」²²⁴

さらに森崎も日本人学生と中国人学生が友人になることが難しいという現実について困惑している。「漢民族はなかなか人に心を許さず友となりにくい、一度『朋友』となれば、その信愛の情は甚だあついという。が、なかなかうちとけない中略満系のものと何心なくちらりと視線が合うような時、普段は好意を持ってくれているように自分が思っている相手でも、何か鋭い、決して油断していない、うかつなことはせんぞ、と言ったようなものがその白い眼に感ぜられる中略日系は悪く言えば、甘い。甘いけれどもよく言えば、満系より一本気で無邪気で気持ちも広いような気がする。」²²⁵森崎の言う中国人と日本人の性格上の差異についていえば、むしろ、建国大学の特殊な学制によって、中国人学生が日本人学生より1年早く予備科で入学するという事情も考える必要がある。そして、同期の中でも、中国人の学生は日本人学生より年長であり、成熟しているという判断も可能である。

そのため、作田副学長時代には「民族協和」の実践に関し一定程度の自由な学風があったにもかかわらず、中国人学生と日本人学生とは言語、文化、さらに性格上の差異が大きく、友人になるのが難しかったとも考えられる。中国人学生の沈黙は、性格上の原

²²³ 前掲 461 頁。

²²⁴ 森崎湊・「昭和 17 年六月三日」、『遺書』、図書出版社、東京、1972 年、53 頁。

²²⁵ 上と同じ、「昭和 17 年六月九日」、54 頁。

困であったか、読書会など地下活動のためだったのか、状況により理由は異なると思われるが、そのような環境で民族対立は不可避であると考えられた。

建国大学の日系学生には、台湾または朝鮮から来た学生も含まれていた。彼らは自分の本名を使えず、必ず日本名を作らされた。中国人同窓王也平の回想の中には、彼と「共塾」した台湾籍の日系学生である大村重治が語った時の逸話がある。「大村重治はよく頸には『護身仏』を佩いていた。それを見て彼の中国語名前『涂南山』を知った。真顔で、絶対他の人には言わないと誓う時、彼は意外に私に『我々は中国人だ。日本人は我らを統治している人間だ。』さらに話すと、『大村重治』の意味を私に教えてくれた。つまり台湾の光復を願い祖国の山河を改めて治める意味で、『重治』と変名した。」²²⁶。台湾人学生は中国人学生とある程度の民族アイデンティティを共有していたが、日本人が行った改名、ないし日本人の植民地統治に対して不満を持っていたことが分かる。

韓国側の同窓会回想録文集には、朝鮮人学生が建国大学で感じる民族的矛盾も述べられていた。李鐘恒は、彼の回想文でまず建国大学の教職員側から遭った民族差別を明らかにした。稲葉岩吉²²⁷博士は朝鮮で長年生活した学者であり、建国大学朝鮮史編集会の囑託であるが、常に朝鮮民族に対して低い評価を出していた。「稲葉岩吉博士から満洲史の講義を聴いた。その内容が何だったのか、記憶に残っている物は何もない。ただ、彼が授業のたびに示した韓国人に対する冷笑と蔑視だけは今も生々しく記憶に残っている（中略）稲葉博士の説によると、韓民族が白衣を尊ぶようになったのは、良い染料が韓国になかったためだそう。」²²⁸

李は稲葉岩吉博士の評価に民族感情を傷めたが、一方金泳禄(2期)は、建国大学における民族協和の実践とその過程で現れた問題と矛盾を描いた。回想文「螻蛄の夢」で金泳禄は、まず共塾した何名の中国人学生を紹介した。「牛君は動物の姓を持つ満洲族の子孫だ。しっかりした清朝の家柄の末裔だと自慢している。爪が硬いから長く伸ばしても折れないのがその証拠だそう。戴君は静かで寡黙な、霧の風呂敷に思想を包んだような、何か雰囲気のある親友だ。名筆で、満展にも入選するぐらいだ。王[用中]

²²⁶ 王也平・《衝破牢籠任鳥飛》長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、79頁。

²²⁷ 1867年生まれ、外国語学校支那語科、文学博士、京都学派の支那学の指導者。1915年から陸軍参謀本部と陸軍大学校で講義。1922-1937年朝鮮総督府修史官。1938年に建国大学教授となる。

²²⁸ 李鐘恒・「伊通河の水は今も流れているだろう」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、9頁。

君は、三角のものさしを立たせておいたような顔つきで、満洲の庶民の中の庶民という感じた。」²²⁹

金泳祿は在学中、何度も塾の座談会に参加した。彼は朝鮮人学生の代表として、常に日本人学生や先生と口論した。「民族の違いは若さによって比較的簡単に克服していた。言語と習慣について若干不便だったが、大きな壁にはならなかった。中略たまに塾別の茶話会が開かれた。学校が茶菓を提供し、思うままに討論してみろというのだ。民族協和の問題が中心の話題になることが多かった中略7塾で朝鮮での内鮮一体政策が取り上げられた、満洲国の民族協和もそれを見習うべきだという話も出た。私はそれに反対の発言をした。内鮮一体は私には最悪の植民政策に思えた。それは朝鮮民族の抹殺の政策だったからだ。」²³⁰金のような朝鮮人学生には、「民族協和」の問題で、特に座談会で「内鮮一体」政策を討論する価値は理解出来なかった。朝鮮人学生としては、「内鮮一体」は「民族協和」の意味から大きく離れ、「朝鮮民族の抹殺の政策」であるというのが常識であった。さらに、彼は次のような自分の態度を明らかに示した。「日本語の常用の強要、従って朝鮮語の使用禁止、朝鮮の歴史教育の禁止、神社参拝、東方遥拝、日本国歌の奉唱、勅語奉読などの強要、修養同士会事件など民族運動の弾圧、民族差別と経済的搾取があったのに、新天地に王道楽土を建設する基本だという民族協和がその政策を見習わなければならないということなどあり得ない。」²³¹

従って、植民地政策を嫌悪した金と、基本的には日系学生に対して反感を持つ中国人学生とは、精神的には近い関係にあった。金は「12・30」事件以前、中国人学生との間に発生した一つの出来事を語っている。「その一つは満系学生、特に意識派が私を他の者とは違うと思うようになったこと。特にその中の三名とは塾の自習室で私の机を囲んでいたこともあって、親密の度が加速した中略(ある日)私を中心として長い雑談をしている時、戴君が急に話題を変えた。「泳祿よ、相談したいことがあるんだが後略?」「何?」(中略)「僕らが、何か集まりを持とうとする時、学校当局に知らせるのがいいのか知らせないほうがいいか、お前の意見を聞きたいんだ。」²³²

²²⁹ 金泳祿・「螳螂の夢」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、12頁。

²³⁰ 金泳祿・「螳螂の夢」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、15頁。

²³¹ 前掲と同じ

²³² 前掲16頁。

金によれば、反満抗日運動は中国人学生にとって当然のことだと思われていた。「満系の学生たちにとっては当然の事だった。建国大学生に建国大学での教育の効果があ
り、成果があったとすれば、この事件がまさにそれであって、これが満系の学生の思想
を代表していると考えていいだろう。」²³³

第三節、回想文集に記録された建国大学の崩壊

1、日本人同窓回想文の中に記録された建国大学の崩壊。

日本人学生と中国人学生では、建国大学崩壊前後の記憶が非常に異なっている。ま
ず、1945年8月8日から8月20日前後の出来事について、二つ集団の経験と語りは別
れている。日系学生・教職員の主な回想内容はソ連軍が行った空襲および航空警報で
あり、学校でトレンチを掘った戦闘活動などである。一方、中国人学生は空襲が発生す
ると、「壮行式」の形で、新京周辺にある公主嶺に送られた。戦後の回想録文集によれ
ば、多くの者は、当時学内で行った「壮行式」は、実際には中国人学生向けの送別会で
あり閉校の儀式であると考えた。²³⁴

『建国大学年表』では、建国大学の崩壊に関する記録は、1945年8月8日のソ連
の対日宣戦後、翌日から行われた全面侵攻から始まっている。『年表』では、次のように
記されている。「午前零時以降、ソ連軍全面侵攻。わが国との不可侵条約破棄。対日宣戦
布告。午前1時ころ、新京に敵機来襲。午前3時ころ、関東軍作戦命令発令。午前6時こ
ろまでの間に、全面開戦に関する関東軍作戦命令発令。」²³⁵それと共に「満鮮国境警備
要綱」が廃棄され、「戦時防衛規定」および「満洲国防衛法」が発動された。関東軍司令部
は、南嶺の地下戦闘司令部に移動したが、大本営からは対ソ作戦準備が発令されてい
る。²³⁶

多くの日本人学生および教職員は、その二日間におけるソ連軍の猛烈な新京空襲に
ついて述べている。例えば、「爆裂音地軸を揺るがし、火柱が上がる。爆音不気味に響き

²³³ 前掲と同じ。

²³⁴ 西元宗助、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、

²³⁵ 山田昌治「塾生日誌」（昭和20年8月8日、8月9日）、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓
会建国大学史編纂委員会、1981年、531頁。

²³⁶ 同上。

わたる（中略）午前1時過ぎ解除。」²³⁷、「夜空に響きわたるとともに、にぶい大地をうがっ様な音がする。空爆だ（中略）探照灯の光が数本見えるが、飛行機をとらえることができない。夜が明ける。」²³⁸「サイレンの音で目が覚めた。空襲警報である。塾の前のドロ柳の並木の下の壕に渡満後初めての退避。鈍い飛行機の爆音が響き、その方向で閃光が見え、しばらくしてからズシンズシンと爆発音が聞こえた。空襲である。」²³⁹「ソ連軍が満洲領内に侵入を開始した。新京の街は騒然となり、大車に荷物を満載して南に下る者。取るものもとらずあえず身につけて新京駅に向かう者。大同大街は人々の列が行き交い、満人街の方向では黒煙が吹き上る」²⁴⁰、「（前略）それまで、平穏を保っていた建国大学の生活も、ソ連の参戦により一転し、決定的な瞬間を迎えた。」²⁴¹などの語りがある。新京は厳しい空襲に遭ったが、日本人学生は当然それをソ連の「満洲領内侵入」と考えた。学校で留守番をしていた7期、8期の日本人学生にとって、学校を守るのは当たり前のことであった。

日系の回想文集には作戦準備に関する記述もかなり豊富である。「深夜にたたきおこされたのは、確か八月八日であったろう、本館に駆けつけると、渡されたのが召集令状であった。通称赤紙と言われていたが、受け取って令状は白い紙であり、名前も書いてなければ、発行者の印刷も押してないものであった。翌朝先をとがらせた木銃を持って、新京市内へ向かった（中略）われわれ『陸軍仮二等兵』が配置されたのは、郊外の競馬場であった。ここに知壺を掘って、ソ連戦車群を阻止することになっていた。」²⁴²「ソ連軍の満洲侵入で私の部隊（鶴岡七二八独歩隊）に非常呼集がかかり、兵站地方正に向け出発。」²⁴³

日系学生らは主にトレンチを掘る作業を行っていた。それは『年表』に反映されている。「ソ連軍の新興爆撃に始まった日ソ開戦で急遽召集を受けた私達は、緑園の競馬

²³⁷ 山田昌治、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、531頁。

²³⁸ 藤井久治、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、531頁。

²³⁹ 館山伉二の回想、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、532頁。

²⁴⁰ 片桐松薫の回想、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、532頁。

²⁴¹ 長野広太郎の回想、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、532頁。

²⁴² 川西平信、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、531—532頁。

²⁴³ 加納憲、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、532頁。

場で対戦車壕を掘っていた（後略）。」²⁴⁴「塾の前のドロ柳の並木の下の壕に渡満後初めての退避。」²⁴⁵さらに一部の学生は、8月10日関東軍の対ソ連全面作戦命令の下達²⁴⁶ののち、より積極的に作戦に身を投じた。「九日、十日の大本営命令で、もっとも顕著なのは“朝鮮保衛”の任務である（中略）この命令によって、皇土朝鮮の保衛が最大任務として、新たに付与されたのである。これを換言すれば、日本帝国全般の戦況上、朝鮮は最後の一線として絶対的に保衛を要するが、満洲全土は前進陣地として、やむを得ないときは、これを放棄して可なりとするにあった。」²⁴⁷従って、朝鮮に対する保衛任務は、戦争を体験した日系学生の一つの重大な経験として記憶されていた。草地以外の他の学生もそれについて語っている。「ソ連参戦に北朝鮮雄基で遭難する。」²⁴⁸

その他、安倍三郎の回想「大彦族の研究」は、尾高亀蔵副総長の1945年8月11日の特別重大発言について記している。そこでは、教職員の家族を朝鮮へ移動しようという内容も含まれていた。「（前略）2、関東軍司令部並に満洲国政府の通化転移；3、家族特に応召職員家族の通化又は朝鮮への退避」²⁴⁹。そして、同じ場所で建国大学の教職員に対して以下のように命令した。「1、建国大学教職員は尾高副総長統率の下に、ソ連軍の進撃を阻止する。ただし、不同意の教職員の行動は自由とする。2、午後3時、本館において最後の教職員会議を開催する。3、日系以外の学生は四平街兵器廠（公主嶺の軍需工場の誤り）に勤労奉仕隊として参加する。4、日系学生は、大学においてソ連軍迎撃の体制に入る」²⁵⁰。一部の日系学生はソ連軍の侵攻を受け、兵士として入隊した。一部の教職員は尾高副総長の指揮によって戦ったが、参加するのは義務的ではなかった。中国人学生の一部は工場で勤労奉仕を行った。そのことは日本人学生の回想文に記録されていたが、中国側の回想でも証明されている。

²⁴⁴ 片桐松薫、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、532頁。

²⁴⁵ 館山伉二、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、532頁。

²⁴⁶ 「関東軍司令官は、主作戦を対ソ作戦に指向し、来攻する敵を随所に撃破して、朝鮮を保衛すべし。」『建国大学年表』532頁参照。

²⁴⁷ 草地貞吾、「関東軍作戦参謀の証言」、「昭和20年八・八（水）、八・九（木）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、532-533頁により引用。

²⁴⁸ 浅岡高義、「昭和20年八・十（金）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、533頁。

²⁴⁹ 安倍三郎の回想、「昭和20年八・一一（土）」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、533頁。

²⁵⁰ 前掲534頁。

日系学生と教職員は、ソ連の空襲と建国大学の崩壊に直面し、感情と態度を変化させた。「今や怒涛のごとく押し寄せてくるであろうソ連軍の重タンク隊を前にして、われらは全く徒手空拳であった(中略)肉弾といっても、まさかビール瓶で重タンクにぶつかるわけにはいかない。ただ我らにあるのは、止むに止まれぬ大和魂だけ。」²⁵¹藪敏は当時の学内状況を語っている。「学内は十六、七歳の者及び教職員とその家族だけであった。(中略)私は浴場で身体を洗い水を浴びた。肌着を替え、真新しいさらし木綿を腹に巻いた。そして父母に遺書を書いた。『国体護持の御盾と散ります』という一行である。」²⁵²「(前略)その時私は死への恐怖をほとんど感じなかった。国家のために死ぬのだという精神の緊張が、死への恐怖を圧倒したのかもしれない。恐怖を感じなかっただけではなく、私には一種の甘美な陶醉があった。死の世界は恐れ憎むべき対象ではなく、私の靈魂が安まり鎮まるところの安楽の世界ではないのか。私が戦死したら、私の靈魂は遠く日本に還り、父母の周辺に落ち着くのかかもしれないと空想した。この空想は、その時の私には真実のように思われた。だから、私は恐ろしいことも悲しいこともなかった。」²⁵³

2、中国人同窓回想文の中に記録された建国大学の崩壊。

中国人同窓の建国大学の崩壊に対する語りは、日本人同窓の回想文における記録と大きく異なっていた。多くの中国人学生が記録したのは、「壮行式」が終わって公主嶺に送られた記憶、およびその沿道での経験と民族解放の喜びであった。

建国大学4期生の劉成仁²⁵⁴は、日本敗戦前の状態を回想している。日本敗戦前、彼は他の中国人4、5期生とともに「勤労奉仕」として公主嶺のある飛行機製造工場に送られた。学校側は、以前と異なって、労働時間について何も言わなかった。彼らはその時、昌図や開原²⁵⁵の国民高等学校の卒業班の学生と一緒に勤労奉仕を行っていた。

8.15の前後について、彼は次のように回想している。「8月9日朝7時ごろ、公主嶺に行って視察した尾高亀蔵副総長は我らと一緒にラジオ放送を聞いた。日ソ開戦の報を

²⁵¹ 西元宗助、「昭和20年八・一二(日)」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、537-538頁。

²⁵² 藪敏也、「昭和20年八・一二(日)」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、538頁。

²⁵³ 前掲と同じ。

²⁵⁴ 劉成仁、建国大学四期生であり、退職前に遼寧師範大学党委副書記として勤めた。

²⁵⁵ 両方中国吉林省の地名

聞いて、彼は自分の気持ちを抑えられなかった。(中略)突然に立って、『もう終わった!』と嘆いて、すぐに新京に戻った。(中略)その日、アメリカが長崎で第二の原子爆弾を投下したというニュースが流れた。我らはとても喜んだが、日本人兵士と労働者の表情は非常に悲痛であり、ある人はこっそり泣いていた。工事を監督する日本人も我らの作業場にあまり来なくなった」²⁵⁶。劉は何名かの中国人学生と集まって、時局について討論した。ある人はすぐに故郷に戻ると主張した。作業と労働はまったくしなかった。劉の回想によれば、8月11日から8月13日の空襲を経た後、8月14日夜8時ごろ、全員歩いて学校に戻ると塾頭が号令した。人数を数えると、数名の中国人同窓がいなくなっていた。劉と一緒に学校に戻ろうという日本人塾頭の要求には応じなかった。塾頭は公主嶺の作業現場で建国大学の解散を宣言した。中国人学生は現場にそのまま留まったが、日本人学生と塾頭はその後一緒に学校に向かった。²⁵⁷劉の回想を読めば、建国大学学生が長い間校外で勤労奉仕などの肉体労働を強いられていたことが分かる。そのような総動員は建国大学一校ではなく、満洲国の他の高等教育機関でも行われていた。

薛文(7期)²⁵⁸は回想文で、劉成仁の記憶を裏付けている。薛によれば、1945年、第3期の学生が卒業した後、8月には4期から6期までの学生が公主嶺に派遣され、飛行機工場で勤労奉仕を強いられた。薛は学校で留守した7、8期の中の上級生として、「総務」に任命され、もう一人の学生と共に当番をさせられた。8月13日の昼食後、学生の安全を確保するとの理由で、尾高亀蔵副総長が学校にいる学生全員に対し公主嶺への移動を命令した。(中略)日本人学生はその時いなかったが、白系ロシア人学生はソ連の宣戦のため監守された。そして我ら160名の学生は6個の小隊に編成された」²⁵⁹。薛文は総隊長に任ぜられた。8月14日の正午、彼らは公主嶺に向かう陶家屯で、上級生の劉成任らが新京へ向かったという知らせを聞いた。薛らが公主嶺に到着した時、飛行機製造工場には誰もいなかった。薛はその時の光景を次のように記述している。

「部屋の中は電灯が消えて暗闇となった。(中略)台所に行って見ると、鍋には米飯がそのまま残されていたが、もう一つの鍋にはできたての料理があった。明らかに彼らの

²⁵⁶ 劉成仁、『黎明前的抗爭』，長春市政協文史和學習委員會『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』，1997年、64頁。

²⁵⁷ 前掲65—66頁。

²⁵⁸ 薛文、建国大学7期生であり、退職前に遼寧省法庫県教師学校に勤めた。

²⁵⁹ 薛文、『記八・一五前後の日日夜夜』，長春市政協文史和學習委員會『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』，1997年、68頁。

食べ残したものであった。部屋の中は乱雑で、大きな角煮はかまの上に落ちて散らばっていた。彼らが慌ただしく出発したのは明らかであった」²⁶⁰。薛文の回想によれば、その時公主嶺飛行機製造工場は混乱していたが、日本人塾頭は学校に戻るよう命令した。中国人学生はその目的がトレンチを掘るためであると判断し、意欲を失った。そして、多くの中国人学生は現場で脱走した。

彼らを監護した者は、後期の塾頭である佐藤久吉助教授であった。彼は逃げた学生が多いことに対して特に怒りを発することもなかった。薛と他の中国人学生も脱走しなかった。薛はその理由を次のように述べている。「夜には多くの人が脱走したことを知ったが、特別の会議もなく秘密連絡もなかったのもので、私はそのまま待機することにした。私は総隊長として責任を持ち、最後まで留まると決心していた。私は一人で無勢であったが、一緒にいた人たちは、そのことを知って、自発的に私と一緒に留まり、私を助けてくれた」²⁶¹。薛文らは、佐藤久吉助教授及び柔道部の中島三郎助教授が武器を所持していないことを承知しており、脅威を感じていなかった。そして薛文らは、監督教員らに現地解散の要求を提出した。薛は次のように回想している。「私は現地解散という要求を提出した。(中略)私は話を続けて『新京に戻るという方針は、新京を出発した時の尾高副総長の講話の精神とは異なる。尾高副総長は、この戦争は私たち中国人とは関係がないと述べた。なぜ今さら私たちを新京に戻すのか。新京は私たちにとっても安全ではないと考える。家に帰らせて欲しい。』(中略)佐藤は若干躊躇したものの、最後には私たちの要求に同意した」²⁶²。薛の回想によれば、劉房子鎮南頭のある小学校の空き教室の中で、佐藤助教授は家に戻りたい学生全員に承認書を書いて印鑑を押し、さらに交通費を支給した。²⁶³

薛文の回想が明らかにしたのは、戦争の最終局面では、建国大学は正常の教育活動を行えなかったことである。学生は年級により別々に工場で勤労奉仕を強いられ、戦争に巻き込まれた。新京が空襲に遭った後、建国大学当局の指揮と指導は混乱し、統一的な撤退や留守の命令はなかった。上級生は公主嶺から学校へ撤退させられた。下級生は同時期に二人の教職員の指揮の下に公主嶺へ移動させられたが、上級生の学校へ

²⁶⁰ 前掲 68-69 頁。

²⁶¹ 薛文：『記八・一五前後の日日夜夜』、長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第 49 輯』、1997 年、70 頁。

²⁶² 薛文：『記八・一五前後の日日夜夜』、長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第 49 輯』、1997 年、70 頁。

²⁶³ 前掲 70-72 頁。

の撤退現場を見て、臨時的に学校へ戻ることを決定した。それらはある程度建国大学の崩壊以前の混乱した状況を反映していた。直接に戦争に参加してなかった中国人学生の脱走は不可避であると考えられる。そのゆえ、建国大学の閉校儀式に中国人学生がほぼいなかったのは自然であるといえよう。

その以外の回想文にも、建国大学崩壊に関する記録が多く見られる。紙面の都合で贅言しないが、中国人学生の回想文の題目と、彼等の主観的色彩が反映されるキーワードだけをまとめておこう。宋紹英²⁶⁴は回想文「前夜大逃亡」の中で次のように書いている。「8月15日の正午に(中略)日本の無条件降伏というニュースを聞いた。(中略)我が愛国青年は、喜びと興奮に満ちた気持ちを言葉では説明できないほどであった。(中略)8月14日の公主嶺の夜は、平凡な夜ではなく、壮観な大逃亡の夜であった」²⁶⁵。王也平²⁶⁶は回想文『冲破牢笼任鸟飞』の中で、8月12日(あるいは13日)午後、公主嶺に撤退した時の様子について、次のように述べている。「足取りは荒々しくて、軍事訓練の姿とは見えなかった。速度もあまり速くなかった。今後、行き先はどのようなのか。恐らく全員が歩きながら考えていた問題である」²⁶⁷。その後、彼らの隊列は、『大路歌』、『滿江紅』、『開路先鋒』など以前は公式に禁止されていた抗日歌曲を大声で歌い始めた。²⁶⁸

3、 朝鮮人回想文献の中に記録された建国大学の崩壊

日本人同窓生藤井久治は1945年8月11日のことについて、次のように回想している。「鮮系学生では済州島出身のY²⁶⁹一名が加わったが、他の鮮系学生の参加しないのを見て、いつのまにか姿を消してしまった。」²⁷⁰その他、在韓同窓会から刊行された

²⁶⁴ 宋紹英、建国大学八期生である。東北師範大学教授であり、東北師範大学日本研究所所長として勤めた。

²⁶⁵ 宋紹英・《前夜大逃亡》、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、75-76頁。

²⁶⁶ 王也平、原名は王振淮であり、建国大学八期生である。武昌中南民族学院教授として勤めた。中国農工民主党湖北省委員会常委、常務副秘書長に任ずる。

²⁶⁷ 王也平・《衝破牢籠任鳥飛》長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學—長春文史資料總第49輯』、1997年、82頁。

²⁶⁸ 前掲と同じ。

²⁶⁹ 名前は詳細不明。

²⁷⁰ 藤田久治、「昭和20年八・十一(土)」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、535頁。

建国大学朝鮮人学生の回想文集の中には、日本敗戦前後の各自の思想経緯に関する回想文がある。

まず、彼ら朝鮮人学生の戦争末期における苦境および出陣強要に関して、以下のような回想が見られる。「戦争末期の極度の食糧難と勤労働員に苦勞していた。防空訓練と徴用・徴兵が強制されて、供出も食糧から真鉄製の食器やアルミにまで拡大され（中略）広島と長崎に原子爆弾が投下され、ソ連軍が極東戦に参加してから、まもなく日本の無条件降伏で8・15の解放を迎えた。祖国の光復の喜びと抗日闘争に直接参加できなかったくやしさが交錯した。」²⁷¹彼の語りには、日本敗戦に対する喜びが明白に表現されている。

さらに、1945年の前期、日本人学生とともに、朝鮮人学生も勤勞奉仕活動への参加を強いられた。そのような武器生産活動の現場で、崔興喆という朝鮮人学生はいわゆる満洲国の最高学府のエリートとしての身分に対して疑念を懷いた。「1945年の5月頃、奉天兵器廠へ勤労働員に行った（中略）兵器廠の広い構内には赤いレンガの建物が立ち並んでいて、片方の建物は何ヶ月前の爆撃で壁だけが寂しく残っていて、戦争というものを実感させてくれた。私たちに任された仕事は手榴弾の本体になる鋳物（中略）空襲警戒警報のサイレンが鳴ったときのことだ。サイレンが鳴ると足の早い者は労働者たちとひとかたまりになって前へ前へと走っていった。出口に行くと門は閉まっていて、彼らは数百名の労働者とおしあいへしあいしていた。幸いに爆撃はなく、我々は作業場に戻った。私は皆が冷静になるのを待ってから、く将来、民族の指導者になると自負しながら最高学府で学んでいる我等が労働者たちと一緒におしあいへしあいしていいだろうか?>と怒った。すると、後ろから魏贊濤が、く皆の前で面駁するとはなんだ?>とどなった。人は災害や危機に直面した時に本音を見せるという。満洲社会では珍しく最高教育を受けている我等が運動靴などで顔を赤め、空襲警戒警報ならぬ警戒警報で我先にと走り回る、理性を超えた利己的本性を改めて考えた。」²⁷²朴とは異なって、崔は日本人に対してそのような厳しい民族感情を持っていなかった。彼は逆に自分を満洲国建国大学の人材として認識した。しかしそのような理想を抱いたまま、勤勞奉仕の武器生産の現実には、矛盾した認識が生まれた。

²⁷¹ 朴熙昇・「建国大学生生活の回想」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、68頁。

²⁷² 崔興喆・「建国大学の生活を考える」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、75-76頁。

日本敗戦前後の状況に関して、崔は次のように回想している。「8月10日頃、長春にいた叔父から意外な電報をもらった。彼は各官公署で突然機密文書を焼却しだしたのを見て、日本の降伏が近づいたと直感して電報を打ったのだ。長春に戻った私は、数百名の日本人婦女子たちが子供を負ったり荷物を持ったり背負ったりして、老いた男性たちに引率されて最寄りの駅へ席立てられているみすばらしい行列をたびたび目にした。それまで威厳と虚勢をはった日本人だけを見てきた私にはとても大きい衝撃だったし、その人たちに敗戦がもたらす悲惨と痛みが、長い間、私の頭を離れなかった（中略）8月15日の正午、日本の天皇の重大放送を耳にした。録音状態が悪くて聞き難かったが、明らかに降伏するという内容だった。大学に行ってみようとしたが、外は騒がしく中国人たちはこん棒とハンマーを振り回していて、銃の音がうるさかった。」²⁷³ 彼はその衝撃的な場面を体験し、建国大学学生としての人生が終わったという幻滅感も感じていた。

安仁建の回想は、異なる出自の学生の表現を記録している。「8・15前後は本当に緊迫感があった。8月9日にソ連の宣戦布告があった後、塾内もざわざわと騒がしくなった。ソ連軍は宣戦布告と同時に破竹の勢いで南進しているから、間もなく新京にも入城するだろうという。（中略）学校当局も前期の全学生を集めて、〈私たちは最大限、学生の勉学の環境を維持しようと努力したが、ソ連軍が侵攻して来ようという今や、勉強を継続することはできなくなった。従って学校に残って戦闘覚悟で死守するか、公主嶺の勤労奉仕隊に行くか、自由意思で選択しろ〉と言った。もちろん、日本人学生たちは死守するという方で、韓国と中国の学生たちは大部分勤労奉仕隊を選んだ。」²⁷⁴

「（前略）作業場に到着したときには人数がかなり減っていた。途中で中国の学生たちがそっと隊列から離脱したからだ。戦争が終わりに近づいたこの時、なにが勤労奉仕だという心情だったのだろう。奉仕隊が作業場にくたびれて到着し、居眠りをしながら休んでいると、再び新京に帰れという指示があった。その指示は学校本部からきたものだと言われた。私たちは妙だと思った。何日もかけて作業場まできたのにスコップ° さえ触らずに直ちに帰れというのはおかしい話だった（中略）引率の教授もその理由は知らないというので、とにかく教授と一緒に新京に向かって出発するししかな

²⁷³ 前掲と同じ。

²⁷⁴ 安仁建「建国大学生は寂しくない」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、78-80頁。

かった。(後略)」²⁷⁵この部分は、勤労奉仕に参加した中国人学生と朝鮮人学生の現場での行動の違いを明らかに示していた。中国人学生が途中で自主解散したことは、中国側の回想文における内容と符合している。「どれほど戻ったのか、深い山中で中国の学生たちが隊列を止めさせ、引率の教授に、我々は新京に戻らないから即時解散し、皆を自由行にして欲しいと要求した。中国の学生は前もって合意していたようだった。数人の教授たちは相談して、その意見を受け入れ、勤労奉仕隊はその場で解散された(中略)ところが解散されると、中国語もできず、ここがどこなのかもよく分からない私はとても慌てた。通化を通して韓国に行こうという考えもあったが、韓国の学生3、4名は相談して、一旦新京に戻ることに決めて歩いた。中国の学生たちもばらばらに散っていった。」²⁷⁶勤労奉仕の途中で脱走した人々は、その後異なる人生の道を歩み始めた。「建国大学はもう解散されてしまい、韓国の学生たちは先輩の指導で青年同志会に入会して、韓国の将来を建設する人物になると決めたようだった。」²⁷⁷

金鎔熙は回想文の中で、1945年7月の出来事を以下のように語っている。「1945年7月だと記憶する。〈検閲点呼召集令状〉がきた。部隊で一日中ずっと予備訓練を受け、午後遅くに学校へ戻った。とうとう私も行くのかという切迫した緊張感を感じた。(中略)8月9日、一週間の休暇をもらい帰省した。(中略)新京を出発する時に(中略)これが建国大学との永遠の別れになるとは誰が予想しただろう！」²⁷⁸この回想によれば、金らは8月9日に帰省してから、学校に戻らなかったと判断できる。「8月15日、日本は連合軍にとうとう無条件降伏した。韓国は自動的に解放を迎えた。その時その瞬間の感激は表現できないが、一面では寂しく虚脱感があった。」²⁷⁹この感覚は、大きな喜びを示した中国人学生や他の朝鮮人学生とはやや異なる。金は、その時感動と興奮の気持ちではなく、逆に空虚感を味わっていた。そのような気持ちを持った朝鮮人学生は少なくなかったようだ。彼らは建国大学に在学した時さえ二重身分という自己認識を持っていた。彼らは戦後に韓国社会の各界で活躍するが、他方で積極的に同窓会活動にも参加した。その理由も、彼らの二重のアイデンティティ、または終戦前後の複雑な気持ちに根拠を見出せると考えられる。

²⁷⁵ 前掲と同じ。

²⁷⁶ 前掲と同じ。

²⁷⁷ 前掲と同じ。

²⁷⁸ 金鎔熙・「建国大学生生活の回顧」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、88頁。

²⁷⁹ 前掲と同じ。

安光镐は次のように、その複雑な気持ちを描写している。「1945 年 8 月 15 日、日帝の桎梏からの解放の喜びはあったが、韓国内に根の深くない 20 代青年、建国大学同窓の皆がそうであるように、避けられない混乱と建国期の試練を経験せざるを得なかった。」²⁸⁰

第五章 建国大学の同窓会

第一節、同窓会の概況

第一項 満洲関連同窓会の中心的組織である「国際善隣協会」。

関東州から数えれば、40 年にわたる日本の殖民・傀儡統治は敗戦とともに終焉を迎えた。その後、5 年のうちには、半数以上の日本人が満洲地域から日本へ引揚げた。満洲および大連からの引揚者の総数は 120 万人にのぼった。²⁸¹坂部晶子によれば、満洲の同窓会は戦後、異なる時代と各学校の機能にしたがって、その性格や色彩は異なっていた。「学校の同窓会のなかでも『建国大学同窓会』や『大同学院同窓会』などのように『満洲国』の中枢の教育機関を前身とするものは、戦後比較的早い時期(昭和 20 年代)に 設立されている。あるいは、戦後の『満洲』経験者の集まりのなかでも、『満洲』関連資料の収集や関連団体の連絡などに大きな影響力をもった『国際善隣協会』、また『「関東州」の居住者を中心につくられた大規模な団体である『大連会』なども、戦後時間をおくことなく結成されている。」²⁸²

戦後の日本社会では、満洲から帰国した人員を対象とした政府組織が存在しなかった。満洲からの引揚者の間では相互に連絡する必要が生まれ、それを通じて、彼らの「再集団化」を実現したいという期待が高まった。そのようなネットワークを作り上げる途上で、彼らは関連する同窓会を組織し、さらに満洲での生活を再構成するために、回想的な各種の出版物を刊行した。そのような出版物には、満洲時代の風景、都市

²⁸⁰ 安光镐・「渺茫三千里」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986 年、105 頁。

²⁸¹ 厚生労働援護局『引揚げと援護三十年の歩み』、1977、689-690 頁。

²⁸² 坂部晶子、「『満洲』経験の歴史社会学的考察：『満洲』同窓会の事例をとおして」、『京都社会学年報』第 7 号、1999、101-120、107-108 頁。

の姿、ないし満洲の生活用品に関する一連の引揚者の回想を喚起する記事が盛り込まれていた。

原明緒人編『遥かなる大地 満洲再見』（1985年）では、「満洲関連団体名簿」が掲載されており、満鉄など会社の同窓会を含む同窓会がリストアップされている。坂部晶子は1999年にそれらの帰国者団体に対してアンケート調査を行った。坂部の調査によれば、満洲時代の学校の同窓会は同窓会全体の73.6%を占めていた。²⁸³「満洲」と「大連」を除き、満洲における戦後同窓会では、1945年成立された「建国大学同窓会」、「大同学院同窓会」など満洲の中核的な教育機関の戦後同窓会が早くから存在していたことが分かる。彼らの上部組織であり、満洲に関する関連資料の収集と関連団体の連絡に重大な役割を果たしたのが「社団法人国際善隣協会」である。

社団法人国際善隣協会の歴史は1942年2月2日に遡ることができる。設立当初には当時の内閣総理大臣東條英機の許可を得て「社団法人満洲交友会」と称した。その後、1942年5月16日に、「社団法人満洲会」と改称された。日本の敗戦と満洲国の崩壊とともに、1945年11月30日に「社団法人昭徳倶楽部」と改名された。1946年11月29日の第12回通常総会で「社団法人国際善隣倶楽部」と改名する決議が通過し、1947年7月18日には外務省の公認を得た。その後20余年を経て、1972年5月1日に開催された第61回通常総会で「社団法人国際善隣協会」と改称された。²⁸⁴

遡って見ると「社団法人満洲交友会」の時に、満洲重工業総裁の鮎川義介は満洲国の成立十周年を祝うため、張景恵に百万円を贈ったが、張はその金を満洲交友会に寄付した。満洲交友会はその百万円を設立資金として使った。国際善隣協会の私家版史料では、その百万円の使途に関し、記述の差異がある。日本の政界と軍隊の要人が満洲交友会の初代会長と幹部陣に任用された。例えば、初代会長には陸軍大将本庄繁が、副会長には陸軍中将筑紫雄が就任した。顧問にも各界の大物が任ぜられた。その中には東條英機、星野直樹、岸信介、土肥原賢二、鮎川義介、小磯国昭などがいた。²⁸⁵そのころの人員配置について、『あゆみ』では次のように記されている。「役員の顔触れとこの最初の定款から明らかなのは、満洲交友会は満洲関係のエリート集団、サロンとし

²⁸³ 坂部晶子、『『満洲』経験の歴史社会学的考察：『満洲』同窓会の事例をとおして』、京都社会学年報第7号、1999、101-120、107頁。

²⁸⁴ 国際善隣協会、『社団法人国際善隣協会五十年のあゆみ』、6-9頁。

²⁸⁵ 前掲17頁。

での存在であって、公益法人としての色彩は薄いということである。」²⁸⁶第二次世界大戦終結後、社団法人善隣協会は、戦後在満日本人ネットワークの結節点として重要な機能を発揮した。建国大学同窓会など満洲国高等教育機関の卒業生も引揚げ後に続々と社団法人国際善隣協会に参加した。

客観的な側面から見れば、国際善隣協会は戦後「満洲国関係者」の帰国および善後処理などの事務事項で重要な役割を果たしたと判断できる。戦後満蒙地区の在留邦人は120万人にのぼった。国際善隣協会は満洲国駐日大使館および満洲国駐日主要会社の代表者の協力を得て、帰国者向けの援助機関を設立した。その際、「財団法人満洲国関係帰国者援護会」も善隣協会によって設立された。1946年3月15日、援護会は「財団法人満蒙同胞援護会」と改名され、次のような事業を開始した。

「引揚げ促進事業、援護並びに職業の相談、調査並びに資料の収集、満蒙に係る歴史資料の収集、引揚者全般に必要な事業、その他本会の目的を達成する為必要と認めた事業」。²⁸⁷

国際善隣協会は戦後10年間、満洲国関係者らが東京で活動できるサロンとして運営された。善隣協会では、様々な行事、会員の教養・親睦・厚生活動などが行われた。1954年から始まった支援事業は次のように記録されている。「1954年からアジア諸国の留学生への援助、1955年日韓親和会への援助、戦犯に対する見舞金贈呈、1955年学校法人亜細亜学園への援助、1956年終戦研究委員会への援助、1959年善隣友誼会への援助、1966年財団法人勸学院後援会への援助、1976年日中孤児問題連絡協会への援助事業」など。

上記の「日韓親和会」という組織は、戦後の日韓両国人民の共同的理解により、1951年に東京で発足した団体であり²⁸⁸、会長は終戦時の鈴木貫太郎内閣の国務大臣である下村宏²⁸⁹であったが、副会長は幣原内閣の大蔵大臣渋沢敬三²⁹⁰であった。その親和会の主な目的は、法務省大村収容所から仮放免される朝鮮人に保証金を貸借することである。例えば「身寄皆無、引取手の無い200名の保証金一人につき5000円計百万円を借り受けた旨の懇請があった、償還期間は半年ないし一年」²⁹¹となっていた。居住登

²⁸⁶ 同上。

²⁸⁷ 国際善隣協会、『社団法人国際善隣協会五十年のあゆみ』、43-44頁。

²⁸⁸ 前掲196-197頁。

²⁸⁹ 下村宏、1875-1957、昭和時代の官僚。その時鈴木内閣の国務大臣（内閣情報局総裁）である。

²⁹⁰ 渋沢敬三、1896-1963、昭和時代の財界人、民俗学者、幣原内閣の大蔵大臣である。

²⁹¹ 国際善隣協会、『社団法人国際善隣協会五十年のあゆみ』、197頁。

録が済み次第、各個人毎に逐次償還、無利息という条件であったが、「協会としては善隣友好の建前から債務者を日韓親和協会として仮払金処理をし、30年4月百万円を貸し付けた」²⁹²。

戦犯に対する見舞金贈呈は第三国の戦犯向けの援助活動である。1958年4月までに巢鴨拘置所を出所した者延65名に対し、総額65万円の見舞金を支出して慰問した。1959年1月、中華人民共和国の李徳全の来日により、撫順に拘留中の日本人戦犯28名の氏名が判明したので、同年度より会員に呼びかけ慰問状を送るとともに、日本赤十字社を通じて三年間慰問品を送付し、併せて留守家族にも見舞品を送った²⁹³。

日中国交回復後、中国との交流活動では、国際善隣協会も重要な役割を果たした。1979年、すなわち日中平和友好条約調印の翌年に、国際善隣協会は、初めて駐日中国大使館を訪問した。その訪問は、「協会の性格から言って不思議といえば不思議」と評価された。²⁹⁴1980年6月29日から7月9日にかけて、協会は初めて「善隣友好訪中団」の形で中国東北地区を訪ねた。その時、訪中団は中日友好協会副会長孫平化の接見を受けた。

要約すると、国際善隣協会は戦後日本人の引揚および善後処理の諸事業に積極的な活動を展開した。特に隣国と友好関係の促進には重要な架け橋として活躍した。国際善隣協会は様々な満洲国関連機構の同窓会と連絡があり、建国大学の同窓会も善隣協会と密接な関係にある。

第二項 建国大学戦後同窓会

(1) 建国大学戦後同窓会の発足

建国大学は1945年に閉校された。²⁹⁵その後、中国人学生の解散および他民族の学生の帰国とともに、日本人学生の引揚げが行われた。その時、一部にはソ連軍によりシベリアに抑留されたものもいた。彼らの復員帰国に関する交渉も困難な仕事であった。

従って、如何に日本人学生と家族の生計を確保するかが問題になった。さらに、卒業できなかった学生らの内地大学への編入などの手続きを準備しながら、各地の消息および情報を収集し、学生のために各界と連絡する機能を備える組織が必要だと考えら

²⁹² 前掲 197 頁。

²⁹³ 前掲 197 頁。

²⁹⁴ 日本建国大学同窓会編、国際善隣協会気付、『建国大学同窓会、日本でのあゆみ』、2007 年、211 頁。

²⁹⁵ 建国大学の閉学宣言は 1945 年 8 月 23 日に発表された。

れた。1948 年になると、東京、京都、福岡など主な地区において幾つかの同窓グループが発展してきた。そのような同窓グループの成員は、建国大学の学生のみではなく、他の学校の学生も含まれていた。彼らは交通・連絡における有利な条件を用いて、さまざまな活動を行っていた。その時の主な業務は、学生の互助活動および戦後引揚者向けの援護活動などであった。

戦後、連合国軍最高司令官総司令部が軍国主義者に対する公職追放などを行い、超国家主義団体に対する解散指令も発出された。一方、一部の建国大学学生と教職員には、戦争責任が課される可能性もあった。それぞれの圧力の下、学生たちを内地の大学に編入する必要性が増大した。この時期、互助会的な性格を持つ同窓会組織は、多くの証明書の発給などの事務を行なった。²⁹⁶

(2) 建国大学同窓会の活動概況

上述したように、建国大学同窓会は学生互助会により、各学生グループに応じて、戦後の引揚げ者援護事業などの仕事を行なってきた。善後処理など仕事が終わってから、建国大学同窓会の活動は主として同窓会名簿の編集・発行および会報・会誌の出版に注がれた。終戦直後の段階では、日本社会を再建設するために日本人同窓が身を投じたが、国際政治の面では冷戦の政治環境の下、日本同窓会と海外同窓との連絡条件が客観的に制限されていた。そのため、建国大学の同窓会活動は主に日本国内で行われた。日本国内の同窓との連絡は建国大学同窓会が名簿を編纂する最も主要な目的であった。

建国大学同窓会は、第 1 版の同窓会名簿を 1952 年 12 月に出版した。²⁹⁷その後、名簿は定期的に更新され、ページ数も国内および海外同窓との連絡の拡大とともに増加した。最初の 1952 年 12 月版の名簿は 63 頁であり (B5 版)、1981 年 6 月 1 日発行の建国大学同窓名簿は 149 頁になった (A5 版)。²⁹⁸

さらに、同窓会総会などの活動も建国大学同窓会により定期的に行われた。初回から遡れば、第一回の同窓会総会は 1953 年 1 月 16 日に開催された。その時の会場は東京の虎門共済会館であった。その時の建国大学同窓会事務局は単なる建国大学総会のための事務局ではなかった。事務局の住所は財団法人日本興学会および建国大学 3 期生

²⁹⁶ 日本建国大学同窓会編、国際善隣協会気付、『建国大学同窓会、日本でのあゆみ』、2007 年、1 頁。

²⁹⁷ 『建国大学同窓会（日本国内）同窓会名簿』、日本建国大学同窓会編、国際善隣協会気付、『建国大学同窓会、日本であゆみ』、2007 年。

²⁹⁸ 前掲と同じ。

の同窓会「三喜会」の連絡事務所と共有していた。その後、1954年5月2日に、第1回同窓会総会が正式に開催され、初代会長には建国大学の元副総長、名誉教授作田庄一が選任された。建国大学同窓会関連史料によれば、同窓会総会の開催場所は主に東京圏に分布していたが、東京外で開催した時もあった。例えば、第15回総会(1968年5月12日)の会場は京都大学楽友会館であり、第22回総会(1975年6月7日)の会場は京都平安神宮会館であり、第24回総会(1977年6月4日)の開催場所はホテル名古屋キャッスルであった。総会の開催場所は固定されていなかったが、当時の幹部および会員の都合で決めたと思われる。同窓会総会の開催日付は主に土曜日であったが、そのことは、同窓会活動が親睦目的で行われていたことを明らかに示していた。1980年代以降、同窓生の定年退職とともに、同窓会総会の活動内容は多岐にわたるようになり、会費も1952年当初の300円から1980年代には8000-10000円となり、その後、金額は一度も減額されたことがなかった。²⁹⁹

さらに建国大学同窓会は戦後海外同窓との連絡・交流活動を熱心に展開した。『建国大学同窓会、日本でのあゆみ』によれば、1992年9月に建国大学日本戦後同窓会により、第1回の「同学合同交歓会」が中国の北京・天津で開催された。その時の交歓会旅行団団長林田隆は次のように回想した。「建国大学の精神を子々孫々に受け継いで貰えないかということを真剣に考えるようになったのでした中略この意欲に正面から取り組んでみたいという思いから、一期の坂東・斎藤両先輩にも相談し、従来の同窓会とは別に来日留学の同窓諸子を中心にした懇談会をもってはという事になり、早速素案をまとめて幹事会に諮った所満場一致で賛同を頂いたのです。」³⁰⁰

第1回の家族・子女懇親会は、1993年12月5日に首都圏の同窓生および来日中国同窓の子女の間で開催された。2ヶ月前の1993年10月までに、建国大学同窓会幹事は首都圏に暮らしていた中国同窓生の子女を確認し、彼らの名簿を作成した。その際、主に7、8期の同窓生がその懇親会の準備を行った。会報の記事によれば、参加者は100名に近かった。44名の同窓生が参加し、同窓生の妻2名を含めて日本人は46名であり、中国同窓の子女は51名であった。建国大学同窓会幹部長長野広太郎は次のように述べた。「親しさに溢れた絶え間ない会話、明るい笑顔、あちこちに湧きあがる笑声、満

²⁹⁹ 『建国大学同窓会（日本国内）同窓会总会会費』、日本建国大学同窓会編、国際善隣協会気付、『建国大学同窓会、日本であゆみ』、2007年。

³⁰⁰ 日本建国大学同窓会編、国際善隣協会気付、『建国大学同窓会、日本であゆみ』、2007年、25頁。

員の会場から醸し出される熱気、若者たちの活力（中略）こんなに和気に満ち、信頼と親密感を実感できる会は珍しい。ふと頭の隅を『建国大学は消滅したが、その精神はここにも生き続けている』という想いがよぎったのは、あながち私一人ではなからう。」³⁰¹

その後の同窓会会報では、当時の会長林田隆が「若い世代に希望を托す」と題して新年の挨拶を記し、建国大学同窓子女の間の懇親活動をもっと多く実現すると主唱した。彼によれば、「青春時代の出会いと思い出を胸に秘めながら、心情的親睦交流が続けている多くの海外同窓との繋がりも、やがて歴史の一ページとして消え去る同窓会なのか、身をもって体験した複合民族との思想・生活習慣・心情等の貴重な経験を何らかの形で心ある人々に受け継いでもらう事により、今後の地球的規模による民族共存共栄の難問解決の一助にする念願と努力を、同窓会としても取り組むべきではないかという同窓会運営の基本に対する姿勢なのであります。」³⁰²ということである。

第三項 建国大学の刊行物に関して

建国大学の会報は、建国大学同窓生が戦後建国大学同窓会組織を設立した時、刊行された同窓会刊行物であった。会報の創刊号は二つがある。『建国大学同窓会史』

（2007年）によれば、第1号建国大学会報は1954年5月15日に刊行されたが、同年の11月25日にはもう1回の創刊号会報が刊行された。第2号会報は1955年6月30日に出版され、第3号が詳細不明であるが、第4号が1957年7月30日に出版された。その後、建国大学同窓会幹部間の調整が行われた後、坂東勇太郎が会長を担任して、同窓会会報の刊行活動を再発足した。坂東により刊行された会報の創刊号は1962年に刊行された。後者のNo.1の第二頁において「会報No.1と銘打って会員名簿の発送御通知をかねて第一回総会の模様を御知らせしたガリ版刷りを発行した。その経緯について、阿蘇谷博は1962年の創刊号で次のように記している。

「会報発行は正式には二十九年からであるが、終戦後それまでの数年間においていろいろの事績はもとより存在する訳でありそれらについては最後に触れる事をした（中略）そこで二つのNo.1であるが（中略）旧No.1の全文（B4版表裏）と新No.1の第

³⁰¹ 長野宏太郎、『和やかな懇親の輪広がる―首都圏来日中国子女との集い』、建国大学同窓会編、建国大学会報第51号、1994年2月10日、3頁。

³⁰² 林田隆、『若い世代に希望を托す』、建国大学同窓会編、建国大学会報第51号、1994年2月10日、1頁。

一頁および第一回同窓会の開催通知書を再録添付することとした。以下第五号まではいずれもその号順を No. と表示してあるが、第五号以下については第〇号という形式になっている(中略)等について重複している点に疑問を抱かざるを得ない。いろいろ検討した末の結論は、当初シンキョウ社に同窓会事務所があって、一期小山さんが事務局長を勤めておられたときに発行順に付番されていたものが、三十七年に坂東勇太郎方に事務所が移転し、一期坂東さんが事務局長に就任して手がけられた最初の会報が改めて No. 1 とされたことに基づくものではないか、ということである(中略)引き続いて No. 2 以下が発行されているところから察するにこの推測はまず間違いあるまいと考えられる。(中略)なお、会報は従来毎年一回発行されてきたが、五十七年以降は年四回発行に改められ今日に至っている。因みに、五十五年十月一日号と五十六年の第十八号は歡喜嶺会訪中旅行団の報告を内容とした臨時号である。」³⁰³

現在確認されている建国大学の会報および会誌は、次のようになっている。『建国大学会報』(1-88)1962-2010 年;建国大学各期同窓会会誌、私家版史料文献である『建国大学年表』、(上)、(下)と別れ、各期同窓生の回想文を収集した記念文集『歡喜嶺』がある。その刊行物の発表経緯に対して、建国大学の第 28 号会報では次のように記している。

「(三期会の会誌である『三喜会』の)第一号が二十三(1948)年十一月一日に発行されて以来、三十(1955)年の第二号以降は毎年一回発行され、五十八(1983)年十二月には三十号がお目見えした。第三号『迎春花』以降は毎号大陸に因んだ名前が冠されるのがその特色である。」³⁰⁴ 4 期生の会誌は『楊柳』である。「三十四(1959)年五月二日に第一号を発行して以来、四十七(1973)年の第二号以降は毎年発行されて昨五十八(1983)年十月に第十四号が出された。三喜会誌と違って同一誌名が墨守されている。」

³⁰⁵ 新 3 期の会誌は 4 期より一年早く、「三十三(1958)年一月に新三期の会誌『慢々的』第一号が発行されたが、三十四(1959)年一月の第二号以降は数年のブランクを置いて五十、五十一、五十二年に第三、四、五号が出された後、『元期会会報』と改められて第一号が五十六年十月に発行され、五十九年一月発行の第三号が最新号である。」³⁰⁶

³⁰³ 阿蘇谷博、「終戦直後の混乱まざまざ一同窓会活動 30 年の歩み」、(建国大学同窓会編、『建国大学同窓会報』第 28 号、昭和五十九年四月十一日、2-4 頁。

³⁰⁴ 阿蘇谷博、「終戦直後の混乱まざまざ一同窓会活動 30 年の歩み」、(建国大学同窓会編、『建国大学同窓会報』第 28 号、昭和五十九年四月十一日、5 頁。

³⁰⁵ 上と同じ。

³⁰⁶ 阿蘇谷博、「終戦直後の混乱まざまざ一同窓会活動 30 年の歩み」、(建国大学同窓会編、『建国大学同

7 期、8 期同窓生の合同会誌は『八旗』である。「『八旗』は五十三(1978)年十月に第一号が発行されて以来、毎年十一月に発行され五十八年の第六号が最新号である。期別呼称改訂前の八期に因んで命名された誌名を反古にするに忍ばず、折良く五号からは七、八(旧九)期合同会報として由緒ある誌名を見事に残された手腕に対しては脱帽せざるを得ない。」³⁰⁷6 期の会誌は各期のなかで一番遅れていた。「最後に六期は『曙さざす』という名称の文集を五十六(1981)年二月十一日の同期会の日に発行している。」³⁰⁸

そのほか、建国大学同窓会により私家版史料が刊行された。1966 から 1971 年の 5 年間に、建国大学同窓会により『建国大学史資料』という私家版史料が出版された。その後、建国大学の 2 期生である湯地万蔵は、『建国大学史資料』を利用し、建国大学における出来事を年表の形で記録して『建国大学年表』を編纂した。『建国大学年表』では、重要な人物の講演、同時期文献、学生日記、インタビューおよび回想文など収録されており、貴重である。その経緯は次のようであった。「五十年六月五日に二期湯地万蔵三編纂になる『建国大学年表』が建国大学史資料第六号として発行されたのを最後に第七号以下は日の目を見ていない。然しながら、この第六号が叩き台となって五十六年十一月三十日発刊の五百七十頁にのぼる箱入り『建国大学年表』という豪華版として実を結ぶに至るのである。」³⁰⁹その他、『歓喜嶺(上)(下)』という建国大学同窓生回想文集も同窓会により刊行された。

建国大学同窓会会報および会誌では、様式と内容を共有する傾向がある。まず、毎期の最初では必ず会長の挨拶があり、同窓会総会の開催計画と定期的な会費出納などの情報が示されている。さらに固定的な欄目では、「近況説明」、「〇〇支部・海外便り」、「名簿更新」などがある。同窓会総会と地方、または海外の同窓との頻繁な連絡と同窓間の親睦の様子を考察できる。特に日中国交回復後、建国大学同窓会と中国側の同窓生との連絡が容易になり、中国側からの寄稿などもしばしば同窓会刊行物に発表されている。一方、亡くなった同窓・上長に対する弔意表明・思い出などの内容もしばしば掲載されている。以上に述べた内容は、満洲日系高等教育機関の戦後同窓会刊行物ではよく見られ内容である。

窓会報』第 28 号、昭和五十九年四月十一日、6 頁。

³⁰⁷ 上と同じ。

³⁰⁸ 上と同じ。

³⁰⁹ 上と同じ。

建国大学同窓会では、同窓間の連絡のために数回名簿を作成した。第 28 号会報の中で、阿蘇谷博は建国大学同窓会名簿の作成経緯について回想している。彼が最初入手した同窓名簿的性格を有する印刷物は『建国大学情報第一報』というもので、記録された名簿の収録日付は 1946 年 7 月 14 日である。彼は次のように述べている。「わら半紙 B4 版二枚のガリ版刷り文書と同じく一枚の付属同窓名簿とから成るまことに粗末な印刷物ではあるまいか。」³¹⁰そのいわゆる第 1 版の同窓名簿が、1970 年の第 17 号の三喜会会誌『高やぐら』に収録された。第 2 版の建国大学同窓名簿は 1948 年 3 月 29 日に刊行された。その第 2 版の名簿に対して、阿蘇谷は次のように記している。「(前略) 歓喜嶺会連絡所(東京都新宿区四谷三丁目九番地新進堂内)から発行された『御連絡事項と人名録』である。内地大学転入学の件や東京における学生生活等について連絡文書一枚と B5 版十二頁及ぶ全国の名簿とからなっているが、同様に当時の世相を如実に反映しているまことに粗末な仙花紙が使用されている。」³¹¹

さらに、建国大学における京都大学の学閥意識は戦後同窓会活動にも及んだようである。一部の同窓は戦後関西の高等教育機関に編入され、その後関西で活躍した。建国大学の同窓会会報には、しばしば「関西支部便り」「福岡支部便り」などの内容があった。支部間の連絡と交流も会報など同窓会刊行物に掲載されていた。

第二節、建国大学同窓会と国際交流

戦後建国大学同窓会の日本国内活動

終戦後、満洲国の崩壊のため、建国大学は閉学という終焉を迎えた。閉学とともに、在学した日本人学生は日本に引き揚げ、帰国してから善後処理を受け、日本国内で教育研究を続けた。それらの手配は日本における様々な同窓会団体により、1948 年まで行われていた。その時、日本全土における同窓会組織は、建国大学の同窓会だけではなく、多くの学校の同窓会組織があったが、それらの活動は首都圏に集中していた。建国大学の同窓会総会の「発足会」は 1953 年 1 月 16 日に東京の虎ノ門共済会館で開催され、80 余名の同窓生や教職員が出席した。正式的な第 1 回総会は、1954 年 5 月 2 日

³¹⁰ 上と同じ。

³¹¹ 上と同じ。

に開催され、その時は、建国大学の開学(1938年5月2日)を記念する意味で、5月2日の日付を選択した。そのころ海外同窓との連絡はまだ取れず、同窓会総会には日本同窓のみ参加した。その後、国交回復と同窓会総会の活躍とともに、会報、名簿など刊行物も増えてきたため、海外同窓会(韓国・台湾)も次第に発展した。

終戦後1950年代の建国大学同窓会は日本国内のみで活動していた。作田庄一副総長の出身校が京都大学であったため、同窓会総会の開催場所もしばしば関西で行われた。最初の20回の同窓会総会の開催場所を分析すれば、第15回(1968年5月12日)は京都大学楽友会館で行われたが、参加者人数も基本的には70-80名に固定されていた。第22回(1975年6月7日)同窓会総会は京都平安神宮会館で行われ、参加者人数は以前と比べると比較的多く、121名にのびた。³¹²その後、同窓会総会はしばしば東京以外の場所で行われ、基本的には関西地域に集中していた。³¹²さらに、同窓会総会が関西地方で開催された時の人数は東京地区で行われる時より多かった。そのことを別とすれば、同窓会総会の組織活動も各期順番で担当することになった。

さらに、建国大学の同窓会幹部は、満洲関連同窓会の中心的組織である国際善隣協会で重要な職位を担任した。彼らは国際善隣協会の職務を利用し、建国大学同窓会の発展にも貢献した。「二水会³¹³の会場は、発足当初は、帝国ホテル内の日本記者クラブで開いていたが、昭和五十一年(1966)七月と八月は日比谷のプレスセンターで行い、同年九月からは国際善隣協会の会議室に移り、以来今日まで、三十年の長い間、国際善隣協会のお世話になってきた。しかも、この会合が順調に続いているのは、善隣協会に勤務した同窓生たちが献身的な協力をしたお陰である。」³¹⁴

建国大学同窓会の海外活動

建国大学中国人同窓生との連絡は、日中国交回復回復後にとりわけ盛んとなった。終戦直後の交流活動は、個人的記憶の形で行われたが、史料価値ある参考文献は残されてない。

³¹² 第15回：京都大学楽友会館；第22回：京都平安神宮会館；第25回：大津ボウル；第30回：大阪グランドホテル；第35回：奈良ホテル；第38回：舞子ビラ（神戸）；第40回：福新楼（福岡）；第41回：東洋ホテル（大阪）；第48回：ホテル・モントレ大阪。

³¹³ 建国大学同窓会の活動の一つである。毎月の第二の水曜日に座談会の形で運営されていた。

³¹⁴ 日本建国大学同窓会編、国際善隣協会気付、『建国大学同窓会、日本であゆみ』、2007年、11頁。

1955 年、1957 年には建国大学中国人同窓生である陳抗が日本に訪問した。その後、孫平化は 1964 年に LT 貿易連絡事務所秘書長として訪日し、一連の交流親睦活動を行なった。孫平化は日中国交回復後、初代札幌総領事として建国大学の日本人同窓生と交流し、日中友好にも継続して活躍した。中国では、元建国大学の跡地を利用し、長春大学を建設した。当時の中国国務院総理李鵬の題言であった。

その後、日中国交回復後、中国同窓も日本同窓会との連絡を始めた。日本同窓は熱心に訪中活動を展開し、日本同窓会は数回「歡喜嶺訪中団」の名で訪中活動を行なった。その一連の訪中活動はすべて建国大学の同窓会誌に報告された。1981 年の第 17 号同窓会報では、前書きの部分から第 5 回「歡喜嶺訪中団」の記事を載せた。一方、中国側の同窓も業務出張、留学などでしばしば訪日した。そうした機会に中国側の同窓も日本同窓会に寄稿し、挨拶した。

建国大学戦後同窓会におけるネットワークは親世代のみならず、第二世代にも伝承された。建国大学の日本同窓会では、中国人同窓の子女の留学・事業に大きな役割を担った。例えば、同窓会として数多くの同窓生の子女の留学の世話をし、ビザ³¹⁵の取得、保証人、あるいは一人当たり 10 万円の補助、アルバイト、就職の斡旋など各方面で貢献した。建国大学日本人同窓の海外交流について、建国大学 5 期である佐藤達也³¹⁵は次のように述べている。

「現在我は陳抗の息子陳燕生とコンピューターソフトの会社を、同窓 3 名とともに経営していたが、同窓の縁は子々孫々まで続いていきたいものである。私個人として上海在住の同期生、喬世隆の息子、海光夫婦の留学の保証、大連の 8 期の林承棟の三女の林青の留学の保証、および同期の李孟競の娘の保証等を行なった。(中略)また台北では吳憲藏、劉英洲、ソウルでは鄭聖朝と親しく交流を深めた。(中略)吳憲藏は台北の名士であり、台湾プラスチック、国泰百貨店、ホテル、銀行、保険、リース等の経営をしていた。満系 4 期の裴定遠が国府軍に走った兄(黄埔軍官学校卒)の行方が分からず、私に探して欲しいと依頼があった時、吳憲藏が直ちに発見、双方に大いに感謝されたことがある。ちなみに兄上は台北市の司令官になった。」³¹⁶

³¹⁵ 佐藤達也は建国大学 5 期生であり、終戦後中途退学となって愛知大学に入学し、その後三和銀行へ入社し、その後日中貿易関係の会社で勤務した。

³¹⁶ 佐藤達也『建国大学と私』、愛知大学東亜同文書院大学記念センター『オープン・リサーチ・センター年報』第 5 号、58 頁。

第三部 理論的考察

同窓会の語りと記憶再構成

同窓会の歴史に対して史料研究を行う時、普通の歴史研究とは差異がある。一般的な歴史学者はある歴史事件を研究する際、公刊史料など一次史料に基づいて分析する。同窓会活動の過程で残された史料は、ある経験を共有する人々により結成された集団の間に発生した記述である。そのため、出来事に関する語りは、ある集団の成員のみが共有する傾向が反映される。アルヴァックスの集合的記憶論は、「集合的記憶」と「個人的記憶」を論じているが、同窓会の語りと記憶の再構成を分析する際役に立つと考えられる。

集合的記憶論はフランスの歴史社会学者アルヴァックス (Maurice Halwachs) により提出された。アルヴァックスによれば、人間は自分自身が「理性」を備えている。人間が緊密に社会に依存するのは、その「理性」、すなわち自分自身の意識に従って決定するからである。20 世紀初頭、彼は社会変化の過程で、西ヨーロッパの貴族、青年または異なる世代間の関係を考察したことがあった。さらに、彼は出来事の経験者である高齢者の社会上の機能、出来事に対する語り、および彼らの人間関係を分析した。従って、彼は「社会的連続性」を理解した。すなわちアルヴァックスによれば、ある「共同意識」の中に、人間は固有な時間と連節できる形式(伝統、過去に対する崇拜など)を通じて人間社会の秩序と進歩を喚起すると述べている。³¹⁷

満洲日系高等教育機関の戦後同窓会の史料を考察する際、同じ同窓において異なる同窓生集団で異なる記憶が共有されていることが確認された。それにも関わらず、同じ同窓会では「集合的記憶」が各構成員に共有されていた。本論文の第三部では、日本、中国、台湾および韓国など出自が異なる同窓生の満洲記憶を分析し、その分析を通じて出自による満洲記憶の着目点と方向性を考察したい。

アルヴァックスによれば、社会における個人的記憶は次のように説明される。「集合的な物であって、周りの多くの人々から刺激を受けており、接触し続ける。例えばそれが我々だけが関与した事や、我々だけが見た事物に関わる物であっても、他の人々に

³¹⁷ モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989 年、1-4 頁

よって思い起こされるのである。」³¹⁸彼によれば、個人的記憶は社会の特徴に影響され、構成されることになる。すなわち、社会的特徴を持つ影響力により組み合わせられるのが集合的記憶であると唱えられた。

満洲日系高等教育機関の戦後同窓会では、その活動を通じて、満洲経験が「集合的記憶」として記述され、各国の同窓生集団と日本同窓会との数十年間の交流活動を通じてさらに「集合的記憶」が適用されていた。同窓会が刊行した会報、会誌、回想文集には、出来事に関する語りを通じて、集合的記憶が反映されていた。他方、ある同窓会会員である同窓生が自分自身の立場で出版した個人回想録は、その集団内の個人としての「個人的記憶」であった。アルヴァックスによれば、人間は必ずしも自分の目で見ているものを信じているわけではない。つまり、思い出す瞬間には、我々は心の中の記憶と他人の記憶に依存する。³¹⁹

同時にアルヴァックスは「記憶の再構成」という概念を提出した。すなわち人間は古い場所への訪問を通じて、ある場所の記憶を「再構成」するだろうと指摘した。訪問は、頭に残された記憶とは対照的となった。このような比較を通じて、人間は全体として自分自身の「記憶」を「再認識」をすることができる。従って、他人の記憶は、我々自身の記憶の基礎となり、最終的には「記憶の再構築」に達することになる。³²⁰

この点で、アルヴァックスの「個人と他の人が一緒に旅行する」という提言は、彼のいう「個人と他の人が共有する記憶」と集合的記憶とが個人的記憶に対して有する影響を具体的に説明する。アルヴァックスによれば、個人が異なる人々と一緒に旅行する機会がある場合、その過程で、仲間のアイデンティティが異なるため、いくつかの異なる集団が形成される。個人は集団 A で視点 a を形成し、同じく集団 B で視点 b を形成する。もしある個人がずっと集団 A にいて、集団 A の成員とのみ活動すると、自分自身の視点を形成できず、集団 A の成員のみが共有しうる視点 a+を形成する。

³¹⁸ モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年、2頁

³¹⁹ 前掲 1 頁「我々が常時求めることのできる証人の第一は、他ならぬ我々自身である。ある人が『私は自分の目が信じられない』という時、その人はその人自身のうちに二つの存在があることを感じている中略その見てきたばかりのことを証言する証人として存在している。これに対してもう一方私は、現に見はしなかったがおそらく以前に見たことがあり、おそらくまた他人の証言に依拠してそう考えたのである。」

³²⁰ 前掲 16 頁。

上述の内容は、以下のような図で示される。



集合的記憶や個人的記憶も逆効果になる可能性がある。個人がある集団から離れることと共に、忘却が発生する。アルヴァックスは、この場合、過去の事実の記述と説明が集合的記憶および個人的記憶にとって価値があると主張する。特定の事柄を想起する際に、想起に関与するすべての人が特定の事柄を正確に想起できない場合でも、問題の一般的な状況は、特定の一連の語り・記述から推測することができる。過去の事実の記述と説明は、個人的記憶を補完する。意識は主観的であるため、人間の記憶にはある程度の選択性が反映されている。選択の発生条件は、一般的に個人の精神世界に基づいている。個人の見た現実とは心の中の概念と矛盾するかもしれない、それは誤った記憶を生み出すかもしれない。その時、証人の証言および他の人の記憶は、個人的なフィクションを修正することができる。³²¹

その結果、アルヴァックスは「共同集団内共同成員により保留された共同記憶」の存在を主張し、それを「共同的再構成」と呼んだ。「共同集団」には、一定の時限性と継続性が反映される。「共同集団」では、成員間でも意見が異なる場合がある。たとえば、より大きな集団には、成員 A だけでなく、A の友人と非友人がいる。A を評価する際、関係の影響を受けて、A の友人は A に対して肯定的な観点を持つ一方、A の非友人は否定的な見解を持つかもしれない。

上述の内容を図で示すと次のようになる。



³²¹ 前掲 48-49 頁。

例えば、建国大学の同窓会集団では、日本人同窓生は作田庄一副総長について、一般的に積極的な語りで記述していたが、中国人学生は民族および政治立場により、作田副総長に対して中立的、あるいは否認的な態度を持っていた。作田副総長は日本人学生の上長と看做され、尊敬されていた。しかし、中国人学生は日本人学生と同じ感想を持たず、建国大学同窓会の集団に入らず、他の集団に投身し、そこで新しい、彼らの精神世界にもっとも適合的な記憶を形成した。従って、戦後中国側の回想文集では、建国大学在学中の出来事を回想する際、彼ら自身が参加した反満抗日運動とマルクス主義の受容過程を語った。

アルヴァックスは、以上のように、「共同的再構成」をダイナミックに認識した。ある個人は、自分の生活と共に、自らの記憶を再構成する。例えば、建国大学の中国人同窓は、日中国交正常化の直後、すなわち 1970 年代から、積極的に建国大学の戦後日本同窓会に参加した。彼らは日本側の同窓と交流して、経済活動など諸事業で活躍した。しかし 1990 年代に至ると、中国では天安門事件の影響で政治的環境が厳しさを増し、海外への交流活動も減少した。従って、1990 年代に出版された建国大学中国人同窓生の回想文集では、1980 年代の状況と一変し、建国大学の教育に対して消極的な評価が盛んとなった。さらに、1990 年台の会誌を見ると、中国人同窓と日本人同窓との交流活動も下火となった。

アルヴァックスは自伝的記憶と歴史的記憶という対照的な概念を提出した。彼によれば、自伝的記憶は個人的記憶に属し、歴史的記憶は社会的記憶に属する。個人的記憶は、社会的記憶とは明らかに対照的となることがある。満洲国における日系高等教育機関の戦後同窓会では、様々な交流活動の組織化、母校の歴史の記述および同窓会記念文集の刊行などが、それらの同窓会集団に属する社会的記憶として存在している。一方、個人回想録など個人的語りが記録された出版物では、それらとは反対に、個人的記憶が反映される。そして、アルヴァックスは次のように主張している。「もし私がこうした出来事の思い出をすっかり完全に再構成しようとするれば、集団のあらゆる成員の中でこの出来事をめぐってなされた、歪められ部分的でしかない再現のすべてを、

比較しなければならないであろう。反対に、私の個人的思い出はすっかり私のものであり、全てが私の中に生じたものである。」³²²

アルヴァックスは、歴史的または国民的出来事は、個人的記憶に時系列を提供しながら、外部から個人的記憶の引証基準となった。³²³その両者は、現実の層では互いに浸透することが可能である。彼によれば、歴史は「集合的記憶」の一つと看做される。「歴史という集合的記憶のこうした形から、その非人格性や、その抽象的正確さや、その相対的単純性を、つまり、我々の個人的な記憶が依拠することのできる枠をまさに形成しているものを、奪うものである」³²⁴。しかし、想起の再構成³²⁵に際しては、我々は他人の証言と記述を借用することにより、苦境に陥ることがある。我々は直接的な方式で記憶を喚起するのか、一部の証言に基づいて過去に対して合理的な想像するのか。アルヴァックスは、歴史記述は経験を再構成する際、重要な役割を担うと判断した。

アルヴァックスによれば、人々が過去の出来事を再構築するとき、彼らは記憶そのものではなく、抽象的な知識と個人的な見解に基づいて歴史のギャップを埋めることができる。現実社会の諸要因は、個人的回想に影響を与える。たとえば、国家など広範囲な要因が個人的利益や家族に影響を与えることがある。建国大学のケースを分析すると、逆に反対的な結論を出すこともできる。建国大学の学生の出自はそれぞれ異なっていたが、戦後各自の国家再建と社会思想変化など過程の中で、自らの経験に基づき出来事を記述していた。

アルヴァックスは、集合的記憶と歴史は対立すると主張する。彼によれば、ある歴史事件を経験した集団は、その歴史事件に関する歴史記述を読んできた次世代の人間とは認知上において異なる。その差異は、満洲国日系高等教育機関の同窓会回想文集における語りと次世代である日本史研究者の研究の中に明らかに反映されていた。

アルヴァックスは集合的記憶と歴史の関係について以下のように述べている。彼は、集合的記憶は特定の集団だけに属しており、その記憶も成員のみの意識の中で保存されている。それに反して、歴史は人類の普遍的記憶として姿を現しているが、普遍的記憶というものは存在しない。すべての集合的記憶は空間的にも時間的にも有限な集団によって支えられている。それらの集団は、変化し分裂していくので、我々が同じ

³²² モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年、48頁。

³²³ 前掲 52頁。

³²⁴ 前掲 56頁。

³²⁵ 前掲 72頁。

ところにずっと立ち止まり、集団から出て行かなくても、集団の成員は緩慢ないし急速に更新されていき、当初その集団を構成していた人々とはほとんど共通の伝統を持たないような、実質的には別の集団になっていることもある。³²⁶ 建国大学の中国人生は、1990年代には同窓会という集団の成員として急速に更新され、日本同窓らと共通の伝統を持たないような、日中同窓友好の語りより、在学期間の反満抗日運動に関する記憶を共有する別の集団になっていた。彼らの更新された語りは中国の政治環境と一致し、1990年代には中国政府の指導に従って『回憶偽満建国大学』という回想録文集が出版されたのである。

集合的記憶の理論展開と記憶の場理論

ドイツ歴史社会学者ヤン・アスマン(Jan Assmann)とアライダ・アスマン(Aleida Assmann)は、アルヴァックスの集合的記憶理論をさらに発展させた。ヤン・アスマンは「コミュニケーション的記憶」および「文化的記憶」の理論を提出し、「集合的記憶論」を文化学の理論として確立した。

文化学の領域では、記憶は心理学・神経学分野の問題として討論されるのではなく、「文化」、「歴史」などの課題と合わせて考察される。「文化的記憶」とは、現在と距離がある歴史事件および神話に対する記憶を対象とし、特定の時点である集団の記憶の合理性を検討し、その過程でその集団におけるアイデンティティを確保する機能を備える記憶形式である。³²⁷

ヤン・アスマンは、アルヴァックスの理論を継承した。彼によれば、集団による想起、伝統の形成、政治的アイデンティティの確立などは、「文化の連続性の構築」として理解される。そして、文化の存立を可能にする基本的な要件として「記憶」を理解する。この観点から見れば、宗教、神話、芸術、文学など共に、歴史学もまた社会が自らの過去の関係を組み合わせる様々な象徴形式の一つとして、想起の文化の領域に位置づけられる。

³²⁶ モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年、93-99頁。

³²⁷ アステリ特・埃尔，冯亚琳《文化的记忆论读本》，北京大学出版社。

アライダ・アスマンの観点によれば、「コミュニケーション的記憶」は我々同世代が共有している記憶であり、時間の流れに従って、新しい記憶も更新されることになる。記憶も媒介の変化と共に「文化的記憶」になる。そこで、各時代の教科書、文献資料のみならず、社会实践の記念物なども、「媒介」として認識される。例えば、遙かな昔に関する慶典・儀式、記念行為などは文化的記憶を具現化する表現として考えられる。³²⁸「文化的記憶」においては、自らに属する一連の語り、図像ないし儀式の表現系統があり、この一連の記号体系を通じて、ある集団のアイデンティティが構築され得る。³²⁹

斎藤公輔は、コミュニケーション的記憶と文化的記憶の比較を行った。我々は、次の表でその二つの概念を理解することができる。³³⁰

	コミュニケーション的記憶	文化的記憶
内容	自伝的枠組みにおける歴史経験	神話的历史、絶対的過去の出来事
形式	日常的、自然な非形式的	セレモニー、祭り
メディア	個人的の経験、自らの見聞	不変的、伝統的なシンボル
時間構成	現代とともに 3-4 世代	神話の現時点、絶対的過去
運び手	非特定、想起共同体の時代の証人	専門家化された伝統

まず、ヤン・アスマンによれば、オーラルヒストリーは「コミュニケーション的記憶」の範疇に属する。「コミュニケーション的記憶」は日常的交流において発生し、内容も特定の集団の歴史経験に限定される。従って、記憶の内容にはある程度の集合性が反映される。ヤン・アスマンの「コミュニケーション的記憶」および文化的記憶の特徴を用いて、戦後同窓会における「コミュニケーション」機能を考察することができる。一

³²⁸ 前掲 25-26 頁。

³²⁹ 黄晓晨：「文化的記憶」，《国外理論動態》，2006 年，第 6 期，61 頁。

³³⁰ 斎藤公輔「集合的記憶概念の批判的考察と今後の展望」『ドイツ文学論考』第 49 号、2007 年、62 頁。

方、その観点に立てば、同窓会刊行物、同窓生回想録に反映された語りを通じて、満洲国で受けた高等教育に対する記憶と認識などを分析できる。

アライダ・アスマンは「想起の文化」に「被害者競争」という概念も導入した。彼女によると、政治的な想起の実践には二つの特徴がある。一つは肯定的な出来事よりも否定的な出来事のほうが明らかに優勢であるが、も一つは加害者を想起するよりも被害者を想起するほうが明らかに優勢である。被害者という概念は戦争の死者を自らの決断で犠牲を捧げるような、能動的な英雄もしくは受動的な殉難者に変える。そこでいう対象は兵士と国民全体であると判断される。戦後 20 年以降、ドイツ人の「自己被害者化」という傾向が存在し、被害者として連続的な歴史が再構成された。この理由についてアライダ・アスマンは、拡大する非ユダヤ人のトランスナショナルな想起の共同体によっても、被害者との共感という形で想起が行われていると判断したが、他方で、新しい被害者のカテゴリーが発見されたという。つまり自分たちが犯した罪の被害者もしくは共感的に認知された被害者である。しかし、被害者との共感と並行して、被害者の役割に特権が与えられたことになるという。

アライダ・アスマンは、苦難の被害者という国民の自己像を伴った政治問題も提出した。苦しみが民族化され、それに伴って、社会の多元化が拒絶される。(特に移民やマイノリティに対して、ある社会で完全な承認と参加を獲得するのは難しくなる。)さらに、快適な道徳的立場に立って、歴史上の犯罪や新しい犯罪のいかなる共同責任も免れられる、防護服として使われる。被害者の語りは、政治的な自己演出の一部でもある(159 頁参考)。西ドイツでは 1945 年以降、「自己被害者化」的な態度が生まれた。これは旧ソビエト圏諸国におけるのと逆の問題であった。ドイツが「被害者」という認識は許さない。この加害者パースペクティブでは、当事者の家族の中でいまだ鮮明に語り継がれてきた思い出を、社会的に承認される形で、共感を持って、第二次世界大戦についてのドイツ人の歴史像に組み込むことはできなかった。その代わりに、これらの思い出は、自己被害者化の一形式として不信の念をもって遠ざけられ、総じて歴史修正主義という嫌疑をかけられた。

アライダ・アスマンの研究によれば、加害者・被害者の位置関係に対する歴史家の認識には、必然的に繰り返し狭隘化が生じる。なぜなら、記憶を構築する場合、肯定的な自己像を維持したいという根本的な欲求が存在するためである。それゆえ、想起のプロセスで作用しているこの排除の欲望を反省的に認識し、相互の承認と交渉によ

る決着という形式に意識的に移行することが重要である。この場合、目的は記憶の枠組みを拡張することであって、置き換えることではない。人々が具体的な調査結果に関心を抱き、さらにまた、人々が、歴史の経験は著しく多様で多義的であるという重要な認識に関心を抱くことが重要である。それは、記憶と歴史が互いに接近していくことにも繋がるのである。

ピエール・ノラの「記憶の場」理論

フランス歴史社会学者ノラ (Pierre Nora) は 1984 年に提出した論文「記憶と歴史の間に」で、アルヴァックスが主張した「記憶」と「歴史」の対照関係について検討した。ノラによれば、「記憶」と「歴史」は語彙の意味を越える。すなわち、記憶は、最終的に歴史へ転化するものであり、この転化は不可逆であると主張した。

ノラの理論では、「記憶」は現在の現象を反映しているが、「歴史」は過去を表す。「歴史」はある程度の普遍性を持っており、誰にも属するが誰にも属しない。一方、「記憶」は、空間、行動、イメージ、オブジェクトなどの具体的な物に根ざしている。記憶は絶対的で純粋であり、歴史は相対性を承認するだけである。アルヴァックスは、特定の集団とその集団の中に共有される記憶の関係を唱える。それを敷衍していえば、終戦後に日系同窓生によって設立された旧満洲日系高等教育機関の戦後同窓会は、主要には日本人同窓生の集団の「満洲記憶」反映している。

同窓会活動、同窓会報・会誌の発行、同窓生名簿の作成、海外訪問など、日本人同窓生の追悼・記念活動は、集団的記憶が具現化する時、「満洲記憶」を再構築すると考えられる。同窓生集団の形成は静的ではない。他の国や地域の同窓生は日系戦後同窓会への参加により、彼らの属する集団は日本の同窓生の集団とは異なると認識し、異なる「満洲記憶」を生み出した。同窓生活動の内容や形態の変化により、「満洲記憶」が継続的に増殖し、または削除される。このプロセスは、同窓会会報と会誌に投稿された他の国や地域の同窓生の寄稿や、日本国外の同窓会(数は少ない)の活動、そして海外同窓会が刊行した回想文集の中に反映される。

一方、同窓会は同窓生の「満洲記憶」が発生する場所であり、「記憶の場」と見なすことができる。「記憶の場」となるのは、まずはすべて「遺物」である。ノラが言及したとおり、例えば美術館、資料館、墓地・所蔵品、祭り、記念日、契約書、会議の記録、記念碑、寺院、協会などの場は、記憶の場になることができる。日系同窓会は同窓生が記念活動を行う場所であり、満洲記憶の場と見なされる。ノラは、記憶の場の誕生とともに

に、自然な記憶はもはや存在しないことを認める。そして、アーカイブを作成し、記念日イベントを維持し、お祝いを行い、葬儀のスピーチを提供し、文書を公証する事などは、記憶の場を維持するために必要であるという意識に基づいていると考えられる。このため、日本同窓生が戦後同窓会を作ろうとする行動は、満洲記憶を置く場所を作って守ろうという意識の現れであると見なされる。しかし他方、この記念意識がなければ、記念すべきものがなくなると満洲記憶もすぐに公式的な歴史によって一掃されてしまう。「記憶の場」が人々の信頼する思い出を守る堡塁であるなら、戦後同窓会は日本人同窓生の「満洲記憶」を守る堡塁である。ノラは、特定の日付や記号を公式的「記憶の場」として指定することができる一方、それらの「記憶の場」は記憶を再構成する源泉として使用できることを指摘した。国民の感情にもとづく本能的な愛着は、人々を形作ったものに対する懐かしさを人々に思い出させる。それとは反対に、歴史的な違和感とは、人々がこれらの遺産を冷静に検査することを要求する。同様に、日本と中国や韓国等との国交回復後、戦後同窓会の会員数は拡大し、韓国と中国の同窓生にとって、戦後同窓会は「満洲記憶」の場所であり、「満洲記憶」が生まれる源泉と認識された。戦後同窓会は、異なる国や地域の同窓生集団に「満洲記憶」を遡らせる一方、改めて「満洲記憶」を生み出す場所をもたらし、他方ではその記憶を再構成する源を提供した。同時に、同窓会という場での接触を通じて感知された歴史的違和感にも注目する必要があるだろう。日本、中国、韓国、台湾などの地域が異なる同窓生たちは、こうした違和感を通じて、「満洲記憶」についてもう一度振り返ってみる必要があると感じたことがわかる。

第一章 同窓会報における満洲記憶

第一節、所属組織別で考察された会報

満洲日系高等教育機関の戦後同窓会が刊行した会報には、各同窓会組織の特徴と満洲記憶が反映されていた。各同窓会の会報は、その団体の規模や形式によって、内容や書式が様々であるが、基本的には総会活動(会長からの挨拶)、同窓会の現状報告、会員からの寄稿(満洲経験や近況など)、連絡先の登載、名簿の更新、教授・先輩・同窓をめぐる思い出、亡くなった人に対する弔意、懇親会活動、海外訪問活動などで構成されていた。

満洲医科大学の同窓会である輔仁会の会報『輔仁』は、年2回のペースで刊行されていた。『輔仁』の主な目的は、満洲医科大学の同窓らの医学分野での交流活動の場を確保することであった。具体的にいうと、同窓の専門領域での大きな成果を報告すること、医療情報を共有することおよび医学交流を目的とする懇親会活動などである。『輔仁』会報によると、日韓、日中国交回復後、日本側からの『訪韓医学団』や『訪中医学団』などの活動が記録されていた。その訪問団は、同窓との旧交をあたため、海外同窓との医療協力を実現することであった。つまり、『輔仁』に見られる日本側同窓の満洲記憶では、戦争責任など歴史上の省察は少なかった。代わりに引き揚げの経験、初代会長・幹事長など重要な上長に対する敬意と回想などが頻繁に記録されていた。しかし、中国方面との連絡が拡大してくると、中国同窓の輔仁会活動への関心も増大した。『輔仁』誌上にも中国に関する寄稿が増え、対中友好のシグナルと判断できる事例もしばしば登場した。

旅順工科大学の同窓会は「興亜技術同志会」と称した。興亜技術同志会は戦前から活動していた組織であり、同志会誌『興亜』が刊行されていた。終戦直後の興亜技術同志会は、同窓生の引き揚げ連絡や同窓生の善後処理の主要機関として機能したが、同窓会誌の刊行にも積極的であった。同志会が最初に着手したのは、名簿の作成である。第1回の同窓会名簿は1947年に作成され、同志会関係者に配れた。その時の主な目的とは、同窓の安否の確認および同窓間の連絡であった。1948年に第1回同窓会総会が開催され、同窓会名簿が増補された。そのころ、興亜技術同志会の同志会誌『同志会会報』も年2回の形で刊行されている。

興亜技術同志会と中国側との連絡は戦後から日中国交回復までの期間にも継続していた。1955年に興亜同志会の会誌名は『興亜』に戻り、1965年までこの誌名を使った。会報は、中国人同窓生の意思を汲んで、1965年に誌名を『旅順』に変更した。旅順工科大学の同窓生は様々な科学技術分野で活躍した。『興亜』および『旅順』では、日本同窓が経営する会社の広告が常に掲載されていた。同窓会会長であった相田秀方は、日本の自動車業界との関係が深かった、同窓会誌は日本同窓のネットワークとして機能し、同窓間の業務上の連携などでも役立った。

ハルピン工業大学の同窓会には総会会報『南崗』があり、各学科による独自の会報も同窓会事務局によって刊行された。まず、ハルピン工大機械科同窓会事務局が刊行した機械科同窓会報は、第1期から第3期までが『機械科ニュース』と命名された

が、第4期から『南崗』と改名した。その他、採鉱・冶金学科や電気学科の同窓会報もそれぞれの学科によって刊行された。事務局の住所から判断すると、機械科同窓会事務局とハルビン工業大学同窓会事務局は同一場所にあったと思われる。ハルビン工業大学の会報は学科に関わらず1980年代以降も発刊され、中国側同窓会との連絡が密接であることなども特徴として指摘できる。

新京工業大学の戦後同窓会誌の特徴は数が多かったことである。新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成五十周年記念誌など同窓会総会の機会に刊行された会誌がある一方で、各学科の支部会誌・会報もあった。例えば応用化学学科化人会会誌『化人』（1977-1997年）、『化人会報』（1984-2003年）、『母校創立60周年校友聯誼會参加訪中団感想文集』、機械学科『機友会 会員通信抄』（1991-1999年）、採鉱三期会会報『杏花』（1994-2004年）などがある。

第二節、時代別で反映された内容

終戦直後から1950年代までの間に満洲日系高等教育機関の同窓会が続々発足し、会誌と会報の刊行も始まった。1950年代から刊行された会報を考察すると、以下の様な内容が反映されていることが分かる。まず1950年代の日本同窓会会報には、先に紹介した旅順工科大学同窓会である興亜技術同志会が刊行した『興亜』がある。当時興亜技術会は主に日本国内で活動していたが、会誌に反映されたのは、各国内の支部からの便りであった。満洲経験に関する思い出はたまに登場するが、同志来往・同志短信など同窓情報が多かった。そして、上述のように、旅順工科大学の同窓会報には、会員が経営している会社に関する広告が数ページにもわたって掲載されている。

建国大学の同窓会報もこの頃創刊された。満洲医科大学四十周年記念誌（1952年）も刊行された。そこでは、校歌から始まって、学校の前身であった南満医学堂の回顧、終戦後の満洲医科大学の後日談、学生の生活史など、日本人学生を主とした語りが盛り込まれた。学生・教職員の近況に関する情報の更新も頻繁に行われた。³³¹

1960年代から1970年代までの会報は量が多い。旅順工科大学同窓会編『旅順』があり、旅順工科大学六十年史編纂委員会編『旅順の日』も刊行された。旅順工科大

³³¹ 輔仁同窓会

学の同窓会報は、満洲時代の思い出を共有し、同窓往来・情報交換の機能も備えていた。一方、同窓生は興亜技術同志会と旅順工科大学同窓会の名の下に、民間交流の形で、日中国交回復前後に訪中活動を行なった。その過程の詳しい内容はすべて『旅順』会報に載せられた。同時期に刊行された同窓会誌としては、満洲医科大学同窓会報『輔仁』がある。さらに、建国大学同窓会編『建大史資料』が刊行された。『建大史資料』には、様々な建国大学関連人物の回想文、講演内容、およびインタビューなどが含まれていたが、本書の刊行は、1980年代に刊行された『建国大学年表』の作成に大きく寄与した。大同学院同窓会の会誌・回想文集もそのころ刊行されている。大同学院史編纂委員会により、『碧空緑野三千里大同学院同窓会』、『大いなる哉、満洲』、『旺なる吾等』、『渺茫としても果てもなし——満洲国大同学院創設五十年』などが編纂された。

1980-1990年代に入ると、日本側の同窓会訪中団の旅行記録が盛んに出版された。海外同窓との連絡が盛んになるとともに、海外同窓に関する記事を載せた会報・会誌が続々刊行された。そのなかには、大同学院同窓会編『友情の架橋・海外同窓の記録——満洲国大同学院創設五十五年記念』（1986年）があり、建国大学在韓同窓会『歡喜嶺』など海外同窓会により刊行された会誌もあった。さらに、日本人同窓生の個人回想録の出版も始まった。例えば、建国大学同窓生である百々和『道芝』、山田昌治『興亡の嵐——建国大学崩壊の手記』などの個人回想録があり、ハルピン学院同窓生小川之夫の『愚直の青春二、一二八日、ハルピン学院——シベリア分校に学んで』などがある。

1990年代に入ると中国側同窓会会誌・会報が刊行されている。その中では、『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』（1997年）（以後『記録』と略）と『回憶偽満建国大学』（1997年）が注目される。『記録』は中国人新京工業大学同窓生の寄稿を編集した回想文集である。『記録』は、もう一つの中国人同窓生回想文集である『回憶偽満新京工業大学』の内容をも参考にして、1997年に日本語に翻訳された。

2000年以降も同窓会報・会誌の刊行は続いたが、同窓生の高齢化が進み、内容は亡くなった同窓に関する弔意表明や在学時期の思い出が中心となった。個人的記憶と語りは続いた。組織別に記念誌が刊行された場合もあった。大同学院同窓会編『物語 大同学院・民族協和の夢にかけた男たち——創立七十周年記念』、建国大学同窓会編『日本での歩み』、旅順工科大学同窓会編『旅順工科大学開学90周年

記念：平和の鐘』などがある。個人的記憶では、建国大学同窓生小林金三『白塔——満洲国建国大学』、百々和『道芝折々の記』、斉木道吉『苦楽人生——回首往時』などの回想録がある。

第二章 日本人同窓生の語りと記憶

第一節、満洲大陸に対する語りと記憶

日本人同窓生の語りは、過ぎた昔の満洲に対して懐かしい感情を満たしながら、満洲国高等教育機関の同窓生としての帰属感とアイデンティティを与えた。

過ぎた昔の満洲における学園生活について、人によって感情が異なる。ハルピン学院の同窓生である小川之夫は、満洲について次のように語っている。「奉天に下車しましたがプラットフォームはものすごい雑踏で満人の放つ悪臭に少なからず(中略)言葉は無論通じません。」³³²小川は、中国人を「満人」と呼び、彼らの衛生管理に対して強い言葉で批判していた。「まして一年に一回か数年に一回位しか風呂に入らない満人が、ありとあらゆる闇の物を売っている所です。」³³³

しかし、彼の回想録では、ハルピン学院および北満に対する態度が一変し、むしろ積極的に評価している。「新京は大変静かな、内地とちっとも変わらない街のようです。第一、駅の近所は満人もいないため、奉天と比べるとずっと清潔です。(中略)ハルピン(中略)は、さほど寒いとも感じませんでした。駅前も木があって一層小ぢんまりとした住み良さそうな所でした。」³³⁴ハルピン学院に対しては、小川は次のように回想していた。「私の想像以上に当学院は家族的なものでした。その綱領にある通り『北方に挺身する国土の養成』ですから真に気持ちの良いもので、他の学校にあるような、上級生対下級生および同学年中でも他級とのいがみ合いは全然ありません。」³³⁵小川は、ハルピン学院の学生としての使命感を持っていた。彼は、ハルピン学院の使命について、1944年に家族に送った手紙で次のように書いていた。「ロシアの現在の状態に飽

³³² 小川之夫『愚直の青春二、一二八日、ハルピン学院——シベリア分校に学んで』、恵雅堂出版、1988年7月7日、28頁。

³³³ 前掲30頁。

³³⁴ 前掲37頁。

³³⁵ 前掲39頁。

きたらぬ、すなわちロシアは今国境を閉ぢ鎖国の状態にあるのですが、それを武力的に打破するか、または平和的に解決するか、(中略)その国策に沿って第一線に立つ人材を養成するのです。国土、志士の養成ですから地味かもしれませんが厳格です。』³³⁶ ハルピン学院の生活の中で、彼は「学院のものは日本国民であると同時に満洲国民であります」³³⁷というアイデンティティを確立した。

ハルピン学院の学生のみならず、満洲国における高等教育機関の日本人同窓生は、ともに軍事訓練、開拓団での見習い、勤労奉仕、学徒出陣など同じ出来事を体験した。それらに関する語りは、戦後の個人回想録・同窓会刊行物では、紙面を賑わしている。軍事訓練については、小川は次のように心理的状态を表していた。「満洲といえば、我大陸政策の基礎的な中心地帯であり、同時に、モスクワ政府の東亜政策遂行の前衛的基礎地帯であって、殺伐の風みなぎり、人類の文化中心地から遠くかけ離れた未開辟地の荒野として忘却の彼方である。(中略)北満の野に我勇士の姿をと仰ぎ、邦人の活躍を眼のあたり観ずる時、我も真に北辺鎮護の任に当らんの念に借り立たれる。」³³⁸ ハルピン学院の学生として、夏休みの時彼は終日グライダー訓練を受けていた。「〔1944年〕6月より向ふ2ヶ月、滑空訓練があります。この訓練と申しますのは、凡そ一年全部と二年、三年の若干名の方が当学院より受けるわけであります。(中略)それとて人が思ふ程苦しくはないと思ひます。」³³⁹

さらに、建国大学の同窓生は戦後の回想録で、1942年に始まった建国大学の現地訓練について次のように語っている。「(前略)さらに『訓練課題』が記され、『帰校と同時に、(一)建国理念が如何なる程度に青年層に浸透しおるや(二)民心を如何にして把握するや、について報告書を提出せしむ』とあった。(中略)朝鮮系の金田光郎はずっとん狂な声をあげた。『なによ、これ。主語がはっきりしとらんし、以て、もって、もってと、何度言えば気がすむんだ。』日本人学生である小原〔広〕は『冬休みは削られるのかな。しかし田舎に入れるのは、いいな。』って、金田は『殉国挺身の熱烈なる指導者として、俺たちが訓練されるのかと思ったら、どうも違うようだ。』『つまりだ、身を挺して国に殉ずる強い使命感を持つような人物を養成せよ、ということなのだ。

³³⁶ 前掲 40 頁。

³³⁷ 前掲と同じ。

³³⁸ 前掲 66 頁。

³³⁹ 前掲 63 頁。

未熟な俺たちに、そんなことできるはずないじゃないか。こっちの方こそ、訓練されたものだ。』」³⁴⁰

開拓団については、建国大学同窓生の回想録では、「開拓団の矛盾」が語られていた。「極端な農村の疲弊、諸政の錯綜、物資の欠乏そして人材の不足。理想と現実とのギャップ[°]に苦悩しつつ建設に携わる陰の人々……第一線の人々……の悲壮にも崇高な現実を目のあたりに見る。」³⁴¹

学徒出陣について、小林は次のように回想した。「〔1943 年〕10 月も半ばを過ぎる頃になると、日系の学徒出陣への覚悟も定待ったためか、騒然とした空気は静まり、大学キャンパスは検挙事件以来しばしの沈然に閉ざされた。反満抗日学生が検挙されたときには、各民族とも事態の収拾を願いながら沈黙した。こんどは各民族はそれぞれ異なった感慨の中にこもった。日系は自分自身の立場を戦場の死と結びつけ、満系ら非日系学生は身边にただならない圧迫を感じとって、誰もが不安を隠せないでいた。」³⁴²彼は、学内における民族学生それぞれの蠢動に対して語っている。一方、ハルピン学院の小川は、回想録の中で、1944 年の「サイパン玉砕」の報に接したときの、戦時中の教育を受けた 18 歳の少年の衝撃と悲憤について述べている。「私達は今二つも三つもの中から一を選ぶという余裕を持っていない。事態は急迫しているのです。盲目的な信頼、盲目的な服従、それ以外になにもないと思います。」³⁴³

第二節、引き揚げの記憶

満洲日系高等教育機関戦後同窓会の刊行物を考察してみると、満洲経験に関する記述、および日本同窓会の何十年にもわたる交流活動の内容と形式が「集団的記憶」の理論に非常によく当てはまる。この範疇に従って、所属組織別の同窓会会報・会誌、回想文集を考察すると、引き揚げの出来事については特に集合的記憶の理論が妥当する。

一部の同窓は日本人の立場で終戦直後に受けた深い精神的・肉体的な苦痛について語っている。例えば「居留民会」、「ソ連軍の暴行」、「開拓団の戦後受難」などである。新京工業

³⁴⁰ 小林金三『白塔——満洲建国大学』、新人物往来社、2002 年、12-14 頁。

³⁴¹ 前掲 156 頁。

³⁴² 前掲 330 頁。

³⁴³ 小川之夫『愚直の青春二、一二八日、ハルピン学院——シベリア分校に学んで』、恵雅堂出版、1988 年 7 月 7 日、81 頁。

大学の同窓会刊行物を考察すると、引揚げについて多く記録されている。「既に私たちの耳にはソ満国境の開拓団では、ソ連の侵攻に抗戦する武器もなく、空襲を受け、戦車に追われ、逃れ切れないと集団自決したり、避難中次々に斃れる人達を断腸の思い出置き去りにしなければならなかったなどなど、痛ましい悲劇が数々伝わっていた。」³⁴⁴

一方、一部の日本人同窓生は戦争に巻き込まれ、軍隊に入隊した。建国大学の卒業生である百々和は、終戦後軍事教官として、中国側の国民党軍に留用され、中国共産党軍と戦った経験があった。中国で抑留生活 12 年間を経て、最後に復員帰国したのが 1956 年のことである。彼は自分の回想録である『道芝』で、その時の出来事について次のように述べている。「軍事教官として中国側に留用されていた私は、こんな歌を歌いながら、麦秋に美しく彩られた山西の黄土地帯を、戦場から戦場へとかけずり廻り、世界の視聴をあつめてたたかわれた国共闘争の渦中に巻き込まれていった。」³⁴⁵彼は、自分を昭和の浦島太郎に譬え、次のような語りを通じて、その過程で感じたことを述べている。「昭和の浦島太郎は抑留生活で人間らしく苦しんだかわりに、二つの『眼』をお土産に持って帰った。一つは、社会主義の現実に対する批判『眼』であり、もう一つは資本主義に対する批判『眼』である。第一の『眼』は、中共軍との戦いの中から、そして又抑留生活における苦悶、敵対、反抗、妥協、理解の過程の中から、各自それぞれの持味を持って掴んだ自分の『眼』である。(後略)」³⁴⁶彼によれば、引き揚げ前の中国での戦争経験は、中国共産党が唱える社会主義の真実を明かした。彼は以下のように語る。「中国における社会主義への現実とは、破壊と殺戮、絶望と狂喜に満ちた真剣にして悲惨な凄まじい過程であり、それを代償として建てられた社会主義の現実とは、天国でも極楽でもなく、矛盾と困難にぶつかっている。(後略)」³⁴⁷

さらに『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌』を見ると、シベリア抑留された同窓生の思い出が収録されている。例えばある同窓生は、日本兵としてソ連に抑留された時の心理状態を次のように述べている。「希望を失い不安におののく日本兵は、今を生きるために徹底して自己中心となるらしく、戦友の食糧や持ち物を盗む、仮病をつかって労役をさぼる、中には前歴や階級を偽称しているような者まで出る始末。自暴自棄に陥って次第に統制が取れなくなり、やがて強制労働が課

³⁴⁴ 野口英三郎（採鉱三期）・「密山からの脱出」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌 北辰高く—青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、270 頁。

³⁴⁵ 百々和『道芝』、三和書房、1983 年、3 頁。（原稿は昭和 33 年（1958 年）『緑樹』六号に載せられた。）

³⁴⁶ 前掲 5 頁。

³⁴⁷ 前掲と同じ。

せられるようになると、（中略）寒さと劣悪な食事に加えて不馴れな労働で体力を失い、就寝中に死亡している者、栄養失調で倒れて病院に送られる者等が出てきた。」³⁴⁸

第三節、思い出、物故者に対する弔意など

日本側の同窓生は、同窓会の運営だけでなく、慰霊祭、寮歌祭、旧満洲を中心とした訪中団、周年記念日などの祝い事や記念活動などを行っていた。満洲記憶に対しては、思い出、亡き人についての弔意などが記載されていた。彼らの語りは、「記憶の場」として、満洲記憶を保護し守る機能を有したことを示している。

上長に対する思い出

日本同窓会の同窓生らは、常に学長または重要な上長に関する思い出を語りながら、学生時代の記憶を同窓会集団で共有している。

新京工業大学の同窓生は戦後同窓会回想文集には、国立満洲工鉱技術員養成所の時代の要人から始め、学長に対する思い出などが紙面に記録されている。例えば、「わが師わが恩」という回想文は国立満洲工鉱技術員養成所初代所長皆川豊治、および新京工業大学と改称した後の初代学長武村清について以下のように語っている。「〔皆川豊治は〕坊主がりでゴマ白、色黒の温厚な紳士であり、二、三回訓話を拝聴した記憶がある。」³⁴⁹「〔武村清は〕満洲技術界の大先輩格の方であり、技術の最高学府新京工業大学にふさわしい学長を迎えたわけである。貴公子然とした風采、対話の妙、温かみが学長室にただよっていた。」³⁵⁰さらに「学長語録」という文章を寄稿した日本人同窓もいた。土木6期の倉迫一孝は新京工業大学二代目学長である長谷川の語録を次のように記している。「その一『愚の骨頂』（中略）昨日の水泳大会で、命懸けで潜水競技に優勝した行為は、無事助かったものの、あのようなことに命を懸けるなど『愚の骨頂である』と言われた。当時戦時下の風潮として、身を挺して勝利を勝ちとることこそ最上の行為とされていたので、大いに誉

³⁴⁸ 星野達夫「敗戦、そしてシベリヤ抑留の日々」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成50周年記念誌 北辰高く－青春の新京時代と追想の日々』1998年12月、261-262頁。

³⁴⁹ 相馬恒雄「わが師わが恩」『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成50周年記念誌 北辰高く－青春の新京時代と追想の日々』1998年12月、94頁。

³⁵⁰ 前掲と同じ。

められるものと全員が思っていたのに、意外な学長の訓話に戸惑いを感じたものだった。（中略）話の内容はともかく、訓話の中に出た『愚の骨頂』という言葉が、その後学生の間で流行語となった。」³⁵¹

満洲医科大学の同窓生や戦後輔仁会の歩みにとって重要な人物についても、会報・会誌でしばしば語られた。満洲医科大学の場合は、輔仁会に大きな奉獻をした伊藤尹について多くの記録が残されている。同窓生の語りには、次のような情緒的な内容が多く見られる。「敗戦により母校を失い、全く着のみ着のままの同窓生が（中略）数多くの後輩たちに嫌な顔一つせず、卒業生に対しては就職の、学生に対しては転入学のそれぞれのお世話をしてくださった事は、同窓生が等しく認め、今日もなお忘れえないものであろう。」³⁵²「戦後混乱期の善後処理は伊藤尹先生の愛校心からスタートしている。学生の引き揚げと学業中途の学生の転入学などの問題について努力した。」³⁵³「戦後の輔仁同窓会は伊藤病院から始まる（中略）満洲よりまた戦地より哀れな姿で日本へと目指して引き上げてきた（中略）満洲医科大学という一つの団体としての大学、同窓会の日本での基地は伊藤病院であった。そしてその中に戦後いち早く設置されたのが満大善後処理事務所であった。」³⁵⁴などなど。

物故者に対する弔意

満洲高等教育機関の戦後同窓会により刊行された会誌では、時期にかかわらず、在学中、抑留中、ないし戦後に亡くなった同窓および上長に対する弔意の寄稿が掲載されている。亡くなった同窓に代わり、物故者の家族が同窓会報に寄稿して事情説明する場合も多い。

同窓会は終戦直後、あるいは在学中に亡くなった学生の日記を編集して出版する仕事も行なった。建国大学の場合、森崎湊の日記を編集した『遺書』および藤井歓一『ひたぶるに真実に：藤井歓一建大日記抄 その他』がある。

³⁵¹ 倉迫一孝、「学長語録」『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌 北辰高く－青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、197-198 頁。

³⁵² 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ(追補)－戦後の輔仁会』（1984 年）34-36 頁。

³⁵³ 前掲の資料と同じ。

³⁵⁴ 熊田正春「戦後輔仁会の功労者伊藤先生」、『柳絮地に舞ふ(追補)－戦後の輔仁会』（1984 年）2-8 頁。

第三章、中国人同窓生の語りと記憶

第一節、反満抗日運動

上述したように、日本人同窓生は、同窓会創設、回想録出版、慰霊祭や弔辞など様々な活動を通じて満洲記憶を保存していた。しかし、中国人同窓生など非日本人同窓生は、自らの同窓会を組織することはなかった。日本における戦後同窓会という「記憶の場」には、日本人学生のための「満洲記憶」が反映されていたと言える。之に対し、中国では、満洲記憶を保存する「記憶の場」は、日本と異なり、満洲経験に関する否定的な語り(反満抗日運動)や、彼らが満洲で行った革命活動に対する回想の中にあったと考えることができる。

その一:抗日グループおよび「北満執委部」事件

抗日グループとは「北満執委部」(中国共産党北満省委員会の抗日救国会チチハル分会)の指導によって設立された抗日グループである。中国戦後同窓会が刊行した『新京工業大学中国校友記事』は、1987年2月28日に黒龍江省委組織部による審査を受け、1987年(第9号)中国共産党黒龍江省委員会組織部の文献資料を参照しつつ、抗日グループについて次のように記録した。

「『北満執委部』は1937年7月、抗日連軍第三路軍軍医で、中国共産党員であった王輝鈞同志が進歩的な大衆と愛国の志ある人々とともに組織した一つの非合法団体だった。成立した後、しばらくして抗日連軍第三路軍と連繫を持つことができた。そして抗日連軍第三路軍の指導と支持のもとに抗日救国活動を展開した。しかし同年11月、「執委部」に所属する各グループは侵略者による組織破壊の攻撃に遭い、多くのメンバーが逮捕され、また主なリーダーは正義のために死んだ。」³⁵⁵「執委部」の設立当初に参加した新京工業大学の学生は唐昆、張世誠、姜国思、韓福慧、薛鴻超の5名であった。新京工業大学の学生読書会の中で、学生らは明確な政党傾向を持っていなかった。しかし、読書会幹部である彼らが共産党の地下組織である「北満執委部」との緊密な連絡があるのは事実であった。当初の状況は『記事』で次のように記述されている。

³⁵⁵ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997年、42—43頁。

「1940年冬には、読書会の活動はすでに盛り上がっていた。熱血に燃える青年はみんな進歩的書物を読むだけでは不満で、ポスターを貼ったり、ビラを撒いたり、思想より以上に有力な実力行動で反満抗日のデモンストレーションを行った。財務職員養成所の常吉らの3名は、満軍の武装程度を掌握しようと「満洲国軍官学校」に入学した。またその頃、高旭征は内山書店から日本の雑誌『改造』を買って帰り、エドガー・斯诺の延安の記事や日本語版の艾思奇的『大衆哲学』などの文章が登載されているのを読んで、共産党が指導する中国革命に憧れを抱き、東北抗日連軍との連絡を持ちたいと考えるようになった。張東人は日本侵略軍の火薬庫を爆破しようと思ったことがあった。唐昆は抗日のために武装闘争がいけないことではないと考えた。1941年初め、1期の卒業生の就職に際し、満洲国治安部は卒業生が必要だと考え、係員を学校に派遣してきた。その時、唐昆は時期が到来したと思い、自分で望んでハルピンの満洲国江上軍司令部工務科建設部に就職し、建築技師に任ぜられた。唐はハルピンについたのち、直ちに満軍の中に反満抗日の組織を発展させ、またハルピン工大の読書会のメンバーであった張德鄰(高芳)、劉長春らとの連絡をとった。」³⁵⁶

ここで明らかなように、「読書会」は、建国大学、または新京工業大学のみに設立された学生組織ではなく、満洲国における高等教育機関で普遍的に存在した学生組織であった。一部の組織は中国共産党の地下情報組織と緊密に連絡していた。『記事』では、新京工業大学学生と他大学の学生との協力について次のように述べている。

「ハルピン工大生の孟双全は史履升など執委部メンバーと度々密接な連絡をとり、10月13日にはハルピンにあった唐昆の家で85グループを結成した。(中略)また姜国思の連絡と史履升の承認を経て、吉林高等師範学校に86グループを形成した。建国大学においても84グループを結成した。姜国思と劉長青は瀋陽に行き、奉天工大の7名でグループを作り、85グループの第二グループを結成しようとした(後略)。」³⁵⁷

1941年中秋節の前後、中国共産党東北抗日聯軍第9支隊政治委員である郭鉄堅とその部隊の全員が犠牲になった。日本軍は戦場を掃蕩する際、郭の書類カバンの中から「北満執委部」の関係文書など発見し、史履升の連絡先など発見した。その後、関東軍により、大規模的な逮捕活動が行われた。それに対して、『記事』は次のように記録している。

³⁵⁶ 前掲第44頁。

³⁵⁷ 前掲と同じ。

「関東軍憲兵司令部はチチハルを中心として昂昂溪、嫩江、白城子、阿爾山憲兵分隊と王爺廟、索倫憲兵分遣隊を集合させ、その他鉄道警備隊 149 人の特別捜査班を組織して 1 ヶ月余に渡り尾行捜査や偵察、考えられる限りの悪辣な手段を使って全員逮捕の準備をした。(中略)長春工大、建国大学、吉林高師の三つのグループはまだ保存されていた。」³⁵⁸

『記事』では、その反満抗日活動に参加した主要メンバーの結末を次のように紹介している。「『北満執委部』事件の鎮圧する中で、日本憲兵隊は合計 114 名を逮捕した。逮捕された彼等は様々な残酷かつ厳しい刑罰や拷問を受け、さんざん痛みつけられて骨とかわばかりに痩せ衰えていた。1942 年 11 月、王耀鈞、史履升、周善恩の 3 名が絞首刑、4 名を無期懲役、12 名を懲役 15 年、14 名を懲役 10 年、2 名を懲役 5 年に、合計 35 名を政府転覆罪で、それぞれ有罪の判決を下した。敵が判決を宣告した後、王耀鈞と史履升はその場で悲憤慷慨し、敵を弾劾する演説を行った。1943 年 3 月、王や史ら 3 名は『日本帝国主義打倒!』『中国共産党万歳!』を高らかに呼んで英雄らしく正義のため命を捧げた。(中略)1942 年 4 月、敵は唐をハルピンの江上軍司令部の軍法会議にかけ、懲役 7 年の判決を下し、ハルピンの監獄に収監したが、1945 年『八一五』に日本が降伏した時出獄した。」³⁵⁹

その二:「12・30」事件

中国側の同窓会刊行物によれば、12・30 事件について次のように記述している。「『9・18』による東北侵略が開始されてから、日本帝国主義による東北支配の 14 年間、彼等は東北抗日聯軍や義勇軍、愛国志士や広範な人民に対し、掃蕩や討伐、肅清などの三光政策で血なまぐさい大殺戮を行った。中でも大規模な弾圧は 30 余回行われ、『12・30』事件はその中の一つに数えられる。」³⁶⁰

『記事』では、『12・30』事件の経緯に関して、次のように記録している。「新京工業大学の張世誠、牛景和、軍官学校学生崔立福(「恢復会」の副会長)や常吉ら、また瀋陽農大³⁶¹学生楊文閣、その他建国大学、法大、医大、奉天工大の学生から専売総局、中央銀

³⁵⁸ 前掲第 45 頁。

³⁵⁹ 前掲 46 頁。

³⁶⁰ 前掲 46 頁。

³⁶¹ 当時奉天農業大学である。

行、放送局、瀋陽税務監督署などの職員まで、組織に吸収してきた。組織の名称を変更する二度の会議の研究で、一度は〔1941 年〕9 月 7 日中央銀行宿舍の石明太の家で開かれた会議では『東北大衆革命党』、また一度は、〔1941 年〕11 月 30 日、四道街新民旅舎で開かれた会議では『鉄血同盟』と改称、組織機構を建設し、共産主義思想の宣伝や反満抗日の活動を進めることなどが決定された。³⁶²日本憲兵はスパイから組織の基本を把握した後、12 月 30 日に、逮捕活動を行った。『記事』はその流れを次のように記録した。「12 月 30 日ハルピン市南崗曲線街 41 号にあるロシア式の鉄道寮で『東北連絡会議』を召集すると称し、各地に代表を派遣するよう通知した。会議は中共代表が講演を行い、当面と長期に渡る敵との闘争について指示をするというものだった。(中略)会議では中共代表を偽った劉玉廷が開会の挨拶を述べ、各地の代表が活動状況を報告、王福作が記録した。会議が終わろうとした時、前もって潜伏していた一群のスパイ達が突然室内に闖入し、会議の参加者全員を逮捕した。同時に日満の特務機関は東北各地の読書会のメンバーや抗日組織の参加者を恣に搜索、逮捕した。その後 1942 年初頭までに愛国青年 355 名が逮捕された。満洲国高等法院は 171 名に判決を下し、その中、馬成龍、劉栄久ら 9 名は死刑、無期懲役は 8 名、有期刑は 128 名、猶予刑は 15 名だった。判決が定まらず仮釈放を受けた者はみんな所轄の住所や派出所毎に厳しく拘束され、ことごとく偵察の対象とされ、外出には常時許可を必要とされ、密かに尾行や監視をされた。」³⁶³

『記事』では、反満抗日運動に参加した青年らについて、次のように語っている。「反満抗日の情熱に溢れる青年達は獄中で各種の残酷な刑罰や非人道的な痛めつけを受け、心身は酷くボロボロにされた。そのため骨と皮だらけに痩せ衰え、息も絶え絶えだった。しかし彼等は凜として節を曲げず、不屈の精神でお互い励ましあいながら獄中闘争を闘い抜いた。」³⁶⁴

建国大学の中国人同窓である聶長林は、逮捕された建国大学中国人学生について次のように語っている。「偽満洲全域の大逮捕は、昨年〔1941 年〕の 12 月 30 日に始まったので、中国学生に対するショックの強さは言語で絶するものがあつた。(中略)その人たち(逮捕された学生ら)は私にとって、いずれも抗日愛国の英雄であつて、偉い人

³⁶² 前掲 47—48 頁。

³⁶³ 前掲 48 頁。

³⁶⁴ 前掲 49 頁。

たちだった。皆が集まると、必ず逮捕された人についての議論が話題の中心となる。
(中略)一言一言に敬愛の感情を込めて、三三五五の集まりで語られた。誰もがこんな
勇敢な、反満抗日活動に身を捧げた同胞がいることを、誇りに思っていた。」³⁶⁵

その三：「読書会」と「給食差別反対闘争」

『記事』によれば、「12・30」事件後、中国人学生は厳密な統制と監視下に置かれ、書籍類はいつも秘密に検査されるなど、「ある種の白色テロの雰囲気」が漂っていた。³⁶⁶
「12・30」事件の教訓に学びながら、実効あるやり方を研究し、明確な組織形態を取らず、同じ道へ志のある気心の知れた友人に頼りながら活動を展開した。太平洋戦争の進展に従って、読書会の活動もようやく活気が生まれてきた。³⁶⁷この時の読書会活動のチャンネルは更に多くなり、ソ連の本や革命歌曲など書籍の種類も増え、また戦況を伝える新聞の切り抜きなどをした。この時の読書会の活動方式について、『記事』の中では次のように記録されている。「書物の伝達の方法は縦線の関係で隠蔽しながら行い、身の安全を保証した。受け渡しする進歩的書籍は必ず表紙のカバーを変え、本の名称も偽名にし、教科書の中に挟んで、講義の最中でも身体から離さずに携帯して日本人の注意を引かぬようにした。読書や本の交換には、人がいないところか郊外で、あるいは学校の外で散歩するときに行った。読書の後はいつも校友達と理解したところを話し合ったり、情勢を論じたり、それぞれ個人の抱負を論じたり、大志を抱く心情を吐露したりしてお互いに励まし合った。」³⁶⁸

一方、他の活動を通じて、中国人学生らが行った地下工作も徐々に復活した。『記事』によれば、「また多数の炭鉱労働者が日本侵略者によって東北や山東省各地から連れてこられ、奴隷と同様に鐵条網のなかに囲い込まれて、完全に人身自由を失っていた。彼等の住まいは茅草の棚の中にあつた。また食べるものはカビの生えた『とろの実うどん』と『条和面』だけで空腹のしのぎ、飢えと寒さに迫られ、牛馬と変わらぬ生活を強いられていた…そして炭鉱での実習では、労働者達に接触し、機会があれば地下工作員に接触した。1945年董作山の場合は、撫順炭鉱での実習時、田宇という、

³⁶⁵ 聶長林『幻の学園・建国大学——中国人学生の証言』、建国大学4期生会誌『楊柳』（別冊）、岩崎広日本語校訂、1997年、66頁。

³⁶⁶ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997年、50頁。

³⁶⁷ 上と同じ。

³⁶⁸ 前掲51頁。

ある中共中央東北局から、炭鉱労働者に働きかけるために派遣されたと自称する人と知り合い、その人からガリ版刷りの「持久戦論」、「新民主主義論」など、毛沢東の著作を貰った。」³⁶⁹

続いて、「給食差別反対闘争」も中国人同窓らが常に回想文集で語っている内容である。新京工業大学における「給食差別反対闘争」について次のように記録されている。「〔1944 年春〕日本人学生がまた主食分割を要求していることを、食堂の炊事員から得てきたニュースで知った。この時期はちょうど 5 期生の卒業実習であるので、分割反対の闘いの責任は 6 期生にかかってきた。董作山と徐福輝が主体となり対策を研究するため、各科の代表を召集した。その会議では全校友が要求と行動を統一して団結し、強く食事分割に反対することを決定した。これに対し迎専八学監は採鉱学科の井上秀雄と董作山に呼びかけ、『経済戦』のために日本学生の米飯を支持するという理由で、中日学生の食事分割と、食卓を分離することを決定した旨通知し、これを強制的に執行した。そこで炊事員は夜明けから朝食作りを始め、日本人学生は米のお粥を、中国人学生はとうもろこしのお粥を炊いた。」³⁷⁰

この様なことがあって 6 期の各科代表は毎晩秘密集会を開き、「食事を取らない」ことを統一した要求として闘い、組織者を明らかにしないことを決定した。このことで示された中国人学生の団結の力は、学校側を脅えさせた。³⁷¹『記事』によれば、その闘争の成果は次のようであった。「引き続き日本人学生が各科毎に各個撃破という小細工を使って、何故主食分割に反対するのかとか、指導者は誰かとか、いちいち細かく質問してきたが、みんなと一致して反対なのだと答えた。この後、董作山は何度が迎専八学監と交渉したが、この関東軍大佐の態度は強硬だった。この頃、日本人学生も白米の配給量が少なく、高粱米の分量の方が多いことに気がつき、別々では日本人学生も腹いっぱい食べられないので主食分割は不賛成だと言い始めた。」³⁷²結局、給食反対闘争は一度に勝利した。

1945 年、9 期生が入学後しばらくして、日本人学生は中国人学生が増えたのを理由に、再び主食分割を要求した。それをきっかけとして、新京工業大学で主食分割が始まった。『記事』ではそれを次の様に記録した。「主食分割の第一食目の時、日本人学

³⁶⁹ 前掲 53 頁。

³⁷⁰ 前掲 60—61 頁。

³⁷¹ 前掲 61 頁。

³⁷² 前掲 61 頁。

生のお祈りが終わった後、食事を始めようとしたまさにその時、食堂にいた中国人校友はその場で抗議の演説を始めた。そして満身を怒りで震わせながら質問をした。

『中国人はなぜ中国人自身で作った白米を食べることができないか?!』と。日本人学生はこの激しい怒りの言葉を聞き、この怒りに満ちた情景を見て急いで食事を食べ終わり、慌てて外に出て行った。この様子は中国人学生側の正義の力を明らかに示すものだった。主食分割後、日本人学生の白米の配給量は減少し、いつもゴロゴロと空腹を抱えている状態だった。この事実は、一般の日本人民こそ日本の軍国主義による侵略政策を遂行してゆく上での被害者であったことを証明していた。³⁷³その中国側の語りを通じて、新京工業大学当局が相対的に慎重的な態度で学生間の対立を解決したことが分かる。一方、『記事』では「日本軍国主義」と「一般の日本人民」を別けて評価することを明らかにしている。中国側同窓は「記憶の再構成」の過程では、それについて鮮明な立場を示していた。つまり、日本軍国主義に反対しているが、日本人同窓に対しては一般民衆として同情的な態度を選択した。

その四：満洲経験を軍国主義教育として考え、否定的な感情を表すこと。

『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』によれば、中国人同窓生には、在学期間に受けた教育は、常に「軍国主義教育」と再構成された。例えば、学生の制服は統一した規格があった。³⁷⁴さらに、中国人学生は寮歌³⁷⁵を通じて、軍国主義教育を実感した。

それ以外でも『記事』は「勤労奉仕」に関する中国人学生の集合的記憶を反映し、さらにそこでは被害者としてのトラウマ的な記憶も反映された。中国側の同窓生はこれを「日本の侵略者」が各大学の大学生を組織して、軍需生産のための「強制労働」と表現している。『記事』には次のような記録がある。「[1943年]6月14日、工大の学生は新京神社に参拝の後、他校の大学生と共に児玉公園に集合、『勤労奉仕』大隊を編成、雨の中で閲兵式が行われました。6月19日には東寧に向けて出発しました。綏芬河一帯は原始森林で、その中の昼夜を分かたず雨を冒して行軍、樹木を伐採し、泥土を除

³⁷³ 前掲 62 頁。

³⁷⁴ 『記事』31 頁によれば、高等術院以前は日本の高等専門学校のスタイルに従ってリボンのついた黒い丸帽と黒色の制服であり、「技術院」とか「大学」の徽章のある帽子をかぶり、各科および学年・クラスの区別を表した。1940 年に工業大学になってからは、学生の制服は国防色のウールのサージ服となり、角帽とカーキ色のラシャの外套に改められた。冬は防寒帽と防寒靴をつけ、教練のときは戦闘帽とゲートルを巻いた。

³⁷⁵ 前掲 31 頁、寮歌は次のようになっている：歴史は遠し、燦として；日出づる国に、溢れる；興亜の使命、果たすべく；新に国を、興したる；我等が抱負、誰か知る。

けて新しく道路を修築しました。(中略)晴れた日でも太陽を見ることができないほど湿気の多い密林地帯で、ブヨが飛び交い激しく人を刺し、熊や猿があたりを駆けたり吠えたりして、恐怖の気持ちでいっぱいでした。このように大変劣悪な環境と困難な苦難に堪えられず、途中で病死するものもありました。7月20日になって、毎日の労働や行軍の疲労で力が尽き、長い道のりを一ヶ月の長きに往復し、この『勤労奉仕』は終わりました。」³⁷⁶その他、『記事』では1943年、1944年の冬休み、夏休みに、学校側は上級生を組織し、撫順、鞍山、瀋陽[当時は奉天]などの地区の鉱工業企業へ「勤労奉仕」と称して、日本軍の軍需品の生産労働や兵舎の建設に強制的に参加させたことを記録していた。

『記事』では中国人学生はそのような軍国主義色が濃厚である学府での学習の動機について、愛国的な要因にまとめた³⁷⁷。さらに、個人で苦学する他に、先輩に依頼して、互助学習し、団結して学習の困難を克服した。

愛国感情に従って、「軍国主義」に抗する「反満抗日」運動が発生するのは自然である。「12・30」の大がかりな逮捕以後、警察や特務は常に学校を訪れて、「思想犯」を捜し、政治的迫害による恐怖心を植え付けようとした。また日本の軍国主義教育では、厳しい階級概念を学生の頭に刻印した。「また街頭で上級生に逢えば必ず敬礼をし、上級生はいつでも下級生をなぐって、罵ってもよかった。」³⁷⁸日本人学生はいつも「満系学生」を侮辱し、叱責してもよかった。中国人学生は常に身の安全と民族の尊厳がおびやかされ、精神上の長期にわたる抑圧を防ぐことができないまま、苦悶と悲憤の状況が続き、毎日のように抗日戦争の一日も早い勝利を待ち望んでいた。そして、彼らの集合的意識は「必ずや団結して共に国難に向かい立ち上がるべきである」³⁷⁹というものであった。

³⁷⁶ 第33頁。

³⁷⁷ 前掲と同じ。

³⁷⁸ 前掲と同じ。

³⁷⁹ 前掲36頁

第二節、中国革命に参加する

中国同窓生の回想文集は政府側の組織により出版された。そこに中国共産党の影響が反映されているのは自然な事実である。従って、彼ら中国人同窓生が在学中に行った「反満抗日運動」および「中国革命に投身」など民族性・革命性が示されている出来事は記憶再構成の重点として強調された。更に、上述の様な立場を明らかにする回想文集は、中華人民共和国が成立して以来の政治環境に適応することであり、中国主流のイデオロギーを示すことを意味する。

『新京工業大学中国校友記事』では、中国同窓が在学中に中国革命運動に参加した過程を記録している。「革命の征途へ向かって」と題しているその部分は、次の様に述べている。「抗日戦争に勝利してから、偉大な解放戦争を経て、社会主義新中国が成立するまでの4年間は、中国社会は天地の覆るような偉大な変革の時代だった。校友達には正にこの偉大な歴史の転換期に遭って、それぞれの環境こそちがっても、様々な機会を通じて革命教育を受け、認識を発展させ、政治方向を明確にして、国家の命運と個人の前途について中国共産党に希望を託し、前後して革命への征途へ踏み出して行った。」³⁸⁰

回想文集によれば、一部の中国人同窓は共産党の地下組織と早くから連絡をとり、革命運動に参加した。『記事』では、新京工業大学の中国人学生は1944年ごろから、中共中央の新京における地下組織³⁸¹に参加した。その時、中国人学生の主な仕事は、満洲国の軍事や交通等の情報を収集することであった。更に新京の軍政機関の地図等を作成する仕事もあった。³⁸² 1944年に卒業したある中国人同窓は、卒業後、同年の冬に満洲鉱山株式会社設計室で仕事をしていたが、新京の中共中央地下組織の責任者と連絡した。1945年8月15日の前夜、共産党地下組織の責任者の意を受けて、共産党の指導する東北工人連盟の総務課長になり、労働運動を組織したり、工場設備を防衛したり、合わせて東北地方の金属鉱山を防衛する計画や、地質の完全な資料を整備して、東北有色金属管理局に渡った。そして、中国共産党は1945年にすでに東北地方の金属鉱山の関連資料を把握していた。³⁸³

³⁸⁰ 前掲 62 頁。

³⁸¹ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』によれば、「東北救亡総会」など地下組織があった。

³⁸² 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、62-63 頁。

³⁸³ 新京工業大学同窓生張富民の個人経歴。前掲 63 頁。

中国側の回想録によれば、終戦前後に後で中国革命に参加した中国人学生は多かった。ある新京工業大学の中国人学生は、1945 年、北平の地下党組織の紹介で、太行根拠地に行き、革命に参加、抗日大学第六分校で 1 年余り勉強し、のちに晋冀鲁豫辺区の工業庁で仕事に就いた。³⁸⁴ある学生は、1946 年 7 月、東北民主聯軍に従軍していたが、新京を撤退して間もなく、中共中央東北局社会部の人員を通して、共産党員の指導のもとで、国民党の政治、軍事の情報を収集する仕事を行った。³⁸⁵

さらに、新京工業大学では 1946 年当初、最初の中国人同窓会である「技友会」が設立された。その他、革命活動に参加した同窓、および卒業前の同窓らのために長春工大補習学校を成立させた。³⁸⁶『記事』では、その互助活動に関して次の様に述べている。「日本敗戦後、卒業できなかった校友達は(中略)正式の大学開校を待っていることができず、いち早く補習課程を組織することを要求し、学業を荒廃から立て直そうとするものだった。この考え方は丁明新、趙恩棠ら大先輩の力強い支持を得て、丁明新の指導の下に、趙同、姜申たちは具体的な準備作業にとりかかった。工大校舎はその頃、ソ連軍に占領されていたので、差し当たり建物の問題の解決をすることが必要だった。当時、建国大学 1 期生の佟鈞凱(趙洪³⁸⁷)は『12・30』事件で逮捕され、『八・一五』後に出獄してから、吉林大学にあった元日本の建築会社『竹中工務店』の跡に、『東北青年会』を設立していた。そこに未使用の空室があるのを知って、汪匯海と王文萃(王韜)は佟鈞凱と借室の相談をしたら、佟はあっさり応じてくれた。建物の問題が解決した後、大事なことは講師をお願いすることだったが、資金としては無一文で、講義が義務ということでは、唯々大先輩達の援助を求めるしか無かった。尊敬する先輩達は気高い愛国熱情と後輩達の切々たる希望に応えるため、一種の使命感と責任感を持って自ら進んで授業を受け持ち、そのうち自分に余分なお金はないのに気前よくお金も出して、校友達の生活困難の解決に力を貸したりした。その頃の工大生の中で授業を受け持った校友は、丁明新(物理)、高旭征、賈乃廷(数学)、高向適、趙恩棠(力学)、孫吉山(化学)等で、外から招いた講師としては王世庸(英文)、王琳(現代物理)の他、ロシア語の講師もいた。」³⁸⁸

³⁸⁴ 新京工業大学同窓生韓永純の個人経歴。前掲 63 頁。

³⁸⁵ 新京工業大学同窓生高非の個人経歴。前掲 63 頁。

³⁸⁶ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、64-67 頁。

³⁸⁷ 建国大学 1 期生。在学中すでに中国革命に参加した。建国大学系回想文集に回想録が収録されている。

³⁸⁸ 前掲 66 頁。

1946 年国民党政府は長春において長春大学など大学を建設することを計画した。一方、中国共産党は、終戦直後、長春における国民党により建設した大学を中心として革命活動を行なった。その時、元建国大学および元新京工業大学など大学の同窓生は、革命の主力になった。国民政府により建設された長春大学などでは、教師には留用された日本人教授が多くて、学生は満洲国時代の各大学の在学生在が主体で、1946 年 12 月 27 日に正式開校し、1947 年 7 月 5 日第一回の卒業生を出した。³⁸⁹詳しい内容は『記事』で、次の様に記録されている。「(前略)化学工学系を例にとれば長春、ハルピンおよび奉天工大の応用化学科学生と吉林師道大学の化学系学生だった。学制は 4 年制で、長春工大の 6 期生は 4 年級に、7 期生は 3 年級に、8 期生は 2 年級に、9 期生は 1 年級に編入された。他の大学も同じ様なやり方で、期毎に各学年に編入した。工大の校友で長春大学に進学し、学習を終えた者は約 100 名余りいた。」³⁹⁰

その過程について、『記事』では次の様に記録されている。「中共中央東北局都市工作部は、許慎、孫亜明、趙洪(佟鈞凱)、呂天を前後して派遣して長春工業大学の学生運動の非合法活動を指導した。その時、軍統少将である長春大学訓導長張煥竜と国民当局の特務は学生運動を破壊するつもりだった。その時、学生と彼らは、激しい闘争を展開した。その時、孫亜明は張の中学時代の先生であった関係を利用して、1947 年 7 月、法学院経済学部教授を兼任しながら、1948 年 2 月には長春大学総務部長に就任。その合法的な地位を利用して、敵との闘争を有利に指導した。」³⁹¹ここで注意すべきことは、孫亜明等の国民党に要職に任じていた人、または国民党当局の信任を得た専門家らは、二重の身分を持っていたことである。彼らのもう一つの身分は中国共産党の地下黨員であった。彼らは表では勤務を続けながら、実際には中国革命を指導していたのである。『記事』によれば、彼らの様な共産党地下黨員の支持を得て、長春大学の学生は以下の様な運動を行なった。

その一：「資格審査」反対運動。

「1946 年春のこと、一部の〔元新京〕工〔業〕大〔学〕の校友は瀋陽東北臨時大学で行われていることを聞いて、瀋陽大学、中学生らの『五・四』運動記念青年デーに参加、国民党の腐敗に反対するデモにも参加した。〔中略〕長春大学が設立されたとい

³⁸⁹ 前掲 69 頁。

³⁹⁰ 前掲と同じ。

³⁹¹ 前掲と同じ。

うニュースを知ってから東北大学学生連盟は工大の校友が参加する先遣隊を長春へ行かせた。孫亜明の支持の下で、工大校舎を基地とし、校友たちを結集、食事や宿舍の世話をし、自発的に立て直す準備活動を始めた。1946年9月18日、長春大学の学生は中共の非合法活動の指揮のもとで、『資格審査』の闘いに対する国民党教育機関接收高官に反対して、『資格審査反対』のスローガンを貼ったり、壁新聞を書いたりして、闘いを盛りあげた。(中略)張煥竜は(中略)新一軍に連絡をとって学生を鎮圧しようとした。(中略)学連の隊列は負傷者や死者が出て人員が減り(中略)、翌日、長春大学学生連盟は全校学生大会を召集、学校側に対して嚴重抗議するとともに、一般の人々にもビラを撒き、学校側が学生の合理的要求を無視し、軍隊と結託して学生に暴行を加えたことを暴露した。(中略)〔結局、〕学校側は学生の要求を受け入れ、反『審査』闘争は勝利を得ることができた。』³⁹²

その二：「学連組」にたいする闘争。

「1948年1月初め、国民党は長春大学への弾圧が強めるため、長春大学内の国民党や三民主義青年団、軍統(軍事委員会中執委調査統計局)、中統(国民党中央執行委員会調査統計局)³⁹³、政治工作隊などのリーダーを寄せ集め、「学連組」という一つの学生組織をデッチ上げた。(中略)「学連組」の主な任務は、進歩的学生の活動を偵察し、学生運動を鎮圧することであった。その偵察の内容は8項目があった。³⁹⁴校友会の劉賡武、劉之中らは、1948年4月18日の夜9時頃、国民党特務が教授を殴打暴行した大字報を張り出した。二人は夜中に監視に当たっていたスパイに発見され、逮捕された。(中略)劉賡武は身体が弱かったため、1948年6月30日の午前7時、拷問の末、遂に犠牲となった。劉之中の足は刑罰のために一生治らない障害が残った。解放後、劉賡武は中国共産党長春市人民政府から「革命烈士」に列せられた。³⁹⁵

その三：長春包囲段階での情報活動および解放区へ転移。

「1948年6月末、長春包囲は最後の段階に入り、食糧を絶たれた国民党軍は市内で縮こまっていた。国民党教育部は数台の飛行機で長春大学の教授や学生を南京へ転校させる決定をした。共産党は国民党の転校計画を粉碎することを決定し、広範な教師、学

³⁹² 前掲 69-70 頁。

³⁹³ いずれも国民党政府の特務組織である。

³⁹⁴ 『記事』の第 71 頁による：「学生の中における中共非合法メンバーの活動、国民党を欺く行為、マルクス・レーニン主義の書物の発見、大字報やスローガンの撮影、無線局の探知、解放区の宣伝、私蔵の武器、学園スト、授業サボタージュの組織、デモ行進などの偵察だった。」

³⁹⁵ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、71—72 頁。

生に当局の陰謀を暴露し、転校反対の闘争を進めた。同時に、孫亜明は総務長と『転校委員会主任委員』という名義で、膨大な転校予算を計上させ、教育部に無理矢理に認めさせた。(中略)当時、一部校友は、地下工作グループに参加し、各大学における敵や、警備司令部の情報収集の責任をもち、味方の包囲部隊に情報を提供していた。³⁹⁶また同時に、転校反対の闘争にも加えて、秘密宣伝を展開、少なからぬ同窓生を長春に留め、解放区へ逃げ出させた。」³⁹⁷

その他、一部の新京工業大学の中国人学生は、共産党が経営した長春学院に参加した。彼らは、中国共産党の影響を受け、国民党に対する工作に参加した。³⁹⁸ある人は、人民解放軍に入隊して、国民党軍隊と戦った。³⁹⁹上述の様に、新京工業大学の中国人学生は、戦後共産党との密接な連絡があったのは事実である。彼らは共産党に入り、中共当局の政治的立場を選択した。『記事』の記録によれば、長春学院の中心任務は以下の様であった。「(前略)マルクス主義と毛沢東思想、および共産党の方針や政策を学習することを通して、革命運動に参加した知識分子の中から幹部を養成し、長春を解放するための組織を準備することだった。」⁴⁰⁰

当時の主要な学習内容は時事政策で、毛沢東思想を学び、土地政策、商工業政策、知識分子政策などについて研究した。具体的には、次の様であった。「自分たちが手足を動かして校舎の修繕をしたり、工具を製造したり、食事を作ったり、野菜を作ったりして学習と生活を保証した。生活は苦しかったけど、学習精神は旺盛で、早朝はジョギングや体操、放課後はバレーボールや歌、ヤンコー踊り、バスケットボールなどして大変活発だった。学生が演出した『群猴』、『王家大院』、『血涙仇』などの演劇は九台の人々の好評を得て、革命闘争を励ますまたことない教育宣伝の材料になった。」⁴⁰¹

³⁹⁶ 『記事』74 頁によれば、国民党は長春を固守するため、都市防衛委員会を組織して、トーチカまで作らせようと、長春大学の教授をその委員に任命した。教授の紹介で、一部の新京工業大学の同窓生らは工事監督員として補充された。トーチカの補修が終わるのをまって、ある同窓が都市防衛工事の設計図の中からトーチカの位置図を隠れ持ち出し、組織を通して九台区の共産党長春工作委员会に送ri届けた。

³⁹⁷ 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、72-73 頁。

³⁹⁸ 前掲 74～76 頁。

³⁹⁹ 前掲 76～78 頁。

⁴⁰⁰ 前掲 75 頁。

⁴⁰¹ 前掲 76 頁。

第三節、新中国建設への貢献

解放初期においては、新京工業大学の中国人同窓は広範な職員や労働者とともに工場の回復を成し遂げ、鉱山の建設と生産を発展させる任務を果たした。中国共産党政府の第一次五ヶ年計画(1953-1957年)が始まって、中国人同窓は少なからず、156項目の重点軍需産業を含む重点産業の大型、中型の新しい建設や、規模を拡張する建設に進んで参加し、大いに力を発揮して、貢献した。『新京工業大学中国校友記事』では次の様に、中国人同窓生による貢献を述べている。「例えば、新中国の国産第一号の戦車の内燃機関、第一号の飛行機のタイヤ、第一号の蒸気機関車やディーゼル機関車、第一号の自ら設計施工した鉱坑、第一号の放送専用のテープレコーダーやビデオ撮影機、第一号のアルミニウム工場、第一号の自動高射砲生産工場、第一号の魚雷工場、第一号の光学機器の工場などの建設から、ある何名かの同志の高度の科学技術の領域等まで、これらは皆校友達の心血の結晶と言うことができた。」⁴⁰²

また中国における大型の企業の増設や新設、全国の鉄道網、東北の電力網、道路網と水利工事、北京および東北の各大都市、中都市の建設、科学研究や設計の事務所から国務院に関係のある各省や委員会、あらゆる会社企業の技術行政工作など、中国人同窓生の業績と奉獻は至る所に残されていた。『記事』によれば、新京工業大学の中国人同窓は、中華人民共和国が成立した後、以下の様な分野で活躍していた。

その一：抗米援朝（朝鮮戦争）と外国支援活動

『記事』では、抗米援朝と外国支援活動に対して次の様に記録している。「中国共産党の第二次戦役〔朝鮮戦争〕が始まってから、中国人民志願軍に参加した新京工業大学の中国人同窓生は、後方勤務の道路建設総隊にあって、制空権の失われた状況下でも、志願軍の武器輸送線を確保し、言葉に尽くせない困難な闘いを進めた。」⁴⁰³

外国支援の活動面では、5名の中国人同窓生がベトナム支援に参加したことや、2名の同窓生がタンザニアの鉄道建設の援助に参加したことが知られている。⁴⁰⁴『記事』には、詳しい内容が記録されている。「〔新京工業大学の中国人同窓〕（前略）ベトナム民主共和国政府から公式に発行された賞状と記念メダルを受けた。」⁴⁰⁵ある同

⁴⁰² 前掲 80 頁。

⁴⁰³ 前掲 82-83 頁。

⁴⁰⁴ 前掲 89 頁。

⁴⁰⁵ 前掲と同じ。

窓は 1965 年から 1968 年までベトナムの道路建設の支援に赴き、ベトナム援助事業指揮部の指導的地位にあった第 303 橋梁隊の隊長に任ぜられた。⁴⁰⁶さらに、アフリカで援助活動を行なった新京工業大学中国人同窓もいた。『記事』には彼らの活動を簡単に記録している。「〔新京工業大学中国人同窓は〕（前略）第三鉄道工事局の業務に従事していた期間、タンザニア鉄道第一機械建築隊の技師長となり、2 年以上の活動を続けた。〔もう一人は〕工務専門家としてタンザニア鉄道で 2 年間の建設の援助をした。」⁴⁰⁷

その二：軍需工業分野での活動

新京工業大学の中国人同窓は、抗日戦争勝利ののち、鉱山や企業の防衛に起ち上がり、生産の回復に努めながら、中国共産党の内戦を支援した。中華人民共和国建国後の第一次五ヶ年計画が始まるや、直ちに老廃した鉱山の改造に取り掛かり、あるいは新しい鉱山の建設に入って、石炭鉱業の発展計画や、設計の実地調査、施工の管理、技術革新や生産、建設の任務などの方面で重要な貢献をした。⁴⁰⁸冶金系統の同窓生らは、建国後、鋼鉄業界で活躍していた。彼らは冶金省、中国有色金属工業総公司など国営鋼鉄会社、全国各地の製鉄工場、および冶金建築科学研究院など機関・局などで正副技師長、主任技師、院長、支配人などの職務に就いた。同窓生らは冶金に関する地下資源の調査や設計を行い、鉱山や工場の建設、科学技術の進歩などの面で活躍した。⁴⁰⁹さらに、中国同窓は、中華人民共和国の電力、郵便、電話、テレビ放送、機械、化学工業、石油化学、軽工業など分野で様々な奉獻をやってきた。⁴¹⁰

軍需工業および政府部門で勤務した中国同窓生韓維範⁴¹¹は、建国以降、中華人民共和国に大きな奉獻をした。『記事』は次の様に記録している。「韓維範は兵器工業省北方工業公司高級技師であった。第二機械部第一局に在任中、第 127 工場内の熱処理職場の深基礎の施工に際し、初めてウェルポイント工法による地下水位の引き下げ技術を採用し、キーポイントとなる技術問題を解決した。省や局の奨励を受け 1956 年に国防工業関係の全国先進生産者代表大会に出席、毛沢東主席の接見を受けた。156 項目

⁴⁰⁶ 前掲 89-90 頁。

⁴⁰⁷ 前掲 90 頁。

⁴⁰⁸ 前掲 90-95 頁。

⁴⁰⁹ 前掲 95-99 頁。

⁴¹⁰ 前掲 99-141 頁。

⁴¹¹ 本論文の筆者（韓美怡）の祖父の長兄にあたる。新京工業大学卒業、兵器工業省北方工業公司高級技師であった。

の国防産業の工事の中でいくつかの、整理されていない資料や設計、工場敷地の選択、施行から竣工までの検査、交付から使用までの全過程にわたる組織仕事を進行させた。後に第三機械省第五局の基本建設処副処長、第五機械部計画司長期計画處處長として勤務、兵器工業の長期計画から「三線建設」計画至るまで責任を負い、また四川、貴州の山の地方を奔走し、工場敷地の選択や計画的な建設の仕事を進めた。この後第五機械省外事局(後に北方工業公司と改称)に転出、大連から海南島に至る8ヶ所の海沿いの川口や海岸に分公司の建設の責任を持ってやり、40万平方メートル余りの基幹建設工事を完成した。彼は長期の国防工業の建設の中で、度々の省、局、公司の先進工作者の評定を受けている。」⁴¹²

『新京工業大学中国校友記事』によれば、中華人民共和国の建国後、彼らは大きな社会上の成功を勝ち取った。要約すると、高級技術職と称される同窓は212名であり、そのうち教授クラスの高級技師は75名、高級技師は102名、教授13名、助教授12名、研究員4名、副研究員1名、高級経済師3名、編集責任者2名、さらに各級学会の理事に選ばれた者80名がいた。また全国的な学会理事は30名で、そのうち副理事長、副秘書長、常務理事8名が任命され、その中で専門委員会に所属する正副主任委員は6名であった。省市クラスの学会理事は50名で、そのうち正副理事長、主任委員、会長などに就任した人は34名いた。また国家科学委員会の専門委員として2名が招聘されている。⁴¹³中国人同窓らは各級の人民代表大会委員に26名が選出されたことがあるが、そのうち全国人大代表3名、省市の人大代表23名、この中では省市人大常任委員の正副主任3名、常任委員2名、人大都市建設委員会委員、及び副主任として3名が就任した。省市の政治協商会議委員に選出された者は22名、その中で政協副主席に主任した人は4名、常任委員長は7であった。⁴¹⁴

⁴¹² 前掲 142—143 頁。

⁴¹³ 前掲 81 頁。

⁴¹⁴ 前掲 81—82 頁。

第四章、他の出自の同窓生の語りと記憶

第一節、台湾同窓生の語りと記憶：

李水清は台湾出身の建国大学第1期生であった。彼は自らにより『東北八年回顧録』と題した回想録を執筆した。建国大学の日本人同窓生はその回想録を翻訳し、建国大学同窓会が出版した。そこで李水清は「在満期間に受けた特に深い印象と経験」について、在満の第一年より、逐年回顧していた。李は、当時の満洲における出来事について、次の様に語っている。

その一：民族問題について

李水清は日本の植民地である台湾出身の学生であるが、自らは漢民族としての意識が高いと自己認識していた。李の回想録によれば、彼は建国大学入学以降、満洲国における様々な機関で台湾出自の学者および先輩と会って話すことがあった。彼によれば、その時の在満台湾人は一般的に次のように自分の境遇を考えている。「日本植民地の台湾島内の台湾同胞は、能力の大小に関わらず、皆抑圧されて頭を上げられない。しかし、若し海外に出て、一つ一つ潜在している力を発揮できる場所を得れば、頭角を現すことができる。しかも皆団結し、相互に助け合える。」⁴¹⁵しかし、彼は日本国籍を持つ民族であると自己認識していた。「皆日本国籍であるが、漢民族としての意識は非常に高いと自認している。」⁴¹⁶

建国大学または満洲領内における民族協和について、李は次のように自分の観点を述べている。「当時の満洲では、漢民族の問題は同時に日本民族の問題であるとして、各民族は互いの立場から相手方を理解し、相手方の身になって考える。たとい常時激烈な討論を交わしても、互いに尊重敬愛の念を忘れず、実際この様にして国家社会の大問題を、20歳に満たぬ青年達がどの様にして答えを出したか。各民族の同級生は皆我々自身の肩に時代の重荷を既に背負っていることを共通の認識していた。(中略)我々は実地調査に満洲の村落を訪ね、漢民族の堅忍不拔の精神と旺盛な生命力を体感した。(中略)我々に民族奮闘の啓示を与えてくれた」⁴¹⁷。しかし、李は、建国大学および満洲国における民族問題の鍵は、日本人の態度であると次のように語っている。「問題

⁴¹⁵ 李水清『東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007年、18頁。

⁴¹⁶ 前掲と同じ。

⁴¹⁷ 前掲21-22頁。

の鍵は民族協和が本物か偽物かであり、特に日本人が依然として統治者の姿勢を以って他の民族に相対しているか、或は当地が日本植民地であるとして、一切日本の国益を優先しているかである。若しこの様であれば、建国の理念とは甚だしくかけ離れている。建国大学入学以来既に二年数ヶ月を経て⁴¹⁸、校内では切実に民族協和と新国家建設を实践したいと願い、誠意は確実にあるが、建国大学以外の一般社会ではこの様に行かない。しかも七七事変後戦争が更に拡大し、中日両民族の祖国が生死の戦いをしている最中に、どうして心平らかに民族協和を实践できようか。」⁴¹⁹

その二：戦争についての語りと記憶

台北帝国大学の中井淳教授は、1939 年夏に建国大学を訪れ、全校学生⁴²⁰と各塾で座談会を開き、日本農民、台湾農民および満洲農民の実情について討論した。李水清は 1939 年冬休みを利用して台湾に帰った時、途中広州で暫く滞在し、中井教授と広州市内各地を参観した。李はその時の広州地区について、中井教授と意見を交換した。李によれば、「戦乱に臨んで最も不運なのは知識分子で、書物を読めず、仕事はできず、仕方なく街の路上で古書や書画を商うほかなくなってしまう。」⁴²¹中井教授は彼に広州参観後の感想を聞いたが、李は、なぜ広州では南京政府の青天白日旗と異なる五色旗をあげるのかと訪ねた。中井教授の答えは李に最も深い印象を与えた。彼の回想によれば、その時中井教授は日本国内の情勢に絡めて次の様に述べた。「全国民の意思ではない戦争を始めても、到る所で意見が統一できず、例えば興亜院の意見が軍に必ずしも受け入れられず、軍方の意見も陸軍、海軍両方が一致するとは限らない。こちらが提議してもあちらが否定するといった具合で、始終共通の意識が持たず」⁴²²。

李水清は、その経験を得た 50 余年後、自分の回想録で次の様に戦争について語っている。「1931 年九一八事件発生の際は、日本の中央と関東軍の間では意見の相違があったけれども、軍部としてはまあまあ意向が一致しており、それに国民の相当多数の支持を得ていた。七七事変発生の際は、一般民衆は戦争目的が何であるかも知らず、軍の内部でも意見は一致していなかった。例えば、時の参謀本部作戦部長であった石原莞爾は部隊増派に反対し、極力戦線の拡大を防止しようとした。このため彼は参謀本部

⁴¹⁸ 1939 年頃の感想。その時李は二年生である。

⁴¹⁹ 李水清『東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007 年、27 頁。

⁴²⁰ 当時 1 期生、2 期生のみで、二、三百人しかいなかった。

⁴²¹ 李水清『東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007 年、23 頁。

⁴²² 前掲と同じ。

から関東軍参謀長東條英機の下で参謀副長に転任させられた。その後対中国の用兵はすべて出師無名の不義の戦いとなり、戦えば戦うほど深みに嵌り、その間幾度となく挽回しようとしたが、遂に和平の願望を達成することができなかった」。⁴²³

その三:上長に対する語りと記憶。

李水清は1940年冬休みの時に辻政信の家を訪問し、辻と直接的な交流があった。彼は、辻政信を建国大学の創立者として認め、大いに尊敬した。回想録で、李は辻政信について次のように語っていた。「彼は自分の戦場の経験談を語り、人間形成の原則等について語った。(中略)私が〔辻政信の宅である〕日本式家屋の玄関で別れを告げた時、彼は私が雨着を先に着るようとしきりに勧められた。私は彼には済ませねばならぬ用事があることを知っており、彼の時間を無駄に取らせてはならないと思い、言われるままに雨着をきちんと着て、玄関を踏み出し、玄関をきちんと閉めた。私は乗ってきた自転車の鍵を開けようとしたが、付近から明かりが見えず、数分模索していた。突然門が開いて先生が様子を見に出てきた。私は別れを告げ門も閉めたのであるから、先生は用事に戻られたことと思っていた。図らずも彼はまだずっと玄関に立って私が離れて行くのを待っていたのである」⁴²⁴。

その様子を見て、李は次のように辻政信の性格について判断した。「先生が非常に勇猛な軍人であると人々は皆信じているが、この様に心配りの行き届いた一面を持っていることを知らない。勇猛と細心は表裏一体の者で、勇敢な人ほど細心であり、細心な人ほど危険に臨んで乱れぬ勇気を必ず備えているものであるかもしれない。」⁴²⁵

李らに講義した岩間徳也教授⁴²⁶は、「夜間我々に『老子』を講読しに来て下さるが、この先生はまず『小学』(文字学)を講義し、後に続けて『老子』を講義された。当時老教授は既に70数歳になる高齢で、又厳冬の季節では気温が零下二十数度になるが、老教授は苦勞も辞せず、遠路はるばる来校され授業してくださった」。⁴²⁷李によれば、その時、彼ら若い青年たちは、岩間教授の教える中国伝統文化を深く理解することが

⁴²³ 前掲24頁。

⁴²⁴ 前掲29頁。

⁴²⁵ 前掲と同じ。

⁴²⁶ 東亜同文書院卒、金州南金書院院長、金州市民会・王道所員維持会各顧問、南金農園主。金州聖人と讃えられた。外務省奉職後、1904年渡満し、南金書院民立小学校を創立。1943年7月建国大学辞任。

⁴²⁷ 李水清『東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007年、11頁。

できた。彼は次のように述べている。「当時『師』と『弟子』の求学の気風が非常に旺盛であった」。⁴²⁸

台湾人同窓生である李水清の回想録は建国大学の戦後日本同窓会の協力を得て出版されたが、「刊行のことば」では、その回想録の由来に対して説明している。「二〇〇六年に至り東大名誉教授小島晋治先生から建国大学同窓田山実君に、台湾人が満洲で活動した足跡を調査しているグループがあることを知らされた。小生〔村上和夫〕の同期李水清君にあたったところ、台湾中央研究院近代史研究所口述歴史組が活動しており、研究プランを作成し、1994年5月李水清君宅にも訪問して数時間に亘り討論しつつ録音した。その結果を彼に送ってきたが、その意図する点が李君の話した事実とちがひ、且つ満洲国を理解することが困難であるかに見えた。そこで李君は李家の私家本を執筆し子孫に残すことにした。これが『東北八年回顧録』である」。⁴²⁹ 上述のように、李の回想録の刊行経緯は、彼の満洲記憶の再構成の流れを反映している。日本人教授の調査グループが満洲記憶を研究するために口述史研究を行っていたことが一つの記憶の場として認められる。李水清自らの回想録も無論個人に属する記憶の場である。しかしながら、なぜ「事実と違う」という判断が建国大学戦後日本同窓会の幹部により、十余年後の時点で出されたのか。さらに、出来事を経験した人の回想録と歴史研究者が行うオーラルヒストリーの記述両方がある場合、どちらか誠実に出来事を反映するのだろうか。または、どちらも記憶の再構成する過程の一環として認められるのだろうか。こうした問題は今後の研究課題としたい。

第二節、韓国同窓生の語りと記憶

建国大学に入学した朝鮮人学生は約91人で、全体の学生数の約7%を占めた。朝鮮人の学生が建国大学を志望する最大の理由は、授業料が無料で、塾の生活をするため、生活費がほとんどかからないという点、また卒業と同時に満洲国の高級官僚に保証される特典が付与されたからであった。建国大学の学科教育は大きく精神訓練と各種の訓練、語学教育、一般科目教育の三つの部分に分かれていた。朝鮮人学生は、精神訓練と様々な訓練教育、そして語学教育について高い満足度を示した

⁴²⁸ 前掲と同じ。

⁴²⁹ 村上和夫、建国大学1期、「刊行のことば」、東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007年、3頁。

が、他方一般的な科目の教育は配当時間が少なく専門的な教育を受けられなかったという意見が多かった。終戦後、韓国軍創設に貢献した学生ほど建国大学の軍事訓練、武道訓練、精神訓練と塾生活を高く評価した。

戦後の韓国では、建国大学の同窓会が成立した。建国大学の在韓同窓会が出版した回想文集では、朝鮮人⁴³⁰学生の満洲記憶について、以下のような幾つかの語りが記録されている。

その一：満洲大陸に対する印象

建国大学の韓国同窓会の刊行文集・同窓回想録には、彼らが戦時期に母国を離れて満洲大陸で学生生活を送ることに対する憧れ、および異国での暮らしぶりと故郷への郷愁などが主要な内容として述べられている。

朝鮮人学生一期生安光鎬⁴³¹は、満洲建国大学に入学した時の自分の考えについて次のように述べている。「自分の方向や座標すら探せない青年学徒の胸には、それは朦朧とした夢というか、いわゆる青雲の志を呼び起こされて、いつの間にか大陸の畑に稲を植えるような刺激だったというべきだろう。」⁴³²彼の「民族協和」に対する態度は、上述した台湾人学生李水清とやや異なっている。安によれば、「支給された制服はそれなりに素晴らしく見えたが、防寒帽をかぶり、防寒靴を履くと、それは当時、満洲の各地に横行していた馬占山や張学良の一党、馬賊の若い頭目を彷彿させるような姿で、恥ずかしさを感じた。（中略）五族協和の実践道場だという塾生活を中心とした建大の中の一人になり始めていた。（中略）なすべき事が何であり、行くべき道がどこであるのかを、こんなふうに反問しながら生きていかなければいけない大学生生活は想像以上の世界だった。」⁴³³

彼は、初年度にハルピン方面へ旅行し、外界と初めて接した時に衝撃を受け、その時まで認識していた世界では別の人間社会が存在しているという事実を理解し始めた。彼はその時の衝撃と感動を次のように記録している。「松花江を両輪船に乗って下りながら巡訪した沿岸の漢民族の部落が、原始社会に近い環境であることを

⁴³⁰ その際、朝鮮半島は全て日本の植民地であった。本論で在学中の韓国同窓を「朝鮮人学生」と記すのは、何らかの政治的意図に発するものではなく、ただ彼らが朝鮮民族であるという事実に着目するからである。

⁴³¹ 安光鎬（一期）、建国大学に在学中、「龜村徹也」と改名され、戦後陸軍准将となり、その後チュニジア大使などを歴任した。

⁴³² 安光鎬・「満洲建国大学」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、2頁。

⁴³³ 前掲と同じ。

見て、人間の根本にある生命力を感じた。多年ロシアが占有していた東支鉄道沿線の白系ロシア人の姿からは、亡国の哀愁を皮膚に痛いほど感じた。（中略）地理、歴史、民俗学の本を耽読し始めたのもその時期で、複数の民族が共存している三千里の荒野のど真ん中に放牧された野生の馬のような自分を発見して、自分は何ものかと探究し始めたのもその頃だ。」⁴³⁴学校生活に関する回想もあった。例えば、共食に関する回想は以下のようなものであった。「食堂に入ってみると、日系・朝鮮系の前には白いご飯が、大陸系の前にはコウリャンのお粥が置いてある。」⁴³⁵

その二：民族協和と民族的軋轢の中で

朝鮮人学生は「日系」の名の下に募集されたが、実際の学校生活では常に「鮮系」と呼ばれていた。日中学生の民族的軋轢の中に巻き込まれた彼らは、差別と遭遇し、民族意識が芽生えたのである。

太仁善⁴³⁶は、戦後日本の建国大学四期生会に参加し、会誌『楊柳』に寄稿したこともあった。彼は、建国大学で感じた民族的軋轢を次のように記している。「日本人〔注：通称内地人〕とか中国人〔注：通称シナ人〕ときけば、本能的に好奇心と警戒心、あるいは敵愾心しか持っていなかった植民地・朝鮮出身の青年にとって、建大で彼らと共同で生活したということは、とても衝撃的な経験だったのである。」⁴³⁷

朝鮮人学生は、民族協和などの問題では、日本人より協和精神に熱心だったと考えられる。金載珍の回想によれば、朝鮮人学生は共食制度に対する真剣な態度を持っていた。彼は次のように回想している。「日本の学生に召集令状が出て、自分たちだけが白いご飯を食べるんだと騒ぎだした時に金相圭君が前に出て、これが協和の精神かと抗議した時の勇氣、私はそれを永遠に忘れない。」⁴³⁸一方、金相圭は建国大学の最終局面について以下のように回想している。彼は参議府のL⁴³⁹参議が談話し

⁴³⁴ 前掲と同じ。

⁴³⁵ 金相圭（新三期）・「2年半の回想」、建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、58頁。

⁴³⁶ 太仁善（四期）、在学中「大永善雄」と改名し、戦後は株式会社汎洋社の副社長を務めた。

⁴³⁷ 太仁善・「建国大学と私」建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、54頁。

⁴³⁸ 金載珍・「追憶の建大」、建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、61頁。

⁴³⁹ 前掲と同じ、名前は詳細不明。

た時、L 参議に米ソと戦っている日本の将来に関して露骨な質問を出した。金は7月には学校から脱走する計画であった。「7月の初め、戦闘帽に脚絆姿で学校からそして満洲から逃げた。金泉市内から遠い田舎の家に引っ越したところに、学校から続けて3回も電報がきた。〈即刻、学校に戻れ。戻らないと除籍処分にする〉というものだった。」

440

しかし安光鎬は、建大における反抗運動に対しては、上述された金泳祿と異なる態度を取っている。彼は、周りの中国人学生が反満抗日運動を行なったことに対して、以下のように簡単に述べている。「漢民族の同学であった崔万賢と李樹森、この二人の学生が重慶に逃亡したという事件がある。何だか裏切られ侮辱を受けたようで、憤慨する気持ちと同時に、痛いところを刺されて慌てるようなそんな衝撃だった。」⁴⁴¹金は、自分の友人関係について、民族意識に従って選択するのではなく、自らの価値観により決めるべきだと考えていた。彼は次のように回想録に記録している。「いわゆる『馬小屋事件』というのがおこり、藤田松二塾頭の影響を受けた学生たちが、塾を離れて農場で合宿し、既成観念に反抗するように新感覚の先覚者を自負する運動があったのもこの時期だ。彼らも自分と時代との、無数の矛盾を克服しようとしたのだが、私の農場への逃避はかれらの理念とは遠かった。なぜならば、私自身は自由や自然主義に憧れる、いわゆる建大生らしくないリベラリストに属していたからだ。私は交友関係も自由奔放だった。」⁴⁴²

その三：朝鮮人教授崔南善に対する思い出

韓国同窓会の回想文集を見ると、大部分の朝鮮人学生は朝鮮独立運動に関心があった。回想録では、さらに建国大学の朝鮮人教授崔南善⁴⁴³に関する語が多い。閔機植⁴⁴⁴は以下のように述べている。「崔南善先生の『不咸文化論』、『儿时朝鮮』、『檀君思想論』のような本は私に大きな感銘を与えてくれたし、民族や歴史についての考えの基礎になったのは否めない。（中略）1941年12月初め、崔南善先生の宅を訪

⁴⁴⁰ 金相圭・「2年半の回想」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、59頁。

⁴⁴¹ 安光鎬・「満洲建国大学」、建国大学在韓同窓会編、『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、3頁。

⁴⁴² 前掲と同じ。

⁴⁴³ 崔南善、建国大学教授

⁴⁴⁴ 閔機植(新三期)、在学中に「野村英治」と称され、戦後陸軍参謀総長、国会議員として歴任していた。

問したことがあった。(中略)先生は『日本はもうすぐ亡ぼされる。その時まで、体を大事にしながら待ちなさい。』『これからは道義が不道義に勝つ。正義が不正社会に勝って、正義国家が不正国家を打倒するようになるから、これこそが正しい歴史になることだろう!』とおっしゃっていた。また、日本がアメリカと戦争を始めた日⁴⁴⁵、『アメリカが勝って日本が負ける。それで、我が国は独立するだろう。』ともおっしゃっていた。」⁴⁴⁶

戦後韓国で陸軍中將にまで昇進し、国務総理に就任した姜英勳⁴⁴⁷も、崔南善先生と面談した経験を語った。「ちょうど官舎にいらっしゃった先生は、うれしく迎えてくださった。一言あいさつをした後、私は率直に心情を吐露した。先生は私の話を聞いた後、『どんな事業でも時間的要素が大事だ。民族更生も同じで、その時期が来るように、あるいは、その時期を作るように、我々は今、可能な限り最善を尽くすしかない。』と静かにおっしゃった。私は若さで血気にはやり、先生と論争でもするかのように、『先生のような民族指揮者たちが、そんなことをおっしゃるから、わが民族は永遠に回生できないのです。自分も知らないうちにドロ沼へ溺れてしまいます。』と無理なことを言った。先生は声を高くして、『では、どうしろうというのだ? 万一、我慢できないなら、我らを苦しめている日本人たちを、お前が殺せるだけ殺して、お前も死ね!』と一喝された。」⁴⁴⁸

その四：学徒出陣の経験。

建国大学の朝鮮人学生1期・2期・3期生は日本軍の学徒兵の経験があった。彼らの中では、終戦後も朝鮮戦争に参戦した学生も多かった。その際の経験と思想的経緯について、彼らは回想文で説明している。

例えば、戦後陸軍参謀総長、国会議員を歴任した朝鮮人学生閔機植の回想によれば、彼は学徒出陣に参加し、終戦後も軍隊で勤務した。「我々は1944年に学徒出陣したが、崔日龍学友(3期)と私は関東軍で同じ大隊にいて、(中略)125連隊第3

⁴⁴⁵ 1941年12月7日

⁴⁴⁶ 閔機植・「建国大学と指揮官」、建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、44-49頁。

⁴⁴⁷ 姜英勳、在学中「竹山英勳」と称され、戦後韓国で陸軍中將に昇進し、国務総理にも任ぜられた。

⁴⁴⁸ 姜英勳(新三期)・「記憶に残る恩師・六堂先生のお話」、建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、40-43頁。

大隊機関銃中隊で訓練を受けていた時には、隣の中隊に現在はソウル大学の教授である陳元重（3期）と朴魯璿がいて、また別の中隊には呉昌祿（2期）と何人かの韓国人学徒兵がいた。（中略）1950年6・25がおきた時、私は歩兵学校の校長をしていたが、歩兵学校というのは陸軍士官学校と陸軍参謀学校とならんでわが陸軍の3大学校である。」⁴⁴⁹彼は、満洲経験が自分の人生に与えた影響について次のように述べている。「満洲事変・中日戦争・太平洋戦争などなど、1945年に大きな世界戦争は終わった。その結果、日本は韓国から去り、日本に占領されていた満洲も中国に吸収されるという大きな変化を迎えたのである。わが国は解放と同時に南北に分断され、独立以降は共産軍が南侵してきて、1950年6月25日にはわが民族にはとても残酷な6・25事変が起きた。（中略）こうして国家が潰れたり再興したり、弱小民族が解放されたり分断されたり、同じ民族同士で戦争したり、無慮35年をこんなふうにごろごろしてきて、休戦後現在に至るまで30年間の戦闘ない対立状態で過ごしてきた。」⁴⁵⁰

同じ頃勤労奉仕と学徒出陣に参加した朴熙晟は、軍事訓練の途中で遭遇した事を次のように回想している。「（1944年）10月下旬に延吉の陸軍部隊で軍事訓練を受けた。たくましい韓国婦人が頭の上に大きな荷物をのせ、背中に子供をおんぶして、両手に荷物を持って歩いていくのを見たが、それは数え切れないほどたくさんものを背負った受難の韓国人を象徴しているようで胸が痛かった。」⁴⁵¹

⁴⁴⁹ 前掲と同じ。

⁴⁵⁰ 前掲と同じ。

⁴⁵¹ 朴熙晟、「建大生活の回想」、建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、65頁。

結論

本論文は、満洲日系高等教育機関の戦後同窓会および同窓生の「満洲記憶」の形成と変容を分析し、さらに彼らが、それぞれの国と集団に属しながら、国交回復、国際交流の分野で活躍した原因を考察することを目的としている。本論文では、歴史的事実として存在していた満洲日系高等教育機関に対する、異なる時期、異なる集団における記憶の再構成を分析し、「戦後同窓会」は、それらの集団の記憶が発生する場所であると位置付けた。本論文は、それを検討する過程では、モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」理論及びピエール・ノラの「記憶の場」など関連する歴史社会学的理論を考察した。日系高等教育機関の卒業生の「満洲経験」については、同窓会会報と会誌、塾生日記、回想録、同窓会回想文集などの私家版史料を引用して、同窓生から生み出された「満洲記憶」の発生とその記憶の再構成の過程を分析した。そして、同窓生の「再構成された記憶」が時代と社会に及ぼす影響を歴史社会学的に考察している。

本報告の第一の結論は「同窓会」が「満洲経験」の一つの「記憶の場」であったということである。ノラの「記憶の場」理論によれば、記憶が発生しうる場所はまず出来事を表現する「遺物」である。それは、歴史の波に巻き込まれた集団によって設立され、確立され、構築され、決定され、維持されている。例えば、博物館、アーカイブ、墓、記念品、記念日、祭り、契約書、会議の記録、記念碑、寺院などはすべて、過ぎた昔の永遠の幻覚の証人である。戦後、旧満洲日系高等教育機関の同窓生は、あたかもその「変遷と更新している歴史の波に巻き込まれた集団」のカテゴリーに属した。従って、戦後同窓会が主催した一連の記念活動は、ノラが語る懐かしい感情を満たした「無儀式的な社会儀式」に沿ったものであり、戦後同窓会は、「満洲経験」の象徴として、日系同窓生に帰属感とアイデンティティを与えた。

満洲日系高等教育機関の戦後同窓会は、日本側の同窓生によって運営され、例会だけでなく、幹部の選出、会費の明細の発表、同窓生の名簿の作成と更新なども行った。日常の運営や組織形態だけでなく、慰霊祭、寮歌祭、旧満洲を中心とした訪中団、周年記念日などの祝い事や記念活動はすべて、同窓会自体が「記憶の場」として、満洲記憶を保護し守る機能を有したことを示している。しかし、日本人同窓生のみが定期的に活動する戦後同窓会を創設し、中国人同窓生・韓国人同窓生は自らの恒常的な同窓会

を組織することはなかった。日本における戦後同窓会という「記憶の場」には、当然のことながら、日本人学生のための「満洲記憶」が反映されることとなった。

本稿の第二の結論は、同窓会が個々の同窓生集団の満洲経験による「集合的記憶」を形成する条件を与えたことである。戦後満洲日系高等教育機関の戦後同窓会を考察してみると、満洲経験に関する記述、および各国の同窓生集団と日本同窓会との何十年にもわたる交流活動の内容と形式が「集団的記憶」の理論に非常によく当てはまる。この範疇に従って、所属組織別の同窓会会報・会誌、回想文集を考察すると、すべて特定の集合的記憶を反映しているといえる。同窓生が異なる「集団」に分割されると、個々の集団が異なる「記憶」を持つことを示している。このような多様な「集団」は、それぞれに歴史的事実と特定の性格の「記憶」を「再構成」した。このことが満洲経験に複数の解釈をもたらす。さまざまな国や地域の同窓生が「反満抗日運動」、「勤労奉仕」など特定の歴史的事実、および建国大学の学長・教授などの特定の人物に対して異なる態度を抱いていることを考察した。

本稿の第三の結論は、「集合的記憶」を生み出す集団は、再編成されうる、という事実である。日中国交正常化(1972年)と共に、1970年代後半から建国大学の中国人同窓が建国大学戦後同窓会の活動に積極的に参加するようになった。中国同窓は、子供たちを日本に留学させたり、海外交流活動を行ったりすることで、日本同窓とのネットワークを強化した。中国側からの日本との文化的交流、さらには経済的協力の要請もかなり盛んであった。しかし、1990年代後半に、主として建国大学の中国人同窓生によって書かれた回想文集では、10年前の記憶が失われたかのように、建国大学および満洲記憶が否定的に評価され、日本人同窓との関係も疎遠になってしまった。一方で新京工科大学や旅順工科大学などの理科系の大学では、一部の中国人同窓は在学時から「延安派」に加わり、解放後に中国東北部の軍事工場の接收活動などに直接的に参加したため、戦後には逆に、中国同窓としてよりも実務家として、日本側との関係を築くために日本同窓会と連絡を取り合い、政府と協力しつつ交流活動を行った。

本報告の第四の結論は、同窓会における「集合的記憶」が時代とともに変化したことである。戦後同窓会の活動や同窓会が刊行する一連の資料などは、同窓会集団の社会的記憶と同等である。これとは対照的に、個人の回想録は、個人的な思い出を反映している。従って、戦後の満洲における日本の高等教育機関の同窓会の形成と活動の過程において、歴史的状況の変化と発展に伴い、同窓生の集団が変化すると「集合的記憶」

も変化した。「集合的記憶」の「再構成」は、満洲記憶の変容をもたらした。日中国交正常化(1972年)と日韓国交回復(1965年)を前後して、1960～1970年代、同窓会の活動は日本から海外へと拡大した。中国と韓国の同窓生は日本同窓生との関係を再確立し、戦後同窓会の同窓生集団にも変化をもたらした。この時、同窓会における議論を通じて、満洲経験の評価は、中国人と韓国人の同窓生が承認しうる歴史的観点に近づくことになった。そして、同窓会によって組織された韓国と中国への訪問は、各国の同窓生のネットワークを再構築する一方、同窓生集団の変容と満洲記憶の再構築に貢献した。

本稿の第五の結論は、同窓会の集合的記憶が特定の社会の集合的意識で「再発見」されることが可能である、ということである。建国大学の中国人同窓生の場合、彼らの在学中の「反満抗日運動」は、中華人民共和国建国後の中国社会の日中戦争に対する価値志向すなわち公的記述に適合したため、1990年代には中国政府の所属機関による建国大学に関する回想文集が出版され、それにより中国の同窓生の記憶は「再発見」されたといえる。

本稿の第六の結論は、「記憶の場」は、ある伝統に生きる個人が所属意識を見いだすことができる、つまり社会的集団の一員となる可能性を実感できるシステムである、ということである。そして人々はそこで学び、思い出し、ある文化を共有する。同窓生、特に海外の同窓生は、戦後同窓会に参加し、そこで母校の歴史を学び、覚え、母校の伝統を文化として共有する。集団が物理的に消散してすべてのメンバーが去っても、その過去の経験が伝統として記憶される。たとえば、戦後同窓会の解散後におこなわれたインタビューにおいても、異なる出身地の同窓生が個々の経験にもとづいた自らの「満洲記憶」を有する一方、同窓生として共通する「誇り」と建国大学の伝統に対する懐古が見られた。この記憶のシステムは、異なる集団間での差異を反映しながら、共通認識を形成していった。

最後に、戦後数十年の日本と近隣諸国との友好関係の樹立と発展に際し、同窓会が大きな貢献をなしたことを検討した。同窓会自体が満洲経験を表現する「記憶の場」として機能し、数十年続くその記念機能により、さまざまな社会で同窓生に満洲経験の「集合的記憶」を呼び起こす役割を果たしていた。この「記憶の場」が存在できたのは、戦後数十年にわたる日系戦後同窓会が中断せずに継続して活動したためである。満洲経験のこの「記憶の場」は、さまざまな国や地域の同窓生の「集合的記憶」の変容をマクロなレベルで促進し、「再構成された満洲記憶」は、異なる、または敵対的な立場にあつ

た同窓生を助けて、新しい時代、新しい社会に適合し、新しいつながりを生み出した。
このようなつながりは、かつて日中、日韓の間の国際関係に、民間の分野での良好な相
互作用と雰囲気をもたらした。

文献目録

蘭桜会福岡支部 『支部便り』 No. 3

新京工業大学応用化学科化人会 『化人』 復刊号—No. 12 1977-1997 年

新京工業大学応用化学科化人会 『化人会報』 No. 1-55 1984-2003 年

新京工業大学応用化学科化人会 『母校創立 60 周年校友聯誼会参加訪中団感想文集』

『機友会 会員通信抄』 No. 1-16 1991-1999 年

『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌 北辰高く—青春の新京時代と追想の日々』 1998 年 12 月

採鉱三期会 会報『杏花』 No. 1-10 1994-2004 年

新京工業大学卒業生鈴木作良君句集刊行会 回想録『桜』 1983 年

旅順工科大学同窓会編、『旅順』、51-136 号 1966-2010 年

旅順工科大学興亜寮雑誌部編、『うづら』、1938-1943 年

旅順工科大学同窓会六十年史編纂委員会編、『旅順の日』 1973 年

旅順工科大学同窓会編、『旅順工科大学開学 90 周年記念 平和の鐘』 2000 年

興亜技術同志会編、『興亜』 1931-1943 年

興亜技術同志会編、『興亜』 No. 24-49 1955-1965 年

掉尾会文集編集委員会 『掉尾を飾る—最後の旅順工科大学予科生の記録』 1990 年

建国大学同窓会編 『建国大学史資料』 創刊号—第 5 号 1966-1971 年

建国大学同窓会編 『建国大学同窓会会報』 No. 1-56 1954-1956 年

建国大学同窓会編 『歓喜嶺 1980 年』 建国大学同窓会 1980 年

建国大学同窓会編 『歓喜嶺遙か』 上下 建国大学同窓会 1991 年

建国大学同窓会編 『写真集 建国大学』 建国大学同窓会 1986 年

建国大学同窓会編 『日本で歩み』 非売品 2007 年

建国大学同窓会編 (続) 『幻の学園・建国大学抗日曲折行——建国大学を出てから』

聶長林 記; 岩崎宏 日本校訂 2000 年

建国大学 1 期生会 『会報』 No. 1 1958 年 7 月

建国大学 1 期生会 『歓喜嶺 建国大学一期生文集』 建国大学 1 期生会 1989 年
 建国大学 2 期会編 『二期』 建国大学 2 期会 1989 年
 建国大学 3 期会編 『建国大学三期会会報』 1-42 号 1948-1995 年
 建国大学 4 期会編 『楊柳』 建国大学 4 期会報 1-27 号 1948-1995 年
 建国大学 6 期生文集 『曙きざす』 1981、1986 年
 建国大学 9 期生刊行世話人会 『建国大学 9 期生』 1995 年
 作田庄一 『道を求めて』（自伝）作田庄一 『道の言葉』 全 6 巻第 6 巻 京都『道の言葉』刊行会 1963 年
 藤井歓一著 湯治万蔵編 『ひたぶるに、真実に＜藤井歓一建国大学日記抄、その他＞』 非売品 1992 年
 建国大学同窓会編 『同学連歓 1』 1993 年
 建国大学同窓会編 『同学連歓 2』 1997 年
 建国大学 7・8 期会編 『八旗』 建国大学 7・8 期会報 1-10 号 1978-1988 年
 建国大学 7 期会編 『朋友們』 建国大学 7 期生会会報 創刊号—第 5 号 1990-1996 年
 湯治万蔵 『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会 1981 年
 山田昌治 『興亡の嵐——建国大学崩壊の手記』 かんき出版 1980 年

 大同学院史編纂委員会編 『碧空緑野三千里』 大同学院同窓会 1972 年；
 大同学院史編纂委員会編 『大いなる哉、満洲』
 大同学院史編纂委員会編 『旺なる吾等』
 大同学院史編纂委員会編 『渺茫としても果てもなし——満洲国大同学院創設五十年』 1987 年
 大同学院同窓会編 『友情の架橋・海外同窓の記録——満洲国大同学院創設五十五年記念』 1986 年
 大同学院同窓会編 『久遠——創立六十年記念』 1999 年
 大同学院同窓会編 『物語 大同学院・民族協和の夢にかけた男たち——創立七十周年記念』 創林社 2002 年
 大同学院 6 期生回想録編纂委員会 『大同学院 6 期生回想録』 1972 年

 ハルピン工業大学同窓会 『ハルピン工業大学写真集』 非売品

ハルビン工業大学採鉱・冶金学科同窓会 『ハルビン工業大学採鉱・冶金同窓会会報』
ハルビン工業大学採冶学科同窓会 『ハルビン工大採冶会誌』 No. 1-4 1991-1995 年

長春市政协文史資料委員会 『回忆伪滿国建国大学』 1996 年
長春工業大学 『長春工業大学校友紀事』 1996 年
長春市政协文史資料委員会 『回忆伪滿新京工業大学』 1994 年

滿洲医科大学関連史料

滿洲医科大学一覽 1934 年

滿洲医科大学輔仁会編 『輔仁』 No. 55-64 1977-1985 年

『柳絮地に舞ふ(追補)-戦後の輔仁会』 1984 年

『鴉群』 No. 1-3 1973-1975 年 No. 55-59 1995-1998 年

輔仁会編：『滿洲医科大学 40 周年記念誌』 1952 年

『滿洲医科大学開学 70 周年祝典』 1980 年

滿洲国立佳木斯医科大学関連史料

滿洲国立佳木斯医科大学同窓会編 『万里雲濤——滿洲国立佳木斯医科大学記念文集』 1980 年

滿洲国立佳木斯医科大学同窓会編 『滿洲国立佳木斯医科大学記念資料集』 1978 年

*蘭仁会⁴⁵²

蘭仁会 『蘭仁会史』 非売品 1981 年

・文書館史料・同時代文献

赤木光次郎(編)建国大学研究院月報、(創刊号、第 2、4-7、9-12、14、16、17、22、23、25、26、28、29 号)1940-1943 年。

建國大學塾(編)『建國大學塾月報』、1942-1943 年。

建國大學塾(編)『黎明；建國大學塾第十四塾塾雑誌』、1-5 号、発行年月日不明

⁴⁵² 蘭仁会は、滿洲国国立大学チチハル開拓医学院、滿洲国国立大学ハルビン開拓医学院、滿洲国国立大学北安開拓医学院、滿洲国国立大学龍井開拓医学院の 4 学院の教職員及入学者によって結成されている会である。

建国大学(編)『興京二道河子旧老城』、1939 年

大同学院同窓会(編)『大同学院名簿』、1944 年

・日記

森崎湊『遺書』(図書出版社、1971 年)。

藤井歓一『ひたぶるに真実に:藤井歓一建国大学日記抄 その他』(藤井諄一、1992 年)

・回想録

河田宏『満洲建国大学物語:時代を引き受けようとした若者たち』(原書房、2002 年)。

小川之夫『愚直の青春二、一二八日 ハルピン学院——シベリア分校に学んで』(恵雅堂出版株式会社、1988 年)。

小林金三『白塔:満洲国建国大学』(新人物往来社、2002 年)。

後藤春吉編『師弟愛は民族を越えて-清水三三随筆集 ほか-』(清水巖発行、1984 年)。

孫平化『中日友好随想録(上)(下)——孫平化が記録する中日関係』武吉次朗訳(日本経済新聞出版社 2012 年)。

孫平化『日本との 30 年——中日友好随想録』安藤彦太郎(講談社、1987 年)。

百々和『道芝折々の記』(三和書房、2007 年)。

西村十郎『楽久我記:満洲建国大学わが学生時代の思い出』(宝塚:西村十郎、1991 年)。

斉木道吉『苦楽人生:回首往時』(建国大学同窓会、2007 年)。

洪椿植『旧満洲国建国大学出身の韓国人洪椿植が語るハッキョレ(はらから)の世界』(洪椿植、1999 年)。

前川恵司『帰郷:満洲建国大学朝鮮人学徒青春と戦争』(三一書房、2008 年)。

水口春喜『大いなる幻影:満洲・建国大学』(光陽出版社、1998 年)。

聶長林『続「幻の学園・建国大学」抗日曲折行:建国大学を出てから/聶長林記』(学伸社、2000 年)。

山田昌治『興亡の嵐:満洲・建国大学崩壊の手記』(かんき出版、1980 年)。

梁世勳『ある韓国外交官の戦後史——旧満洲「新京」からオホまで』 梁秀智訳(鈴さわ書店、2007 年)。

私家版史料

建国大学一期会(編)『建国大学一期会会報』、1958 年。

建国大学学友誌編集委員会(編)『二期文集(続編):建国大学第二期同学学友誌』、
2001 年

建国大学五期生会誌編集委員会(編)『楊柳(どろやなぎ) ; 建国大学五期生会誌』、
1959-1981 年

建国大学三喜会会誌編集委員会(編)『建国大学三期会会報』、1948-1962 年。

建国大学三喜会会誌編集委員会(編)『三喜会会誌』、1959-1982 年

建国大学新三期会(編)『建国大学元期会会報 ; 建国大学新三期会会報』、1982-1985
年

建国大学同窓会・建国大学史編纂委員会(編)『建国大学史資料』、1966-1975 年

建国大学同窓会 藤森孝一, 鈴木昭治郎編『建国大学年表要覧』、2007 年

建国大学同窓会(編)『一心会会員名簿:康德十年十一月現在』、1943 年、建国大学同窓
会新京本部

建国大学同窓会(編)『歓喜嶺遙か:建国大学同窓会文集』、1991 年

建国大学同窓会(編)『建国大学同窓会会報』、1954-2010 年。

建国大学同窓会(編)『建国大学同窓生名簿』、1952-1998 年。

建国大学同窓会(編)『建国大学同窓会日本での歩み』、2007 年

建国大学同窓会(編)『同学聯歡』、1993-1997 年

建国大学同窓会(編訳)『回想建国大学:中国学生の手記』、2006 年

建国大学同窓会(編訳)『歓喜嶺:満洲建国大学在韓同窓文集(日訳)』、2004 年

建国大学七期生会誌編集委員会(編)『朋友們』;1991-2005 年

建国大学二期会記念誌編集委員会(編)『二期:建国大学入学五十年記念誌』、1989 年

建国大学四期生会誌編集委員会(編)『楊柳(どろやなぎ)』、1991-2009 年

建国大学四期生同期会誌編集部(編)『慢慢的』、1959-1977 年。

興亜技術同志会(編)『興亜』、第 20-50 号、1954-1966 年。

20(1954. 10)、21(1955. 1)、24(1956. 1)、25(1956. 5)、26(1956. 10)、28(1957. 6)、
30(1957. 11)、32(1958. 8)、33(1958. 11)、34(1959. 1)、35(1959. 6)、38(1960. 6)、

39(1960. 10)、40(1961. 1)、41(1961. 7)、42(1962. 1)、43(1962. 6)、44(1963. 2)、
46(1964. 1)、47(1964. 7)、48(1965. 1)、49(1965. 9)、50(1966. 1)

国立大学ハルビン学院同窓会編『ハルビン学院史(1920-1945)』、1987 年。

国立大学ハルビン学院同窓会編『ハルビン学院物語——ハルビン学院史補遺』、1995 年。

国立新京工業大学—中国人学生の記録—』、1997 年

新京工業大学同窓会「長春工業大学中国校友記事」翻訳委員会 中村孝訳 『旧「満洲」

新京法政大学同窓会劉草会(編)『南嶺慕情』、1994 年

福守一男(編)『曙きざす:建国大学七期生文集』;1981 年

福守一男(編)『曙きざす:建国大学六期生文集』;1986 年

旅順工大同窓会(編)『平和の鐘——旅順工科大学開学九十周年記念誌』、2000 年。

旅順工大同窓会(編)『旅順の日——旅順工大創立六十周年記念誌』、1970 年。

・刊行史料

外務省アジア局中国課監修『日中関係基本資料集 1949-1997 年』(霞山会、1998 年)。

建国大学同窓会(編)(湯治万蔵主編)『建国大学年表』、1976 年

・歴史学研究文献

大類善啓『ある華僑の戦後日中関係史——日中交流のはざまに生きた韓慶愈』(明石書店、2014 年)。

佐藤量『戦後日中関係と同窓会』(彩流社、2016 年)。

竹中憲一『大連、アカシアの学窓——証言、植民地教育に抗して』(明石書店、2003 年)。

田嶋信雄『ナチズム外交と「満洲国」』(千倉書房、1992 年)。

田中恒次郎『満洲における反満抗日運動の研究』(1997 年)。

中嶋 毅「ハルビン法科大学小史(1920-1937)——中国在住ロシア人の知的空間
(上)(下)『思想』 (上)(952) 62-82, (下)(953) 147-166 2003 年

橋本 学「日中戦争期・中国の高等教育に関する一考察—国民党治下における高等教育機関の動向を中心に」大学論集 / 広島大学高等教育研究開発センター 編（通号 26）1996 p. 63—91 東広島：広島大学高等教育研究開発センター。

服部龍二『日中国交正常化——田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』（中公新書、2011 年）。

浜口裕子『満洲国留日学生の日中関係史：満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』（勁草書房、2015 年）。

ピーティ、マーク・R.、大塚健洋、関静雄、大塚優子訳『「日米対決」と石原莞爾』（たまいらぼ、1993 年）。

松浦正孝（編）『アジア主義は何を語るのか：記憶・権力・価値』（ミネルヴァ書房 2013 年）。

三浦英之『五色の虹』（集英社、2015）。

矢内原忠雄『満洲問題』（岩波書店、1934 年）

山根幸夫『建国大学の研究：日本帝国主義の一断面』（汲古書院、2003 年）

山室信一『キラー満洲国の肖像 増補版』（中公新書、2004 年）。

Duara, Prasenjit Sovereignty and Authenticity: Manchukuo and the East Asian Modern, Oxford, Rowman & Littlefield, 2004.

Sewell, Bill ., Constructing Empire: The Japanese in Changchun, 1905-45, University of British Columbia Press, 2019.

林志宏，《地方分權與「自治」—滿洲國的建立及日本支配》，黃自進、潘光哲主編，《近代中日關係史新論》（新北：稻鄉出版社，2017），頁 643～68。

林志宏，《惲毓鼎澄齋日記》所見清移民的政治認同，《兩岸發展史研究》第二期，頁 229～246，2006 年 12 月，國立中央大學歷史研究所

林志宏，《口述歷史及其侷限：以戰後接收東北的回憶為例》，《東吳歷史學報》，第三十六期，頁 71～105，2016 年 12 月

林志宏，《王道樂土—清遺民的情感抵制和參與「滿洲國」》，《新史學》，第十八卷第三期，2007 年 9 月

정상우(Jeong Sangwoo), 식민주의 역사학으로서 만주건국대학에서의 역사 연구
(A Study on the History in Manchu Genkoku University as the Historiography
of Colonialism) 동북아역사논총(Dongbuga Yeoksa Nonchong)(64), 2019.6,
125-169

윤명숙, 중국 당안관 자료 현황과 자료 해제 일본군 위안부 자료를 중심으로
동북아역사논총(中国档案馆资料现状与资料解除:以从军慰安妇问题为中心)
(Dongbuga Yeoksa Nonchong) (59), 2018.3, 232-252

李 東 振 해방 직후 長春의 조선인 —기억과 정치 사이 大東文化研究 제 83 집
(解放直后長春의朝鮮人——记忆与政治之间,大东文化研究第 83 辑)

・社会科学研究文献

アスマン、アライダ^々、安川晴基訳『想起の文化——忘却から対話へ』(岩波書店、2019
年)。

アルヴァックス、モーリス、小関藤一郎訳『集合的記憶』(行路社、1989 年)。

石田雄『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』(明石書店、2000
年)

岩崎稔・成田龍一・島村輝『アジアの戦争と記憶——二〇世紀の歴史と文学』(勉誠出
版、2018 年)。

黄順姫『同窓会の社会学——学校的身体文化・信頼・ネットワーク』(世界思想社、
2007 年)。

Anderson, Benedict, Imagined Communities: Reflections on the Origin and
Spread of Nationalism, London. New York, 1983

Erll, Astrid, translated by Sara B. Young, Memory in Culture, Palgrave
Macmillan, 2011

Huntington, Samuel P. The Clash of Civilizations and the Remaking of World
Order, New York, 1996.